
猫の手貸すよっ！

おかやまかずひと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の手貸すよっ！

【Nコード】

N7026S

【作者名】

おかやまかずひと

【あらすじ】

主人公の「ギン」は、人に変身できる妖怪・ネコマタ。

大好物の高級猫缶をご褒美にもらえれば、飼い主である「冴香お嬢様」のためにどんな難事件でもスパッと解決。

今回は、第二次世界大戦の折に歴史の闇に消えた「ヒエロニウムスの壺」と呼ばれる遺物の謎を追い、浅草の町を縦横無尽に駆け回る！

ところが、金髪の美少女コマンドーや、闇社会の武器商人が壺の争奪戦に加わるわ、壺にまつわる謎と、隠されたギンの過去までもが交錯するわで、事態は二転三転。

ギンは、遠い昔にかわした大切な約束と、目の前にある大切な物を守るため、自らその渦中に飛び込んでいく。

果たしてギンは、全ての難題を丸く収めて、ご褒美の猫缶を無事にゲットできるのか？

男性も女性も分け隔て無く楽しめる、全年齢対応の痛快娯楽活劇。困ったときには、「猫の手貸すよっ!」

プロローグ

大提灯が、暴れていた。

ここは、東京都台東区浅草一丁目。

そこで『大提灯』と言えば、誰しも思い浮かべるものは、一つだけであろう。

台東区が、いや、日本が世界に誇る江戸前文化の中心地にして象徴たる、金龍山浅草寺きんりゅうさんせんそうじの雷門 正式名称、風雷神門ふうらいじんもんにぶら下がっている、アレだ。

直径3・3メートル。全高3・9メートル。重量700キログラム。ほぼ、軽自動車と同じ重さの巨体は、まさに『大提灯』の呼び名に相応しい。

そんな、浅草のシンボルたる大提灯が今、
「すっごい暴れてるよ」
暴れているのである。

提灯としてはごく一般的な蛇腹状の体を、大きく縮めたかと思うと、スプリングが弾ける要領でもって、勢いよく元に戻る。加えて、左右への激しい捻り。門と提灯とを繋ぐ留め金がある切なげな悲鳴は、大提灯が身をよじる度にいや増すばかりであった。

そんな様子を、雷門のはす向かいに建っている、都市銀行の支店が入ったビルの屋上から見下ろしていたギンは、あくびとともに首をのけ反らせた。

次いで、耳の根本に付けているピアス状の超小型通信機を後ろ足で一撫でして、言う。

「あーあー、ヤな音。もう千切れるね、あれ」

『現場の映像は、わたくしの方でもチェックしています。いちいち報告していただかなくても結構ですわ』

と、上質なガラスの縁を爪で弾いたような、透明感のある美しい

声が聞こえた。

「あつ、そう？ さすが、さえちゃん」

『お世辞も、実況中継も結構ですから、早く取り押さえなさい。可及的速やかに』

「めんどくさいなあ……」

『報酬はきちんと出しているんですから、そちらも誠意を見せてほしいですわ』

「……ちよつと試みてみただけだつて」

言つてギンは、大きくまた首を伸ばして眼下に目をやる。と、

「So Cool! This is Japan!」

「Wao! It's Wonderful! Great!」

観光客と思しき外国人たちの放つ歓声が聞こえてきた。どうも、アトラクションか何かと勘違いしているのだろう。その一方で、そんなアトラクションなど存在しないことを知っている日本人たちからは、驚きと困惑に満ちた声があがる。その、はたから見ると何ともシニールなコントラストの中に、

「離れて！ 離れて下さい！」

上ずつた別の声が混ざる。目をやると、雷門前の交番から、数人の制服警官が飛び出してくるのが見えた。

それと、ほぼ同時であつた。

今まで以上に激しく、耳障りな金属音とともに留め金が弾け飛び、戒めを破つた大提灯が、砂煙を上げ、門の下に敷き詰められていた石畳の上に着地した。

『天下の大妖怪である猫又様の実力、楽しみにしていますわね』

「え〜」

『もうマスコミには手を回しましたわ。今この場で何が起こつても、絶対に新聞やテレビでは報道されませんから、存分におやりなさい』

「さえちゃん、今はネットの時代だよ？ テレビ止めても、すぐに YouTube に……」

『いいから、さっさとやるー！』

きいん、と耳から頭のとっぺんに抜ける怒声が響いた。

その声に押し出されるように、ギンの四肢がコンクリートを蹴るしなやかに伸び上がった体が、屋上を囲う鉄柵を軽々と跳び越え、ビルの狭い隙間を勢いよく落下していった。

地面まであと五メートルというところで、ギンは体の向きを変えて前足を伸ばした。そのまま、こともなげに着地して走り出す。

道行く人々の注目は、狂乱の屈伸運動を繰り返す大提灯に集中している。そんな彼らの足下を、にゆるり、と二股に別れた尻尾を振り振り走り抜けていく、一匹の三毛猫がいたことなど、誰も気付いてはいない。

ACT 1 猫の尻尾が壺を盗る

縮む。伸びる。そして、跳ぶ。

己の蛇腹構造を良く分かっている、実に理に適った動作であった。何枚もの和紙を積み重ね、貼り合わせ、真っ赤に染め抜かれた風防は、さながら躍動する筋肉がごとき、である。

ズン、という音とともに、着地の衝撃で発生した風圧が、事の成り行きを見守っていた群衆の顔を、彼らを制止していた警官たちの背中を、さらにはギンの鼻面とをなぶりながら、周囲に拡散していった。次いで訪れる、一瞬の静寂。

「……に、逃げろっ！」

その静寂の中で、誰かが放った一言が、呼び水になったように見えた。

再び、大提灯が動き出す。蛇腹を縮め、伸び上がり 跳んだ。

群衆の目の前で、軽々と二メートルほどの高さまで跳び上がった大提灯が、門の脇に店を構えていた土産物屋の軒先に700キロの巨体を突っ込ませたのを皮切りに、あとはもう、雪崩を打つようにしてパニックが伝染していく。

「あゝあ」

ギンは、そんな人間たちの右往左往ぶりを、どこか遠くの出来事のように見つめていた。

『何をのんびり構えているんですの。報酬、払って差し上げませんわよ』

と、間髪入れずに、また小型通信機からガラスを弾いた声が聞こえた。

「あーい」

『まず、仲見世なかみせ通りに入られないこと。手前の雷門通りは、既に封鎖させました。吾妻橋あずまはしの方に追い込んで、隅田川に落としてしまえば、被害の拡大は防げますわ。よろしい？』

「言つは易く行つは難しつて、昔の人は言いました」

しぶしぶと返事をしたギンが取ったのは、実に大雑把で安易な手段だった。

軽く前足で地面を引つ搔いて、足場の具合を確かめたかと思うと、「んにやっ!」

かけ声一つ、店の軒先から体を引つこ抜いた大提灯に向かって、飛びかかったのである。

大提灯の骨組みは、木や竹ではなく鋼材で出来ている。前脚が大提灯にぶつかった瞬間、その硬い感触が肉球を抜けていって、ギンの小さな体は、あっさりと跳ね返されてしまう。だが、元よりそれは、ギンも承知の上であった。

跳ね返された勢いも利用して、空中でムーンサルト二回捻りを決めたギンは、最初に跳躍した場所と寸分たが違わぬ位置にふわりと着地した。

『どういづつもりですか?』

「挨拶(あいさつ)、挨拶。……ほら、こっち向くよ」

ギンは、茶と黒の縞模様をした二股尻尾を、大提灯に誇示するように揺らして見せた。

案の定、大提灯は、尾を揺らして佇むギンの方に振り向いた。

実際の所は、前も後ろもない提灯が、振り向くというのはおかしな表現である。が、無残に崩壊した土産物屋の店頭に向いていた「雷門」の文字が、ゆっくりとギンの方に向いてくる様は、ギンにはそうとしか形容できない。そればかりか、

「……やっぱ、こっち見てる」

『何ですって?』

「ちゃんと、ボクに気付いてくれたってこと。ボクの方、見てるよ」
目など無いはずの大提灯から、ギンは確かに視線を 正確には、ギンのことを認識しようとする「意志」のような物を感じ取っていた。無意識のうちに、ギンのヒゲが激しく上下に振れる。猫にとつてのヒゲは、目や耳以上に鋭敏えいびんな感覚器官だ。その感覚を信じるこ

とに、ギンは、何の疑いも持っていない。

「……来い」

ギンは、呟いた。奇妙ならみ合いが続く。

更に大きく二股の尻尾を揺らし、ギンは、誘うようにその場を飛び退いて見せた。

果たして、大提灯は、その誘いに乗ってきた。

縮み、伸ばし、跳ぶ……。動作を繰り返すごとに、動きが淀みないものになっている。

「そうそう、こっちこっち！」

もう一步飛び退きざま、ギンはちらりと提灯の外れた雷門本体の方に目をやった。

「皆さん、落ち着いて仲見世通りの方へ！」

警官たちの声が聞こえてきた。大提灯がギンの誘いに乗って、大きく雷門通りに移動したことで、幾らか冷静さを取り戻したらしい。まずは、これでよし。ギンは、小さく頷く。次いで、素早く踵《きびす》を返し、既に警察の手によって封鎖がなされている雷門通りを、一路、隅田川方面に向かって走り出した。

時に速く、時に遅く。ジグザグに。かと思えば、戻るようなそぶりを見せ、また走る。

大提灯の方も、ギンのその多彩な行動パターンに何かを刺激された様子で、一心不乱に追いつがっている……。ように思える。

「あいつ、ボクを追っかけることに決めたい」

『それは結構。こちらも、国道六号から吾妻橋一帯までの道路封鎖は完了しましたわ。何とか、スーパードライホール手前くらいまでで決着を付けなさい』

「ホール？ ……ああ、ウンコビルのことか」

『……どうしてあなたも、街の皆さんも、そこだけは譲らないのか、理解に苦しみますわ』

「そりゃねえ……。庶民目線は大事だよ？ さえちゃん」

『痛み入るご忠告、涙が出そうですわ』

走りながらやりあっていると、ギンのすぐ間近で、ズシンズドンと地面が揺れた。

思わず、ギンが後ろを振り返る。想像以上に大提灯が距離を詰めて来ているのがわかり、ギンは、泡を食ったように走るスピードを上げた。

目前に、唱歌しやうかでも有名な隅田川が横たわっている。そこにかかっているのが、朱塗りの欄干が目を引く吾妻橋あづまはし。橋を渡れば、ピアジヨッキに注がれたビールを象ったと言われる、ビール会社の本社ビル。その隣にあるのが、件《くだん》の、少々形容に困る形状をした金色《こんじき》のオブジェを頂いた、スーパードライホールである。

完成当初は、こんな下町にモダンな建物が出来たと話題になり、雷門と並ぶ浅草の顔と呼ばれたものだが、それも随分と昔のお話。今や、スーパードライホールに取って代わる巨大なランドマークが別にある。

ふと、顔を上げたギンの目前、スーパードライホールの更に向こう側、ほとんど何かの冗談のように、巨大な塔が天を突いてそびえ建っているのが見えた。

その塔こそ、数ヶ月後の完成を目指して着々と建設工事が進んでいる、次世代テレビ電波塔　東京スカイツリーである。

完成の暁には、その高さは600メートルを超えらるという。これといった高層建築の存在しないこの界限において、その存在感たるや、まさに圧倒的。まだ、工期の半ばを過ぎたばかりだというのに、高さは既に現行の東京タワーを超え、浅草どころか、隣接する千葉や埼玉県からも見ることが出来るという、とんでもない建物である。そんな、下町の新たなシンボルに見下ろされる格好のギン、足を速めて既に橋の途中にまで差し掛かっていた。反転攻勢に出るには、ちょうど良いポジションだ。

「本当に、川に落つことすんでいいんだね？」

最後に確認を取るように、ギンは言った。

「構いません。けが人を出さないことが、最優先ですわ」

「了解っ！」

ギンは、前脚に力を溜めた。アスファルトに擦れた爪から火花を飛ばしながら、ほぼ直角に右へ跳んだ。そのまま、赤い欄干に駆け上り、

「ナアーオツ！」

天を仰いで、犬や狼ならぬ、猫の遠吠えで大提灯に向かって更に自分の存在を誇示して見せた。愛らしく尻尾を振って誘うのも忘れない。

ここまで、「蛇腹ジャンプ」の繰り返しで、自分を追いかけてきた大提灯の行動に、ギンは、猫であるが故に一つの予測めいたものを抱いていた。

目の前で猫じゃらしを振られれば、どんな猫でも思わず飛びついてしまうのと同じ感覚と言ったら良いだろうか。意志を持つ大提灯からは、動く者を追わずにいられない、本能に近い何かを感じるのである。

「ほらほら、こっちだよー」

その本能を更に激しく煽り立てるべく、細い欄干の上で軽やかなステップを踏む。

やはり、「雷門」と大書《たいしよ》された面を「前」として認識しているのだろうか。その場で二度ほど小さくジャンプして方向を整える大提灯。

（かかった！）

それを見て、予測を確信へ変えたギンは、ためらうことなく欄干から川に向かって身をおどらせた。当然、大提灯もギンを追って真昼の陽光煌めく隅田川へ……。

3・3メートル、700キロの身投げが巻き起こした水しぶきは、それはそれは派手な物であった。ほとんど、爆発音にも等しい水音が同時に響き渡る。

一方のギンはと言うと、実際には川へダイブなどしていなかった。

そう見せかけて、欄干から伸びる鉄骨に、二股の尻尾をくるりと巻き付け、逆さまにぶら下がっている。

『ご苦労様。まだ動き回りそうな気配はありますか？』

「や、もうズブズブ沈んでくださいっばいよ。さすがにもう動けないんじゃない？」

『油断は禁物ですわ。まだ暴れるようなら、別の手を……』

「あ！ いや、待って！」

『どうしましたの！？』

「何か出た！」

『え？』

ギンの眼下、大提灯が、隅田川の水底へと沈んでいく。提灯の上部に空いた穴から、ゴボゴボと水が入り込み、そのスピードを加速度的に増していく中で、異変は起こった。

一瞬、大提灯の体がほのかに光ったかと思うと、侵入してくる水に押し出されるように、サッカーボール大の光る玉のような物が飛び出してきたのである。

「そつちでも見えてんでしょ？ 今、飛んでる」

『さすがに、橋の下にまで監視カメラはありませんわ。きちんと状況を説明なさい』

説明しろと言われても、ちょっと困る。

何と言って良いものと迷っているうちに、提灯から飛び出して来た光の玉は、沈みゆく提灯の周囲をグルグルと飛び回りはじめた。そのうち、丸かった玉の形が少しずつ崩れ始め、崩れた輪郭が尾を引くような格好になったのを見たギンの脳裏に、閃くものがあった。

「ああっ！ あれ、あれ！ ウンコビル！」

『ウンコはもういいですわ。簡潔に説明する！』

「違っつて！ ……や、違くない！ ウンコビルに乗っかってるやつあるでしょ？ あれみたいなのが、提灯から出てきて飛び回ってるの！ 人魂みたいに」

『ビンゴ！ それですわ』

声とともに、パチンと指を鳴らす音が聞こえた。

「あ、動いた」

ギンは言った。

光るウンコ……もとい、人魂状の何かが、まるで大提灯への未練を断ち切るかのように、すいっと動いた。そのまま、ややだらしない感じで尾を引きながら、隅田川の上を元来た雷門方面へ戻っていく。

「あゝ、何かどっか行く」

またギンが言うと、ふーっと、長く息を吐く音が聞こえて、

『あなたまさか、ここまで来てばーっと見送っているなんてことはありませんわよね』

耳から腹の底に落ちて溜まっていくような、重い声色を、通信機が届けてきた。

「や、やだなゝ、さえちゃん。いくらボクだって、そんなねえ」

言われて初めて、ブランコを漕ぐ要領で体を揺すり始めたギンは、勢いがついたところで尻尾を欄干から放して宙返り。橋の上に体を戻して、元来た道を、てつと駆けていく。

「……………そう言えばさ」

走りながら、ギンは思い出したように口を開いた。

『何ですの？』

「さつき、さえちゃん、ウンコって……。やっぱ、さえちゃんも、アレってウンコに……………」

『……………ひっぱたきますわよ？』

「言ったじゃん」

『わたくしが、そんな下品な言葉を使うわけがないでしょう。聞き間違いです』

「言っただって」

からかうように、ギンは言った。ややあつて、

『六号線の交通封鎖、解除させましたわ。ダンプに撥《は》ね飛ば

されても結構ですけど、それでアレを見失ったら承知しませんわよ』
耳の中に、氷の棒を突っ込んでくるような声があった。ギンの尻尾
が、くたりと下がる。

ウンコのような、人魂のようなそれは、ちょうど今、封鎖を解か
れた国道六号線の上に差し掛かるうとしているのが見えた。

「……戻ってくる？」

変化が生じたことは、胸の奥が、ぐずぐずと蠢いたこと^{うごめいたこと}で分かった。

ティアナ・アーレンスは顔を空に向けて立ち止まった。

ツーサイドアップに作った髪が流れる。最上級の正絹^{しょうけん}を、一本ずつ朝焼けの光で染め上げたかと思うほどの目映^{まばゆ}いプラチナブロンドだ。

汗の浮き出た額に、数本の前髪が張付くのを、わずらわしげに一度かきあげる。ここ二時間、見知らぬ土地を走り通しだったのだ。息を弾ませ、ティアナは視線を街に戻した。

「狼の目」とも言われる琥珀色をした瞳で、雑踏^{ざつ}を行き交う人々に視線を飛ばす。視界に入る物すべてを警戒する。いつ、どこから襲撃を受けるか分からないからだ。

しかし、今のところは彼女とすれ違う誰からも危険な気配はしなかった。代わりにと言うわけでもないが、不躰^{ぶじつげ}な好奇の視線が何度も飛んでくる。

無理もなかった。年端も行かぬ外国人の少女が、息せき切って雑踏の中を駆け回っていれば、嫌でも目に付く。それに加え、黒地のTシャツとキッズ用のスイングトップ、動きやすさを最優先した綿のハーフパンツ、足下を固めた頑丈なトレッキングシューズ……まるで少年のような服装のすべてが埃^{ちり}っぽく薄汚れ、所々が綻んでいるとあっては、人目を引かない方がおかしい。

だが、ティアナはそうした視線をことごとく無視し、服装同様に少年のような厚みしかないTシャツの胸元に手を当てた。しばし、息を整える。

と、前方から歩いてきた二人連れの男女が交わす会話が、何とはなしに耳に入ってくる。

「さっきの、大通りの騒ぎ何だったの？ パトカーもいつぱい出てきてさ」

「ちらつと聞こえた話だと、雷門の提灯を吊つてた鎖が切れて、落っこちたとか何とか」

「え、やだ。事故とか？ 怖い」

わざとらしく声色を作った女が、男の腕に手を回した。

その言葉に引っかかるものを感じ、ティアナは、二人連れに声をかけてみた。

「すみません。その事故のあった場所って、どこですか？」

ティアナの口から滑り出してきたのは、発音もしっかりした流暢《りゅうちょう》な日本語だった。

それでも、急に見知らぬ外人に声をかけられた格好になった二人連れは、驚いた様子でティアナを見た。特に女の方は、彼との楽しい一時に割って入られたのが気に食わないのか、それとも薄汚れた服装が気になるのか、やけに鋭い視線を飛ばして来る。

そっちの方は、軽やかに無視を決め込むことにし、ティアナは、男の方にターゲットを定め、にっこりと微笑んで見せた。

「君、雷門に行きたいの？」

その極上の笑顔が功を奏してか、男は、存外に優しげな声で尋ね返してきた。

「そう、カミナリモン。お母さんと待ち合わせしてたんだけど、迷っちゃって……」

我ながら、作っているなと思った。さっきの女の声色と一緒にだ。

が、男は怪しむ様子も見せず、ティアナの言葉に同情を示し、すぐに道を教えてくれた。

「ありがとう、お兄さん。お邪魔してごめんなさい」

礼を言い、ティアナは二人組に背を向けて再び走り始めた。50メートルほど行ったところの路地を曲がりぎわ、ちらつと振り返る。

既に二人連れは、ティアナのことなど記憶の外に追い出した様子で、身を寄せ合い、楽しい二人だけの世界に入っているように見え

た。

ふと思い立ち、「敵」を捜すフィルターを心から外して辺りを見回してみる。

今まで気づかなかった、驚くほど多くの笑顔が、わっと視界の中に飛び込んできた。

この街が、観光と商業、それに庶民のための娯楽とが、渾然一体となっていることは、訪れてすぐに分かった。古いモノと新しいモノが混沌として入り乱れ、かつどこか不思議な調和を見せている。今まで、訪れたことの無いタイプの街だった。

何か街全体から沸き立つてくるような、熱気と活力とが、ティアナにぶつかってくる。

「眩しい」

我知らず、ティアナは眩いていた。目を閉じる。再び、小さな胸に手を押し当てた。強く、強く。力を込めた細い腕が、小刻みに震えるほどに。

再び目を開けると、さっきまで、さんざに煌めいていた街の輝きが、一気に褪せたものに変わっている。

これでいい。ティアナは、思った。この街は、今の自分にとって眩しすぎる。

一瞬だけ感じたその眩しさの残滓ざんしを振り払い、ティアナは、また走り始めた。

「今、仲見世通りから六区ろくくの方へ移動中」。ヒトダマの速度に変化無し！」

『町の様子は？』

「雷門と仲見世通りの辺りは、大混乱だよ。警察と野次馬とテレビ局の人で一杯。さすがのさえちゃんも、マスコミは止めきれなかったかな？」

『ニュースにならなければ、それで良いのですわ。あなたの気にしていたYouTUBEの方も、それらしい物は、オートで片っ端か

ら削除していますから、ご心配なく』

「全国デビューのチャンスだったのにな〜」

本気半分、冗談半分で、ギンは言った。

ここまでで聞かされた話によると、この一件は、すべて偶然の事故が重なったものとして片づける手はずになっているという。

大提灯は、鎖が腐食した結果落下したのであり、それを別の場所に移送中に誤って隅田川に落つこととしてしまった……という筋書きらしい。

またずいぶん強引な話である。

無理を通して道理を引つ込ませるのが、「さえちゃん」の得意技であるし、ほとんどそれが仕事と言ってもいいということも、ギンはよく知っていた。

しかし、今回のケースは、特殊すぎる。どれほど箝かんこうれい口令を敷いたとしても、すべての人の口に戸は立てられないものだし、一部の動画はネットを介さずに個人間で流通するだろう。一週間もすれば、新たな都市伝説とUMAの目撃談が、同時に誕生するに違いないのだが、その辺は、どう始末をつけるつもりなのだろうか……。

などと考えながら、ギンは、素早く足を動かして、「ヒトダマ」を追い続けていた。

ヒトダマ。

ギンが、隅田川にダイビングさせた大提灯から抜け出てきた、ビル会社のウンコビルに乗っているブジエに酷似した何か、である。ギン的には、どうしてもウンコなのだが、あまり連呼しているとどうも後でおっかないことになりそうだと悟って、自粛することにした。それで、ヒトダマだ。

「ヒトダマ、降下」

と、そのヒトダマ、高度十メートルといったところを頼りなく飛んでいたのが、急に高度を下げ始めた。

『見失わないように』

「はいはい」

現在位置は、浅草寺から見て北西。寄席よせや、演芸場などといった大衆芸能の発信地が軒を連ねる、「浅草六区」と呼ばれる地域である。

みるみる降下したヒトダマは、しばらく六区のメインストリートを飛び続け、不意に大通りを外れた路地の一角に飛び込んでいく。

もう、高度で言えば2メートルほどの位置だ。その存在に気付いた何人もの人間が、口々にまた驚きの声を上げているのが分かった。だが、この光景も無かった事として、さえちゃん、ねじ伏せてしまふのだろう。そんな人間を相手にして、仕事をしくじれば、後が怖い。ギンは、人々の方に向けていた意識を、ヒトダマへ集中し直した。

しかし、ここまで来ると、もう指示を受けた受けないというよりも、猫らしい好奇心が、ギンの中でむくむくと首をもたげてきているのも事実であった。

追う。ヒトダマの消えた狭い路地を折れた。

人間二人が、何とか行き違えるかどうかといった、裏路地だ。こういう路地が、浅草の町には無数にある。

日当たりも風の抜けも悪いのか、路地の両サイドに建っている雑居ビルの壁面からは、湿っぽいカビの臭いがした。その臭いに少々閉口しながら進んだところで、壁にもたれるようにして地面にうずくまっている人間の男の姿があった。

垢まみれの服。白髪しろがみ混じりの髪ひげも髭も伸び放題。一見して、ホームレスとわかる。

男は、眠っているようだった。カビの臭いと、すえた体臭とに加えて、ぼつてりとした酒の臭いが、男が発しているいびきの中に充満していた。見れば、男の足下には、空になった数本の酒瓶。そして、腕の中にも後生大事に大きめの壺のような物を抱え込んでいる。転がっている酒瓶を踏まぬよう、避けて通り抜けようとした、その時だった。

先行していたヒトダマが、奇妙な動きを見せた。

それまで、わき目もふらずに 提灯同様、ヒトダマにも目は無いのだが 飛んでいたように見えたヒトダマが、ぴたりとその動きを止めたのだ。

かと思うと、ヒトダマは、何を思ったのか、男の抱えていた壺の中にスルスルつと入っていったのである。ギンの瞳が、まん丸に見開かれた。

「壺、みーっけ」

ギンは、言った。

『よくやりましたわ。すぐに回収なさい』

そろり、とギンは男に近づいていった。足音を立てずに歩くのは、猫ならば誰でも心得ている技の一つである。

猛烈な酒臭さに耐え、男の脇まで移動したギンは、そこに男が抱えている壺の栓らしきものを発見した。やけに細かい装飾が施された、取っ手付きの栓だ。

二股尻尾が伸びた。この尻尾、マジックハンドよろしく、ある程度自由に長さを変えて、器用に物を掴んだりできる。これは、並の猫ではちよつと真似のできない芸当だ。

(ごめんよ、おじさん)

一方で地面に転がる栓を拾い上げ、もう一方は、男が抱えている壺に巻き付け、引いた。

完全に泥酔して眠り込んでいる男の抵抗は無く、労せず壺を引き離すことができた。

目の前にぶら下げてよく見てみる。壺は、青白い輝きの陶器で出来ていて、栓の取っ手以外にはこれといった装飾は無く、全体的につるつとしていて。栓もやはり同じ陶器製。先細りになっている突起を壺の口に差し込んで封をする形だ。

唯一の装飾的な要素である栓の取っ手は、ローマ数字の「？」を象った物のように見えた。その「？」を、巻いた尻尾の先でつまんで、壺の口にあてがってみると、吸いつくようにピタリとはまった。

「回収完了つと。で、次はどうするの？ お嬢様」

『勿論、お持ち帰りです』

「運搬料は、サービスにしといたげる」

傍目には、完全に泥棒である。だが、泥棒猫とは古くからの言葉であろうであるし、指示を出した側にもそれなりに責任は持つてもらおうということ、割り切ることにした。

さて、後は人目に付かない帰り道を……と、考えながら、ギンがその場を後にしようとした、その時だった。

カビと酒の臭いにまみれて淀んでいた空気が、背後から猛然と切り裂かれる気配がした。

切り裂いたモノの正体を、瞬時にギンは理解した。

全身の毛を一気に逆撫でされた時のようなこの感覚。敵意だ。それも、強烈な。

考えるより先に、野生が反応した。

ノーモーションで、ギンは、真横に跳んでいた。一撃の下にギンを仕留めようとする敵意の存在をかわした……かに思えたのだが、（遅れたっ！）

壺だ。猫の体で運ぶには大きすぎる壺の存在が、反応速度にわずかな枷をはめていた。

硬質な物同士が擦れ合う音がして、ギンは、力任せに尾を引つ張られるのを感じた。抗えず、ギンの尾から壺がもぎ取られ、宙に踊った。

「しまったっ！」

前方に弾き飛ばされた壺が目に入り、ギンは叫んだ。

コンマ一秒で平衡感覚を取り戻すと、壺を追う。壺の高さは、人間の大人の目線程度だ。あの高さから落ちれば、ただの陶器なら粉々に砕け散ってしまう。

させじと走る。そこに、ギンと併走する形で、ぬつと影が押し出してきた。目をやると、

「お、女の子っ!?!」

暗がりにも鮮やかな金髪を揺らした少女が、琥珀色の瞳でギンを

見下ろしていた。

邪魔をするな。と、鋭い目が訴えていた。その眼力に、脅迫に近いものをギンは感じた。どうやら、壺はこの少女の放った足によって弾き飛ばされたようだった。

（何なんだよっ！）

礼儀もへつたくれもないやり方が、ギンの反抗心に火を点ける。

が、悲しいかな体格の差はいかんともしがたい。相手は、まだ少女とは言え、ギンから見れば数倍以上の巨体である。

壺まで、あと1メートル弱。

ギンと少女が、同時に跳躍した。少女は、カモシカのようにすらりとした腕で、ギンは、自慢のマジック尻尾を使って、落ちかかる壺をつかみ取ろうとする。

尻尾は、ほとんどギンの体の倍近くまで伸びたのだが、それでも少女の手の方がわずかに早く壺に届くタイミングであった。

「んなくそっ！ 猫又、ナメんなっ！」

刹那、ギンの血が熱く沸騰した。

意識を集中して、頭の中でその姿をイメージした。

爪の先にまで行き渡っている神経網が、体を突き破って延びていくイメージ。神経に覆い被さるようにして、前足も、後ろ足も、もつともつと長く延びるのだ。

背骨と骨盤を拡大し、全身の骨格を作り替える。新たな骨格は、大地を後ろ足だけで掴み、直立できるほどの強度に生まれ変わっている。飛躍的に容積と重さを増した頭蓋骨の重さすら支えてもなお、バランスを取れるほどに。

結果、自重を支える役割から解放された前足は、より繊細な作業を行うために一本一本の指が発達し、独立して動くようになる。全身を覆う被毛は、一部を残して頭部に集中していくイメージ。耳の位置が頭頂から下がってきて顔の側面で再構成されるイメージ。すべてのイメージが、完全に集約されたとき、そこにいたのは紛れもなく……人間だった。

猫のギンを圧倒する「巨体」を見せつけていた少女よりも、更に大きな姿。空中に伸ばした腕の長さは、紙一重だった争奪戦の軍配を、ギンの側に上げるに充分なものだった。

これぞ、奥の手。

ただの猫たるを超え、あやかしの力を手に入れた存在……その証に、二股に分かれた尾を持つ妖怪・猫又の中でも、更に限られたモノだけに許された、「ヒト変生の術^{へんじょうじゆつ}」！

「ボクの勝ち」

ちょうど、ラグビーでパスをカットするように、がっちりと壺を腕に抱えたギンは、地面に激突するまでのわずかな距離で前方宙返りを決め、すつくと二本の足で立ち上がった。

猫の姿の時に持っていた、並外れた運動能力と平衡感覚は、ヒトの姿になっても、いささかも失われてはいない。

ヒト型となったギンは、身長およそ180センチ。良く締まり、均整の取れた体つきをした、中々の美丈夫^{びちゆう}であった。

首筋まで伸びた髪に、三毛猫の姿をしていたときの面影が残っている。根本は黒く、中程から茶色になって、毛先が白というグラデーション。

これも超常の術のなせる技なのか、ご丁寧にも、黒とグレーのロングTシャツにデニムパンツという、人間の着る服まで身に着けている。ただ、少しシャツの丈が足りていない。

シウルツという音を立てて腰に巻き付いたのは、これだけそのままの形で残った二股尻尾だ。ぱつと見には、しゃれたデザインのベルトのようにも見える。

「……さてと、いきなり物騒なご挨拶をしてくれた理由を、聞かせてくれるかな？」

片手で、奪い返した壺を持ち上げ、ギンは言った。

あえて芝居がかった物言いをしたのは、通信機の向こうにいる「さえちゃん」に、異変が生じたことを伝えるためだが、通信機は、今のところ何の反応もなく、沈黙を保っていた。

代わりに、

「答える必要はないわ」

きつと目をつり上げた少女が、敵意を隠そうともしない声で言った。

ギンは、改めて少女を見た。目鼻立ちの非常に整った、文句なしの美少女だった。年の頃は、十代前半だろう。頭の左右に流した、プラチナブロンドが、路地の隙間からわずかに差し込んでくる光をはらんで輝いている。

が、そんな見た目の麗しさを台無しにしまっているのが、埃まみれ、綻びだらけの服装。そして何より、険しい表情であった。更にギンが気になったのは、

(あんまり、驚いてないな……)

目の前で、猫が人間の姿に変わるといふ、非日常の「現象」を目の当たりにしたにも関わらず、少女のどこからも狼狽したり、取り乱した気配が感じられないことであった。

「この壺、君の物なの？」

一度質問を拒絶されたことは脇に置いて、再びギンは探るように訊ねた。

「少なくとも、あなたの物じゃないわ」

「ちよつと、齒切れ悪いね」

ギンの言葉に、少女の目が更に怖いものになった。同時に、殺気にも似た強烈な敵意が、更に大きく膨れあがる。

「そんな怖い目で見ないでよ。ボク、ケンカは嫌いなんだ。女の子相手だと、特に」

「私は、大人の男相手でも遅れを取ったことはないわ。ごめんなさい」

「ごめんなさい、という少女の言葉が、どういった意味で使われたのか……。恐らくは、想像通りの意味だろうと思いついたときには、ギンはもう詮索せんさくをあきらめて決断していた。

「三十六計逃ぐるにしかずって、昔の人は言いました」

言い様、ギンは跳躍した。跳んだ先にあるのは、ビルの壁面を走る配水用のパイプだ。肉球は消えてしまったが、代わりに器用さを得た手でそのパイプを掴み、上を目指す。

後はこのまま屋上へ出て、ビルの屋根伝いにでものんびりと帰る。少女の正体を探る仕事は、壺と一緒に「さえちゃん」に渡してしまおう……。

そう考えていたギンだったが、その目論見は、もろくも崩れ去ることとなる。

「逃がさないっ！」

少女の声が、ギンの思いも寄らぬ方向から聞こえてきた。

「え？」

声のした方……頭上を見やったギンは、そこで大きく腕を振りかぶってギンに肉薄してくる少女の姿を捉えた。

少女の手には、いつ取りだしのか、腕とほぼ同じ長さのトンファーが握られている。少女の手の中で、トンファーが返り、瞬時に倍のリーチを得た少女の腕が、風を巻いた。

「おわあっ！」

何故と思うより先に、ギンは体を宙に踊らせた。今の今まで、顔があった空間を切り裂くように、大きくしなったトンファーが通り過ぎていく。

(こりゃ、さすがに……)

シヤレになっっていない。少女は、何の迷いもなく、本気でギンの頭蓋骨を叩き割るつもりだったのだ。

「このっ！」

返しの二撃目を読んだギンの尻尾が、ぱつと左右に開いた。

ふさふさの毛に包まれた尻尾は、凶悪な遠心力で迫るトンファーを両サイドから柔らかく絡め取り、打撃の勢いを殺してみせた。

目を見開き、わずかに少女が驚くような表情を見せたその隙を、ギンは見逃さなかった。

尻尾に力を入れて、ぐつとトンファーごと少女の体を自分の方向

に引き寄せる。

「きゃっ！」

少女の体勢が崩れたところで、尻尾を離し、

「ゴメンねっ」

壺を持っていない右手で少女の頭を押さえつけ、下へと押しやった。その反動が、ギンの体を浮き上がらせる。目の前に、配水管。掴んだ。

左手で抱えていた壺を、真上に放り投げた。左手も配水管に伸ばして、体を固定する。落下に転じた壺は、勿論、尻尾で回収。

ようやく一息ついて、ギンは、もう一度眼下に目をやった。と、

「いにゃっ！」

左の頬に、ピリツと熱く鋭い痛みが走った。真冬の寒い日、道ばたの藪やぶから突き出していた細い枝に耳の先を引っかけてしまった時のような痛みだ。

見れば、一本のトンファアの先をこちらに向けた少女が、壁に垂直に足を着け、鬼の形相でギンを睨みつけている。まるで、銃口を突きつけているようにも見えたが、それがあながち間違っではないことに、ギンは気付いた。

まだ熱さを持っている左頬のすぐ脇で、何かがキラリと反射したのが分かった。

それは、一本のワイヤーだった。光の反射が無ければ気付かないほどの細さである。

そのワイヤーの先は、ビル屋上のフェンスに巻き付いており、根本の部分は、少女が握りしめたトンファアの先に空いた穴の中に消えている。

どうやら、トンファアのヘッド部分はアタッチメントになっていて、手元の操作でワイヤー付きのヘッドを発射できるようになっているらしかった。

その機構もさることながら、驚くべきは、ワイヤーの強度である。この細さで、人間の自重を完全に支えている。どう考えても、一般

の市場に流通している代物とは思えなかった。勿論、そんな物を自在に操る彼女も、到底ただの一市民ということはあるまい。

「冗談じゃないよ」

どうも自分は、大変な拾い物をしてしまったのかもしれない。

「ちゃんと責任もってよね。ボク、知らないよ……」

ぼそつと呟くように、ギンは通信機に向かって言った。

『何か問題が起きていますようですが、壺を持ち帰らなければ、報酬は無いですわよ？』

それまで、じつと沈黙していた通信機から、久しぶりの返答があった。

ただ、その声は先ほどまでのクリアなものとは程遠い、ノイズ混じりの、歪んだものだった。どうやら、先ほどの一撃が通信機をかすめ、どこか故障してしまったらしい。

「猫も真つ青のドライな言い方。傷ついちゃうなあ。ボク、怪我までしちゃってるのに」

「……」

辛うじて繋がったままになっている向こう側で、ほんのわずかに息を呑む気配がした。

それを察したギンもまた、わずかに溜飲とこいしゆいを下げて、

「大丈夫、もうすぐ帰るよ。いい子で待っててね、冴香お嬢様」

言いつつ、もう一度眼下の少女を見る。

発射したワイヤーでもって、地面との激突を避けたというところが、さすがに精一杯なのだろうか。少女に、更なる追撃をしてくる様子は無い。

が、彼女の両目から放たれる眼光は、ギンの頬を弾いたワイヤーの数十倍の熱と鋭さをたたえて、ギンを射抜いている。

その鋭さの奥に、ふと別の感情が揺らいだような気がした。真つ直ぐに引き結ばれた、少女の唇がわななくように歪み、感情の揺らぎが大きくなった。

目的を果たせなかった悔しさか？

(……違う。もっとこう……)

何かを訴えようとしている……。

何を？ 確かめようと、口を開きかけたギンだったが、結局何も言うことはなかった。

ギンが声を発するより先に、少女の方がギンから顔を背けたからだった。

と、またワイヤーが煌めいた。同時に、少女の姿がすうっと遠ざかっていく。ワイヤーを切り離れたようだ。

ふうっ、とギンの口から息が漏れた。顔を戻し、配水管を登り始める。

まだ背中に少女の視線が張り付いている……そんな気がしたが、ギンはもう、振り返らなかった。

綾織部家の邸宅は、台東区と葛飾区の境目、地図で言うと、隅田川と荒川がもつとも近づく、東向島ひがしこうじま近辺の住宅街にあった。

下町の庶民的な家々に混じってただ一軒、がっしりと組まれた石塀に囲まれた庭園の奥にある古びた洋館は、不思議と周囲の風景に調和し、ひっそりとした佇まいを見せている。

綾織部家は元々、上野近辺に広く土地を有しており、本宅もそちらに構えていたのだが、関東大震災で焼失してしまった。その後、周辺の復興が始まると、同様に家を失った町の人々の新たな住宅用にと、先々代の当主が、元の邸宅を含む土地のすべてと、再建用の資金、資材までもを寄付し、自分たちは、別宅であったこの洋館に移り住んだのだった。

現在の敷地面積は、およそ三百坪ほど。建物自体は、10LDKに三つの納戸なんど、二つの書斎を備えた、豪邸の名に恥じぬ間取りであった。

それでも、往事に比べて半分にも満たない面積というあたり、綾織部家が誇る桁外れの財力の一端が垣間見え、現当主に言わせれば、「女一人と猫一匹が住むには、まああの広さですわ」ということになる。

そんな綾織部家の現当主こと、綾織部あやおりべ冴香は、現在十七歳。

本来、家を継ぐはずであった父親は、祖父との重大な確執が元で勘当を言い渡され、冴香がまだ幼い頃に家を追われていた。時を同じくして、母も他界してしまっている。

残された冴香は、祖父である綾織部家前当主・興おきな齊の手によって、次期当主として徹底的な英才教育を施されてきた。

冴香も、厳格さと優しさを兼ね備えた人格者であった祖父を尊敬しており、持って生まれた聡明さで、祖父の期待に大いに応え、超えて見せた。

そんな冴香に、天文学的数字の莫大な財産と、綾織部家の果たすべき『使命』とを託し、祖父が逝ったのは、二年前のことである。以来、冴香は、この洋館で、祖父から託された物を律儀に守り続ける毎日を送っている。

その冴香は今、書齋にいた。

書齋と言っても、ざっと見て三十畳はあろうかという広さである。そして、この部屋に立ち入ったとき、恐らくほとんどの人間は、呆気にとられることだろう。

冴香が座っている、全身を包み込むほどの大きな革張りのリクライニングチェアの前には、どっしりと重量感のあるマホガニー材の執務デスクが置かれている。

そのデスクは、天板部分がくり抜かれて、30インチ前後の薄型モニターがはめ込まれていた。更にはデスク奥、部屋の東側にあたる壁には、300インチ以上はあるかという、大型モニターが埋め込まれている。いずれも、特注品の一点物だ。

壁のモニターには、大小様々なウィンドウが並び、多様な情報を示している。

国内外のニュース映像。現在の市況を示した幾つものグラフとデータ。企業のウェブサイト。インターネット上の動画共有サイトに匿名掲示板。主要新聞各紙のスキャン画像。果ては、個人のブログサイトまで……。

「お待たせしました、公爵閣下。ただ今、戻りましたわ」

それらの膨大な情報を、さっと遠目で一瞥し、それだけで何もかもを頭にインプットしてから、冴香は言った。すると、

『何の、ちょうど良いティーブレイクだったよ。どうかお気になさらぬよう』

部屋中の壁から染み出してくるようにして、深いバリトンが聞こえてきた。

「こちらから無理にお申し込みした勝負の途中で中座してしまい、

申し訳ありません。少し、予定外の用事が出来てしまいまして」
ゆつたりと椅子に座り直しながら、冴香は言った。

優雅な仕草で、袖のないワンピースの肩にふわりと乗せるように
羽織っていたシヨールの位置を整える。黒いストッキングに包まれ
た細身の足を行儀良く揃え直すと、これも黒いロングスカートの裾
が、柔らかく踊った。

「ミス・サエカ。お忙しいようなら、私はまた日を改めてでも構わ
ないが？」

公爵、と呼ばれた声が言う。

「お心遣い痛み入ります。でも、この件については、ぜひ今日中に
情報を頂きたいのです。ここからは、早めに進めて決着を付けさせ
ていただきますわよ」

答える冴香の瞳が、微かに輝く。深い理性と知性、それに裏打ち
された圧倒的な自信に満ちあふれた、女王の瞳だ。

室内に、公爵の笑い声が響いた。

「私は、あなたのそういう所が好きだね。お爺さまも、頼もしい後
継者を選ばれたものだ」

「あら嬉しい。わたくしも、公爵様のことは好きですわ」

冴香の白い指が、デスク脇のスイッチに触れた。

すると、デスクに埋まっていたモニターが、傾斜をつけてせり上
がってくる。

画面には、ポーカーテーブルを模したような卓が3DCGで表示
されていた。ただ、卓に乗っているカードは、ポーカー用のトラン
プではない。

卓上で表向きになっているカードの上半分には、人物の写真がプ
リントされている。

国籍、年齢、性別いずれもバラバラ。が、その顔ぶれは、見る者
が見れば、ある共通項に気づくことだろう。

写真の人物はすべて、企業のトップや投資家、政治家、軍人、果
てはマフィアのボスなど裏社会の人間まで、政財界に影響力をもつ

た世界中のVIPたちなのである。

その肖像の下に記されているのは、二本から十本程度の直線が組合わさった、文字とも記号ともつかない幾何学模様の羅列である。一行だけのものもあれば、数行に渡って記されているものなど、これはカードによって様々だ。

「わたくしのターンからでしたわね」

冴香の指が、今度はモニターそのものに触れた。

手札ということか、手元に近い位置に扇状に並べられた七枚のカードの一枚に指を当て、弾くように滑らせると、冴香の選んだカードが、弧を描いて卓の中央付近に移動した。

すると、そのカードに記されていた謎の記号部分が赤く色づけされる。次の瞬間、先に卓の中央にあった別のカードが、炎に包まれるエフェクトと共に卓上から消えた。

公爵が、呻うめいた。しかめ面が、思い浮かぶようだ。

「まだまだ行きますわよ」

反対に、勝ち気な笑みを浮かべた冴香は、また別の手札を中央に滑らせた。やはり、選ばれたカードの記号部分が赤く光り、画面外から二枚のカードが移動してきて、冴香の手札に収まった。更に、その新たに手札に加えた一枚を中央へ。

『そうそう自由には……な』

公爵の声とともに、一枚のカードが画面上部から回転しながら滑ってくる。そのカードの記号が、青く光ったかと思うと、冴香が送ったカードが燃え上がり、卓から除外された。

それを見た冴香は、卓から外れた所に左手の指を置き、手前に引き寄せる動きを見せた。

その動きに反応したのは、巨大モニターに映し出されていたマーケット情報のウィンドウだ。拡大され、冴香の見やすい位置に移動してきた。

「深追いは禁物……と。この辺にしておきますわ」

引き寄せたマーケット情報を見てから、冴香は言った。

『では、私の番だ』

そんなやり取りを交えながら、卓上のカードは、冴香と公爵との間で通じるルールに則

って、目まぐるしく動き、場は絶えず変化していくのだった。

激しく動けば、マーケットの情報も頻繁に更新される。状況が落ち着いたタイミングでは、マーケットも沈静化する。

カードに切り取られたVIPたち。そして、マーケット情報

そう、二人は単に手慰みのカードゲームに興じている訳ではない。

実はこの瞬間、文字通り冴香と公爵の手によって、世界中の経済が大きく動かされているのである。

これこそ、綾織部家の持つ圧倒的な力と、果たすべき使命の一端であった。

世界的に名の知れたVIPたちをも、文字通りゲームの駒として扱い、その勝敗によって世界の政治経済のバランスを取る……。

『これ以上はダメだな。降参する。私の負けだよ』

互いに十数回の手番を繰り返したところで、公爵が無念そうなため息とともに言った。

『まったく、総選挙が近いというのに、困ったお嬢様だ』

「この件については、東欧に強い影響力をお持ちの方にはしかお願いできませんので……」

『それは分かるが、君の頼みならば、私はいつでも協力は惜しまぬものを』

「それでは、機構のルールに反しますわ。筋はきちんと、通させていただきます」と

だが、対局を終えた二人の会話は、その十数分で人知れず世界を動かしたとは思えないほど、あっけらかんとしたものだ。まるで、カフェで落ち合った友人同士が、その場の支払をゲームで決めた程度の重みしか感じられない。

『律儀なことだ。とにかく、君がお求めのものは、すぐにデータで送らせる』

「ありがとうございます」

『しかし、なぜ君がこんな……いや、これは余計な詮索だったな。すまなかった』

「こちらこそ、お忙しいところ申し訳ありませんでした。この埋め合わせは、いずれ必ず」

『期待させてもらおう。では、今日の所はこれで失礼するよ』

通信が切れたことを示すメッセージが表示され、冴香は、手の平でモニターを撫でた。それで、勝負の舞台となっていたCGの卓が、跡形もなく消え去る。と、そこへ、

「ただいま」

まるで冴香と公爵との勝負が付くの見計らったかのように、少くくたびれたような声が出た。入口の、分厚い櫛のドアが薄く開いて、するりと人影が滑り込んでくる。

勝負の余韻に浸って、ややぼんやりとモニターを眺めていた冴香が、声が聞こえると同時にはっと我に返ったように立ち上がった。

椅子を回し、部屋の中央に置かれたティーテーブルに向き直ったところで、

「もー疲れたー。過労死するー」

その上に、三毛猫模様の髪をした頭が、ごろんと乗っているのを見た。

「こら、頭をどかしなさい」

「うなー」

「……ギン！」

冴香は、テーブルに転がっている三毛髪頭みけがみあたま……暴れ提灯退治と、謎の壺回収の任務を終えて帰ってきたギンに向かって言った。

「ティーカップに髪の毛が入ってしまったでしょう。起きなさい」

その物言いはまるで、弟を叱る姉のそれである。と、ギンが顔を上げて言った。

「通信機、壊しちゃった。ごめんー」

「そんな事はどうでもいいですね。まず傷の手当です。舐めてれば

治る、はダメですわよ」

「傷？」

言われたギンが、きよとんとした表情で冴香を見た。

「さつき通信で言っていたでしょう。流血したって。……さ、早くお見せなさい。深いようならお医者様を呼ばないと」

冴香の手には、予めテーブルに用意しておいた救急箱がある。

「あー」

「あー、じゃありません。見せなさい」

「ほっぺた切れた」

「はい？」

ほらここ、と、うつすらと赤い筋が走っている頬を指さし、ギンが身を乗り出してきた。

もうわずかで、唇同士が触れてしまいそうな距離。

「や……」

不意のことで、思わず冴香は、持っていた救急箱をギンの胸に押しつけるようにして距離を取った。頬の周りが熱くなるのを感じたが、それは、気のせいと思うことにして、

「傷って……まさか、それだけですの？」

もうとつくに血など止まっている、傷とも言えないような筋に目を凝らして、言った。

「うん」

一瞬、冴香は、沸々（ふつふつ）としたものを胸の奥に感じた。

大事な勝負を一時中断し、別室で救急箱を探していた時の気持ちを思い出すと、更に気持ちが煮えたつてくるようだった。

「ど、どうしたの？ さえちゃん」

そんな内心とは裏腹に、視線は、気付かぬうちに冷たい光を放っていたらしい。冴香の目を見て、明らかに怯えた様子のギンが、言った。

「どうもしません！ そんなかすり傷、舐めておけば治りますわよ」

「さつきと言ってること違うじゃん」

「だったら、これでもかけときなさい。……まったく、馬鹿にして！」

冴香は、乱暴に蓋を開けた救急箱から消毒液の容器を掴み取り、放り投げた。

思い切り顔めがけて投げつけてやったのだが、ギンの右手は、いともあっさりと容器を受け止めた。それがまた、何だか小憎らしい。「さえちゃんに塗ってほしいな」

顔を背け、執務デスクに戻ろうとした背中に、ギンの声がぶつかった。

「甘ったれるんじゃないやありません！ 消毒したら、拾った壺をこっちに持ってくる！」

「何だよー、優しくねーの」

容器のキャップを外す、妙に間の抜けた音がして、「しみる」という腰の碎けた声がそこに被さった。

「いい気味ですわ」

再び椅子に腰を落ち着けて、冴香は言う。

ややあつて、いつの間にか猫の姿に戻ったギンが、デスクの上に飛び上がってきた。

真上に掲げた尻尾の先には、ヒトダマが入っていったという壺がぶら下がっている。

「はいこれ。ウン……ヒトダマ入り」

タッチモニターの脇に腰を下ろしたギンが、尻尾で掴んだ壺を冴香に差し出す。

「……ご苦労様」

一応、労いの言葉だけはかけて、冴香は壺を受け取った。その壺を子細に眺めてから、

「やっぱり、そうですね」

冴香は、確信に満ちた声で頷いた。指先で、モニターをなぞる。

大型モニターに、手元の壺と同じ物が写った写真が、大きく呼び出

された。古い、写真だ。元々、アナログで撮影されたものをスキャンした画像のようである。

「ギン、これを手に入れたのは、六区の近くで間違いないんですよね？」

「そうだけど、それがどうしたの……っ」と

答えながら、デスクから飛び降りるギン。ぐるりと椅子を回り込むようにして移動したかと思うと、ちゃんと冴香の左肩に飛び上がった。お腹で体を支え、両足を肩の前後にぶらんと投げ出す。実際に腑抜けた体勢である。

「何かホームレスのおっちゃんが、大事そうに抱えてた」

「どうしてそんな所に……って、重いですわよ。あなたもどこに乗ってますの」

「机の上、冷たいんだもん」

写真を凝視したまま、冴香は、右手でギンの首筋に手を伸ばした。首根っこを押さえられたギンが、「なー」と、抗議めいた情けない声を上げるが、お構いなしに引き剥がしたところで手を離す。

ぼふっという柔らかい音を立てて、ギンの体が、冴香の膝の上に落下した。ギンの顔がぱつと輝き、得たりとばかりに体が丸まる。

「で、そのホームレスの方からは、何か話を聞いたりしませんでしたの？」

壺をデスクにおいて、冴香は訊ねた。

「酔っ払って寝てたから、勝手にもらって来ちゃった。その後で、変な女の子に追い回されちゃってさ、起こそうにも無理〜って感じで」

「それもですわ。その話についても詳しくなさい。一体、あれから何が起こったのか」

重ねて問うと、大きなあくびを一つしてから、ギンがその時の状況を説明し始めた。

特殊なトンファーを振り回す金髪の少女に、いきなり背後から蹴りを食らい、次に頭をかち割られそうになり、ワイヤーで頬を切っ

て、通信機を壊されて……。

度々、「かび臭いし、酒臭いしで散々です」などと個人的な感想が混ざって、話が本筋から脱線していくのを、時に相槌を打ち、時にさりげなく誘導する。根気よく付き合い終えたところで、冴香は、もう一度デスクにある壺の現物と写真とを見比べた。

「ギン、その後、女の子はどうしたんですの？」

三度、みたひ訊ねる。が、

「……ギン？」

返事がない。

見ると、ギンはいつの間にか、冴香の膝の上で丸くなったまま、規則正しい寝息を立てている。喋るだけ喋ったところで、眠くなってしまうらしい。

「……これじゃあ、身動きできませんわ」

呆れたように、冴香は言った。

よほど冴香の膝の居心地が良いと見え、ギンは、安心しきった様子で無防備な寝顔を晒している。そんなギンの背中を一撫ですると、一瞬だけ柔らかな笑みを浮かべた冴香は、肩のショールを折り畳んでギンの上にかけてやった。

視線を、大型モニターに戻す。

手元のタッチモニターの上、まるでピアノでも演奏するかのよう
に、冴香の指が躍った。

表示されていたリストと関連した情報が、次々とモニターに呼び
出されていく。

公爵との勝負に勝ったことで得られた、貴重な情報の数々だった。
できれば、ローズエキスを垂らした風呂に入って、軽く食事をし、
これらの情報を得るために随分と削らされた鋭気を養いたいところ
ではあったが、仕方がない。

ギンが目覚めたら、すぐに次の指示が出せるよう、資料を検討し
て、策を練っておこう。

そう、冴香は決めた。

この綾織部沓香の膝を借りて昼寝を楽しむなど、世界中のどんなVIPが逆立ちして願おうとも決して叶うことのない、極上の贅沢を味わわせてやっているのだ。

その対価は、相応の働きでもって支払うべきものであるはずだ…。

何だか、急に目線が高くなって視界が開けた。それまで、妙な文字や図が描かれた紙の囲いに阻まれて見えなかった、入口の扉がはつきりと見える。……まあ、見えたところで、実はどうということもない。ただ、「ああ、そう言えば扉があったな」と思うぐらいだ。しばらく、ぼうつとしてしていると、その扉が、急に勢いよく開け放たれた。誰かが、入ってくる。若い女のようにだった。

その女が、こちらに駆け寄ってくる。間近までやってきた女は、さつきから自分の体のあちこちに巻き付いている、何本もの管やら紙やらを、力任せに引きはがし始めた。

されるがままに、その様子を眺めているときに考えていたのは、女の服装が、ねぐらにしていた神社の境内をいつも箒で掃除していたお姉さんに似ているな……というようなことだった。赤と白の、ゆったりした感じの服だ。

「これでいい。行きましよう」

女が、急に自分の手を取ってきて、言った。そこで、初めて気付く。

(手だ……)

動く。指の一本一本まで自由に動かせる。女の手を、握り返してみた。

「急いで！ 早く！」

女が、握った手を引いた。それで、一步踏み出す。そこでまた、気付く。自分が、二本の足だけで立っているということに。

「歩けるわね？」

女が、尋ねてきた。反射的に、頷いてしまった。女が頷き返し、手を引いたまま歩き出した……と言うより、走り出した。

(後ろ足だけで、歩けるのか?)

まして、走るなどと。そう思ったが、足は、ごく自然に女を追っ

て動いていた。

「こつちよ。暗いから気をつけて」

明かりのない、狭い通路を走っていると、女が言った。辺りを見渡すと、同じような通路が何本も枝分かれしていて、随分と入り組んだところを移動しているのだと分かった。

「大丈夫、よく見える」

通路の様子を見て取った時、思わず口を突いてでた言葉に、また驚いた。

それが、人間の使う言葉だったからだ。

「そう……そうよね」

女は、笑ったようだった。こちらに背を向けているので、顔を確認することは出来なかったが、そんな気がした。

と、急に女の足が止まった。

「そこまでだ、技術中尉」

声が出た。行く手の暗がりから、ぬうつと、大きな男の姿が浮かび上がった。

「残念だよ。貴官の本計画に対する姿勢は、真摯なものだったと評価していたのだが」

落ち着いてはいるものの、わずかに苛立ちを滲ませた声で、男が言う。それと同時に、複数の足音が、前後から迫ってくるのが聞こえた。

後方から姿を現した別の若い男が、女の肩に手を置くのを、やはりぼつと見送った。

目尻をつり上げた女が、大男を睨み付けた

「こんな事をして、もう何も変えられない！ どうしてそれが理解できないの！」

彼女は、何をそんなに怒っているのだろうか？ 彼女の怒りには、自分も関係しているのだろうか？ だとしても、どういふ関係があるのかは、まったく分からなかった。

大男が、更に一步踏み出して、言った。

「我々は、軍人だ。何が変わろうが、変わるまいが、命じられれば従う。まして……」

「逃げて！ 逃げるのよ！」

大男の話を最後まで聞くことなく、女が、急にこちらを振り返って、叫んだ。逃げる、と言っている。必死の形相で。自分に向けて言っているのは、すぐに分かった。

が、何故逃げる必要があるのか？ それを聞こうと口を開いたとき、不意にあくびがこみ上げてきてしまった。「ふわあっ」と、一発やったところで、またまた気付いた。そう言えば、さつきからヒゲの感覚も無い。

「こいつは、傑作だ。中尉のお節介も、我らの計画も、所詮、人間の傲慢さが、まとう衣を変えただけのこと。彼は、それをよく分かっているのかもしれないよ」

大男が、笑った。一瞬、哀しそうな目をした女だったが、すぐに大男に食ってかかる。

「逆よ。彼は何も知らないだけ！ なのに、あなたはどうなの？ 傲慢を知りつつ、彼を利用しようと言うの？」

「我々は、彼の無知につけ込む気は無い。彼の望む物を与える用意がある。となれば、選ぶのは彼自身だ。残念ながら、中尉にその権利は与えられないがね。……連れて行け」

大男の意を受け、二人の男が、両脇から女の体を抱え込んだ。

女は、男たちを振り払おうと激しくもがいたが、すぐに諦めた様子でうなだれた。二人の男に挟まれ、元来た道を戻っていく。

その様子を、何となく横目で追うと、振り向いた女と目があった。

「お願い……あなたは……」

何か言おうとした女を、「お静かに」と、脇の男の一人が制した。「……さて、起き抜けのところ、騒がせてすまなかつたね。私たちは、君がこうして目を覚ますのを、ずっと待っていたんだよ。ぜひ、君と話をしたくてね」

こちらを見た大男が、厳めしい外見に似合わぬ笑みを浮かべて言

った。

もう一度、振り返る。女の方が、少しだけ気になった。引きずられて歩く女も、肩越しに振り返って、ずっとこちらを見ている。自分に、何か訴えたいことがあるかのように。

何を、言いたいのだろう。気になったが、大男が、ずっと回り込んできて、彼女の姿を隠してしまった。

「腹が減っているんじゃないか？ 食べ物を用意させよう。何が食べたい？」

「食べ物？ …… だったら、ささみがいい」

「好物なのかね？ いいだろう。さあ、向こうへ」

向こう、と大男が指さしたのは、女が、自分を連れて行こうとしていた方向だった。

何だ、結局そっちに行くんじゃないか。そう思った。

大男に促され、歩き出す。

もう、振り返りはしなかった。

良い香りがする。それも、二つ。

ひとつは、さえちゃんちゃんの香り。さっきは、何故かちょっと怒っているようなそぶりも見せていたけど、今は、優しく全身を包み込んでいる。もう一つは……、

(マルシゲ黄金缶！)

それも、ささみ入りだ。

ギンの瞳が、ぱちつと開いた。瞳孔が収縮し、薄灰色の虹彩ニライロに光がみなぎる。

「黄金缶！」

意味もなく高らかに宣言して、ギンは身を起こした。体の上にかかっていた、冴香の匂いが染みついていいるシヨールが、足下に落ちた。

「いつものことですけどねど、よくすぐに気がつきますわね」

呆れたような冴香の声が降ってきた。併せて伸びる白い指が、シ

ヨールをつまみ上げる。

「ささみ入り！」

「はいはい」

更に力強く宣言すると、苦笑した冴香が、デスクの上を指さした。果たして、そこには、黄金缶の名が示す通り、金色の輝きを放つ缶の蓋が開いており、うっとりするほどのかわしさを振りまいているのだった。

猫、まっしぐら。

一足飛びに冴香の膝からデスクへと移動したギンは、無我夢中で鼻面を缶の中に突っ込んだ。至福。その一言に尽きる。

「食べながらでいいですから、お聞きなさい」

背後から、冴香の声がした。

「二兎を追う者は一兎をも得ずって、昔の人は言いました」

「使い方を間違ってますわよ。それと、口に物を入れて喋らない。

お行儀が悪いですわ」

「さえちゃんなんか……たまに寝ながら……何か言ってるじゃん」

「んなっ……」

冴香が、絶句した。直後、背筋を危険信号が走り抜け、ぎよつとしてギンは振り向いた。

すごい顔になっている冴香がいた。ギンは、そつと前脚で黄金缶を抱えて後ずさる。

「横取りなんかしませんわよ。……いいから、早く全部食べちゃいなさい。そうしたら、わたくしの話を聞く！ よろしいですわね？」

「う、うん……」

ギンの視線が、缶に戻った。

「……ギンこそ寝言で、『ささみ』なんて言うものだから、用意しておいてあげましたのに……。まったく、可愛くないったら……」
微かに、背後でもごもごと呟く声が聞こえた。

「あ、そうだったんだ」

「な、何で聞こえてますの！ あなたのそういうところは、本当に

……」

「何でつたつて、聞こえちゃうんだもん。猫だもん」

「そ、それはそうでしょうけど……た、たとえそうだったとしても、黙っておくのが紳士というものなのですわ！ デリカシーの問題です！」

「もー。そつちこそな〜んで、すぐそうやって怒るかなー」

などと、騒々しい時間が過ぎて、

「で、話って何？」

缶の内側に顔が映り込むほど、綺麗に黄金缶を食べ終わったギンが、ちよいと空き缶を尻尾で掴んで、デスクの脇へ押しやった。

「あなたが拾ってきた、壺のことです。これをご覧なさい」

冴香が、ギンが寝ている間に集めたらしい情報を、巨大モニターに表示させた。

そう言えば、どのくらい眠っていたのだろうか。モニターより先に、ギンは、窓の外に目をやった。やや南西、広い庭に向かって大きく取られた窓からも、建設中のスカイツリーが天を突いているのが見える。

その更に向こう側に、赤みを増した太陽がゆっくりと沈もうとしていた。それはまるで、巨大な剣玉の先っぽから、玉がこぼれ落ちているようにも見えた。

(三時間ぐらいか……)

太陽の位置から昼寝の時間を逆算したギンは、

「何をよそ見していますの」

「あ、ごめん」

冴香の声に促され、モニターに顔を向けた。

「あなたが持ち帰ってきた壺、やっぱりアレで間違いないみたいですよわ」

冴香が、言った。

「大江山会長、だっけ？ 会社潰しちゃって困ってたおじさん」

アレという言葉に思い当たる節があり、ギンは耳をそばだてて答

えた。

「ええ。先日、借金返済の資金にということ、わたくしが買い取って差し上げた十七億円分の美術品目録に入っていた、あの壺です」
「ついでに、上野の博物館に運んでよく調べようとしたら、盗まれちゃったあの壺ね」

ちよつと意地悪い声色でギンが混ぜ返すと、白磁のように滑らかな冴香の指が、似つかわしくない拳骨の形になって振り上げられた。

「じよ、冗談！」

慌てて、身を強ばらせたギンだったが、冴香の拳骨はギンの頭上数センチのところまで形を変え、ギンの額をこちょこちょとくすぐってから、タッチモニターの上へ。

見上げると、冴香の顔には、してやったりと悪戯っぽい笑みが浮かんでいる。

ほつと息を吐くギンの前で、冴香が、モニターを指で弾いた。と、数日前のニュース映像が、大型モニター上に再生された。映像ソースは、二十四時間ニュースを流し続けている衛星放送のものである。『昨夜、午後十時頃、東京上野の国立博物館に運搬途中だった美術品、計三十三点が、武装強盗団と見られる一団によって強奪されるという事件が発生しました。当時、運搬用のトラックには、警視庁上野署のパトカーが警護についており……』

映像を見たギンは、ふんと鼻を鳴らして冴香を振り返った。

「ニュースになっちゃってたんだ」

「わたくしに報告が入る前に、警察から漏れてしまったんです。あなたは、ぐっすり眠っていたから知らないでしょうけど、この後大変でしたのよ」

この後、と冴香が言ったのは、事件がニュースとして全国に流れってしまったことを受けた与野党の幹事長が、顔面蒼白になりつつ冴香の屋敷を訪れたことである。

その直後、二人を追う形で、警察庁長官、警視総監、上野警察署

長の三名も、文字通りの「土下座」で詫びを入れに来て、冴香は、安眠を妨害されたことに苛立ちながら、彼ら五人が口にする自己弁護と、慈悲を求める哀願とに付き合わされたのである。

が、それは冴香の言うとおり、ギンのあずかり知らぬ話であった。その時のことを思い出し、目頭を揉んでいる冴香の表情から、苦労と疲労の程を推測するしかない。

「……大事にも出来ませんから、その日はおとがめ無しで帰っていただきましたけど」

「お疲れ様。でも、盗まれたってことはやっぱり、これは本物だったってことだよな？」

これ、とギンは、尻尾でもってデスクの上にある壺を突きながら言った。

「ええ。真正正銘、この壺は、『ヒエロニムスの壺』に間違いありませんわ。今から六十年以上前、ドイツで作られた十二個のうちの一つですわね」

再び、冴香の指がモニターの上を踊った。幾つか新たなウィンドウが呼び出され、最初に表示されていた壺の写真の脇へと並ぶ。

「第二次世界大戦末期、当時のナチスドイツの手によって生み出された、人造靈魂……ホムンクルスを封じた、魂の揺りかご」

冴香が、新たに呼び出したウィンドウに表示された文章を朗読した。

「まあ、実際に壺の中身をご覧になったギンには、今更言うこともないでしょうけれど」

「ホムンクルスは、命のない物に取り憑き、まるで生きているかのように行動させる……だったっけ？」

今回の「仕事」にかかる前、冴香から説明された内容を思い出すように、ギンは言った。

「ええ、そうです。この資料によれば、敗色濃厚だったドイツ軍は、既に失われたはずの秘術を密かに蘇らせ、量産したホムンクルスを使って、不死の軍隊を作ろうとしていた……と、いうことみたいで

すわね」

「前にも聞いたけどさ、またそんな……ねえ？」

ぺろりと舐めた前足で、ギンは目の上をこしこしと擦った。それを見た冴香が、口元に手をやっておかしそうに笑う。

「あなたがそれをやりますの、猫又さん？ まあ、わたくしだって、ギンとこうしてお話していなければ、眉唾物のオカルトと笑い飛ばしておしまいでしたわ。けれど、ギン、妖怪・猫又の目は、見ているのでしょうか？ この壺に消えたヒトダマを」

「見た」

「猫の好奇心が、うずきませんこと？ どうしてそんな代物を、盗んだ人間の手を離れて下町の酔っ払いさんが持っていたのか？」

「うずいてきた気がする」

「よろしい。では、問題」

冴香が頷くと同時に、画面が切り替わった。

映し出されたのは、適当にネットから拾ってきたと思しき、二枚のイラストである。

一枚目は、頭にネクタイを巻いて、千鳥足で歩く赤ら顔のおじさん。二枚目は、最近オタクの皆さんに人気のアニメに登場する女の子である。

「第一問。さつきも言ったように、なぜ裏通りの酔っ払いさんが、壺を持っていたのか？」

「分かりません！」

ギンは、即答した。一切迷い無く、かつ無駄に元気よく。

冴香は、無言で酔っ払いのイラストを画面から消し、次にアニメ美少女を拡大する。

「第二問、ギンに襲いかかったという女の子は、何者？」

「すごく綺麗な金髪の、可愛い子。年は、さえちゃんより下だね。

十二、三歳だと思うよ」

ウィンドウの中で愛らしく微笑む少女の髪の毛は、やけに鮮やかなピンク色をしていた。

「……あなた、金髪さんが好みなんですか？」

ちなみに、冴香の髪は、真っ黒。「緑なす黒髪」という表現そのままの、美しい黒髪だ。

「……黒い髪も好きだよ、ボク」

「別に気を遣ってくださらなくても、結構ですわ」

アニメ美少女も画面から消えた。

「とりあえずの問題は、この二問ですわね」

「一勝一敗か」

「どうしてそういう解釈になるんですか。女の子のことは、髪の毛の色しか、はっきりしたことは分かっているでしょう」

「そうとも言っね」

けるっと答えるギンであったが、冴香に、怒ったり嘆いたりする気配は無かった。こんな流れになるのは最初から想定済みと言わんばかりの様子で、

「では、この二問は、答えられなかったギンへの宿題にしておきますわ。ささっと、調べてきてくださる？」

「そっちこそ、どうしてそうなるのさ。こんな宿題、さえちゃんが解いてくれる方が、ぱぱっと片付くと思うなーボク」

「そんなことありませんわ。こういうものには、向き不向きがありますのよ。……それに、わたくしはわたくしで、調べておかなければならない事もありますし、今日はこれから別の用事も片付けないといけませんの」

冴香が言った、その時だった。

デスクのタッチモニターに、玄関のチャイムを模した電子音とともに、三人の男女が並んで立っている映像が表示された。

「噂をすれば何とやら。……お待ちしておりましたわ、皆様。今、玄関を開けに参ります」

画面に向かって冴香が言うと、映像の中の三人が、きよろきよろと周囲を見回すのが分かった。映像は、冴香の屋敷の玄関を映したものでらしい。

「ご覧の通り、その二丁目商店街の方からご相談を受けて、今夜は手が離せないのですわ。ですから、酔っ払いさんと金髪さんの件、お願いしますわね」

「金髪さん、か」

答えたギンの脳裏に、あの少女が最後に見せた表情が、フラッシュバックしてきた。

激しい闘志を漲みながらせつつも、どこか悲しげな光がちらついで見えた、あの目。何かを、訴えようとしていたようにも見えた。

(……あれ?)

不意に、ギンの胸がざわついた。いつかどこかで、同じようにギンを見つめる目を、見たことがあるような気がする。

それは、ずっと昔のことであったようでもあるし、つい最近の出来事だったようにも思えるのだが、

(いつだった?)

肝心なところが、判然としない。そうになると、胸のざわつきは、収まる気配を見せずに、より大きくなっていく。

「しょうがない。頼まれてあげよう」

気付けば、ギンは、ピンとヒゲを立てて偉そうに言ってしまった。いた。

「あら、以外とあっさり引き受けてくださいましたわね。わたくし、どうせいつもみたいに『うな』とか『ふみゃー』とか、ゴネるのかと思つて、色々考えていましたのに」

拍子抜けした様子の冴香が、椅子を立った。そのまま、滑るような足取りで、来客を出迎えるために部屋を出て行く。トコトコと、ギンはその後続いた。

「さえちゃん、の膝、気持ち良かったからね。まあ、昼寝分は働いてあげようかなーとか」

言つて、冴香が押し開けた扉の隙間から、ビロード敷きの廊下に出る。

冴香の部屋は、屋敷の二階だ。廊下を歩いて行くと、いかにも古

い洋館にありがちな螺旋階段が、ギンたちを待っていた。

ギンは、ちよんと階段の手すりに飛び乗った。横着にも、そのまま手すりを滑り降りて階下に向かおうとする。

「ニスが剥げるからやめなさいって、いつも言っていますでしょ！」
しかし、素早く伸びてきた冴香の手に首根っこを掴まえられて、それは未遂に終わった。

「うなー」

形ばかり抗議の声を上げて身をよじっている内に、いつの間にか冴香の胸元に抱きかかえられて階段を下りていくことになった。膝の上に収まっていた時と同様、鼻腔一杯に冴香の甘い香りが広がっていく。

実は、それこそが、ギンの真の狙いであるのだということに、冴香は気付いているのか、いないのか。

ともかく、冴香と共にギンは、玄関ホールで来客を出迎えた。

訪れていたのは、ギンも顔を見知っている商店街の面々。

「ようこそ、おいで下さいました」

冴香が、春の日差しを思わせる、柔らかな微笑みを浮かべた。それに対し、

「この度は、綾織部のお嬢様にとんだご厄介を持ち込んでしまいました……」

どんよりと暗い顔で頭を下げたのは、商店街にある電器屋のお父さんである。

「ほら、二人もちゃんと頭を下げないか」

その電器屋さんの裏に隠れるように立っていたのが、たまに冴香が自ら足を運ぶ、商店街の中華料理店・『楽珍亭』らくちんていの若大将と、その奥さんだ。

「すいやせん、お嬢さん。すいやせん……」

「うちの人、何度も警察に相談に行っただんです。でも、証拠が無いの一点張りで……。このままだと、お店が……。どうか、どうかお助けくださいまし」

こちら二人の消沈具合は、電器屋さんの比ではなかった。心底、疲れ切ったという様子で、がっくりと肩を落としている。

「お顔を上げてくださいませ。既に大まかな事情は伺っていますわ。何も遠慮などなさらず、もっと早く相談してくださいましたらよかったです」

「でも……そいつあ……」

若大将と奥さんが、顔を見合わせた。

「いいんですのよ。どうせ向こうは知らずにやっているんでしょうけれど、わたくしの膝元で、悪辣あくらつな手段で地上げをしようなんて身の程知らずには、目一杯にお灸を据えてやらないと、綾織部家の沽券に関わります。それに、若大将の作るエビチリとニラ玉がもう食べられないなんてことになったら、わたくし、それこそ耐えられませんわ」

「ありがとうございます、お嬢さん……。ありがとうございます……」

「泣かないで、奥様。大丈夫、わたくしがきつと力になって差し上げます。さあ、奥で詳しいお話を聞かせてくださいませいね」

どうやら、長い話になりそうだった。

「じゃー」

一声鳴いて、ギンは、冴香を見上げた。小さく頷いた冴香が、ギンを床に下ろした。

（では、そっちは頼みましたわよ）

今にも倒れてしまいそうな奥さんに寄り添った冴香が、彼女の肩越しに目配せしてきた。

（ま〜かせて〜）

ギンも、軽く尻尾を振って答える。

冴香と商店街の面々を残して、ギンは、玄関扉に穴を開けて作られた、自分専用の出入り口をくぐって屋敷の外に出た。

既に日は完全に傾き、空にはちらちらと星の瞬きも見え始めている。

この時間、下町に住む野良猫どもが、今宵の食事とねぐらとを求

めて、一斉に動き出す頃合いだ。

情報を集めるには、もってこいのタイミングだった。

ACT 2 猫のヒゲが危機を知る

「……おかしな話題が続きます。今朝七時頃なんですが、警視庁向島署に、広域指定暴力団・誠至会系芝山組の組長以下、主立った幹部が突然出頭して来たんです。何事かと署員が対応したところ……え、フリップ出ますか？ 何とですね、強面の男たちが涙ながらに、「組を解散したい。方法を教えてくれ」と言い出したということなんです！ 勿論、署員が事情を聞いたんですが、はいこちら、「知らなかったとは言え、とんでもないことをしてしまった。この稼業を続けていくのが怖くなった」などと、ちよつと要領を得ない供述をしているとのこと……」

東武線浅草駅の向かい、仲見世通りへと続く路地の入口にある、乾物屋兼タバコ店「恵比須堂」の店頭。路地に面したカウンターに売りのタバコに混じって置かれている、年代物のダイヤル式14インチテレビには、朝のワイドショーが映っている。

「おや向島だつてよ。ギンちゃん、何か知ってるかい？」

その年代物が店頭に置かれる更に何十年前前から、同じ場所に座つてタバコを売り続けているトミ婆さんが、手にした孫の手でギンの背中をつついた。

「ボク、昨日の夜から浅草中歩き回ってるから、よく知らな〜い」
売り場のカウンターを我が物顔で占領していたギンは、あくびをかみ殺しながら答えた。

「そうかい？ まあいいけど。……それにしても、ウチの竹虎たけとらは、どこで油売ってるんだらうね。何なら、中で煮干しでもしゃぶって待ってるかい？」

トミ婆さんが、言った。かつて、浅草にその人有りとうたわれた目利きの達人であるトミ婆さんが仕入れた煮干し……。それはそれは、魅力的な響きであった。

駅舎を越えてカウンターにまで差し込む朝日の暖かさに、だらし

なく押さえ込まれていたギンは、煮干しの誘惑にむくりと身を起こした。そこへ、

「ニヤ〜」

聞き慣れた鳴き声と、チリンと転がる鈴の音が聞こえ、ひよいと飛び上がってくる影があった。この恵比須堂の飼猫である、竹虎だ。

「間が良いんだか悪いんだか、分からないねこの子は」

トミ婆さんが、笑った。

婆さんには、竹虎のこの声は、単なる鳴き声にしか聞こえていない。が、ギンには、

「お待たせして申し訳ありません、兄貴」

つぶらな瞳が愛くるしい外見を見事に裏切る、苦み走った声に聞こえている。

「すしや通りにたむろってた若えのから話を聞いてたもんで。ま、詳しくは中で」

言って、竹虎は、カウンターの窓から店内に入っていく。

「……婆ちゃん、ちよつと邪魔するね」

ギンも、トミ婆さんに一言断りを入れて後に続いた。

「今日は会社が休みで、倅が家にいるからね。言葉と尻尾には気をつけるんだよ」

背中にトミ婆さんの声を聞いて、ギンと竹虎は、タバコ売り場から繋がっている乾物店の奥へ。土間になっている店先から、障子一枚隔てた奥は、そのままトミ婆さん一家の住まいになっているのだ。障子を器用に前脚で開けて、畳敷きの居間に入ると、乾物屋は継がずに川崎の商社に勤めている、トミ婆さんの倅さんが、ちゃぶ台の前で新聞を広げていた。

その居間の隅に、竹虎の住まいであるケージがある。

「良かったら、適当につまんでください。ウチの煮干しにや及ぶべくもないですが」

ケージの前には、プラスチックの小皿に盛られたカリカリ。それ

を、ついとギンの方に押しやって、竹虎が言った。

当然、居間の倅さんには、ニヤーニヤーという猫の鳴き声にしか聞こえない。束の間、新聞から目を上げた倅さんは、ちらっとギンの方を見て、またすぐに新聞に目を戻した。

「お構いなく。……で、どうだった？」

婆さんに言われたとおりに気を遣って、ギンも猫語で言った。尻尾は、ねじり揚げのようによりあわせて、一本に見えるようにしている。

「へえ、ホームレスの件ですが、ありゃあ上野公園を根城にしたのが、たまたまこつちに流れてきたみたいですね」

「ビンゴ！ 一発で上野に当たるのは、さすが竹虎。よ、三代目！ 浅草の地獄耳！」

「おだてないでくださいえや。あつしは、又聞きを話しているだけでして。……寛永寺の三吉親分さんきち、兄貴もご存じでしょう？」

ギンは、頷いた。

上野寛永寺は、徳川幕府の三代將軍・家光によって建立された名刹である。江戸の鬼門を封じる為に建てられたともいわれるこの寺は、市内でも屈指のパワースポットだった。

そして、靈的な感受性の強い猫たちは、そういう場所に集うのをよく好む。三吉親分というのは、その寛永寺に集まってくる猫たちを束ねる大親分であった。

「で、その三吉親分の手下が、縄張りの見回りをしていた時に、兄貴から聞いた賊どもの仕事現場に丁度出くわしたんだそう。賊は、お嬢さんの買物物を積んだトラックが、荷を運びだそうとした時、鉄砲撃ち鳴らしながら突っ込んできたそうです」

「……乱暴だなあ」

「まったくで、警備をしていたお巡りが泡食つてるところ、まんまとトラックごといただいたと。ところが、奴らよほど急いでいたのか、荷台の鍵をかけ直さずに行こうとしちまったらしいんでさ」
「それで、中身の幾つかがこぼれた……」

「ほとんどは、お巡りが回収したんでしょうがね。弾みで遠くに転げちまったのが、一個や二個あってもおかしくありませんや」

その一個が、あの壺であり、それを拾ったのが、上野公園で野宿をしていたホームレスだったというわけだ。

合点がいった、とばかりにギンが前足でヒゲをしごいた。竹虎の話は、続く。

「大方、金になると踏んで質屋にでも持ち込もうとしたんでしょう。ところが、上野界隈では質草に取ってくれる所が見つからない。仕方なく浅草にまで足を伸ばしても、やっぱりダメ。くさって、コンビニの余り物でもくすねてヤケ酒あおってたところ、何かの拍子でフタがぼろん……。どうです？」

竹虎の語りは、小気味の良い抑揚が付いていて、つい耳を傾けたくなるものであった。

「……つたく、今日はずいぶんとうるさく鳴くな。おい、静かにしろよ」

そんな竹虎の名調子も、猫語を解さない人間にとっては、騒音でしかないようである。また新聞から顔を上げた倅さんが、少し不機嫌な声を出した。

「あつし、まだ兄貴と違ってただの猫なもんで。……旦那は、何て？」

「静かにしろつてさ。……迷惑かけちゃったね」

「おつと、いけねえ。じゃあ、後は手短に。もう一件頼まれてた金髪の子ですが、こいつはさつき言ったように、すしや通りに居着いてる若えのが見たそうです。他にも、伝法院の裏手にいるのやら、公園の鳩どもも同じ話を」

「ボクが会ったのは、六区だったなあ」

「場所的には、離れちゃいやせんね。まだその辺をウロついているんじゃないませんか？」

「だね。後は、自分で探してみるよ。朝からありがと。後で、さえちゃんから情報料出してもらおうからね」

「滅相ありませんや。ここいらの猫やら犬やらは、野良だろうが何だろうが、みんな兄貴とお嬢さんの世話なってるんだ。このくらい、何でもねえことですよ」

竹虎が、ピンと立てた尻尾をぶんぶん振って言った。その口ぶりに、少しくすぐつたいものを感じながら、ギンは竹虎の下を辞した。竹虎は、律儀にもタバコ売り場のカウンターまで見送りに出てきた。

ギンは、トミ婆さんにも挨拶を入れて、通りへ。

ちらと見た見たテレビには、もうワイドショーではなく、別の番組が流れていた。人間の役者が、あっちこっちの街を散歩して回る番組で、確か冴香もよく見ているやつだ。

そろそろ街が本格的に動き始める時間だ。今日も浅草は、大勢の人で賑わうことだろう。

雷門通りに、はとバスの黄色い車体が、連なって止まっている。

そこから、ぞろぞろと降りてきた観光客の一団が、皆一様にかっかりした表情を浮かべているのを、ギンは、少しだけ申し訳ないような心持ちで見つめていた。

「残念ながら、雷門の大提灯は、昨日の事故で破損してしまいました。浅草には雷門以外にもたくさん見所がございますので、きつと皆様にご満足いただけることと思います」

小旗を振って観光客を先導するガイドも、いきなり出足を挫かれた格好で、自慢の舌もいささかキレが悪い。

「ではまず、浅草寺にお参りし、今日が皆様の良き思い出として残りますよう、観音様にお願ひすることにしたしましょう」

何となく氣勢の上がりきらないまま、一団が提灯のない雷門をくぐっていった。

そんな彼らを尻目に、さっと横から追い抜いたところで、ガイドに目を付けられた。

「皆様、左手をご覧下さいませ。可愛い猫ちゃんが、皆様をご案内してくれるそうです。三毛猫ちゃんですね。ご存じですか？ 三毛猫は、ほとんどが雌で、雄が生まれる確率は、なんと三分の一なんだそうです。きつと、この子も女の子なんでしょうね」
ガイドの微妙な無駄知識とともに、多くのシャッター音が降り注いできた。

（悪かったね。男の子でさ）

などと思うものの、雷門の一件もあることで、

「なぉ」

軽く愛想を振りまくと、再びシャッター音の嵐。

「ふみゃ」

もう一声発して、わざとらしく一団に振り返ると、それだけでま

た、どつと場が沸いた。

サービスとしては、こんなところだろう。ギンは、和やかな雰囲気
気で浅草寺に向かう観光客たちの列から離れ、辻を西へと折れた。
「あゝ、行ってしまいました。……でも、仕方ありませんね。今、
猫ちゃんが走って行った先は、『すしや通り』と言いまして、その
名の通り、昔からお寿司屋さんが軒を連ねているところなんです。
本日の昼食を、お寿司コースで選ばれた方は……」

徐々に遠ざかっていくガイドの声。それが説明していたように、
浅草寺・浅草公園という、浅草観光の中心地に通じる仲見世通りを
西に折れて進むと、すしや通りに突き当たる。

恵比須堂の竹虎から聞いた話では、この界隈にいる若い野良猫が
昨晚、あの金髪少女を目撃したのだという。

すしや通りと、昨日ギンが少女と遭遇した浅草六区とは、道一本
で繋がっている。少女は、姿を消したギンが、まさか川を越えて向
島に帰っていったとは思わなかったのだろう。

ならば、まだこの近辺を探し回っているかもしれない。

そう判断したギンは、すしや通りに足を踏み入れた。

人捜しにしる何にしる、頼るのは、まずはこうした己の直感。次
に、ヒゲに感じる空気の流れ。街に飛び交う様々な音。匂い。……
実は、大きくてクリクリと動く割に、他の感覚器官と比べて、猫の
目はあまり良くないのである。

だから、少女を捜し始めて数分後、その最もアテにしていなかつ
た両目が、最初に少女の輝く金髪を捉えたときに、ギンは、何だか
少し嫌な予感がしたものだ。

繰り返すが、最も信頼しているのは、直感である。嫌な予感は、
大概当たってしまう。

少女は、昨日と同じ綻びた服のままだった。昨夜は、その辺の路
地裏で膝を抱えて眠ったのかも知れない。昨日見たときよりも、金
髪は、埃にまみれてくすんで見えた。

変わらないのは、眼光。相変わらず、タフな光を湛えていた。

と、不意に少女が足を止めた。

(気付かれた!?)

背後から尾行していたギンは、一瞬体を硬直させた。が、少女は、何事もなかったかのように再び歩き始めた。

ギンは、気を入れ直して背筋を張ると、やや爪先立ちの体勢を取った。元々、ほとんど出していなかった足音がそれで完全に消え去った。

少女は、すしや通りを北に突っ切ったところで、路地を右に曲った。慎重に後を追う。

路地を抜けると、街の様子が一変した。

通りの左右に建ち並ぶ居酒屋と、年季の入った屋台の軒先に、会議用の長テーブルと丸椅子がずらりと並んでいるその場所は、通称「煮込み通り」と呼ばれている。

まだ陽も高いというのに、どの店も盛況だった。ほとんどの卓上で、ビールとホッピーが仲良くデュエットしており、その脇では、通りの名前の由来ともなっている、名物の「牛すじ煮込み」が湯気を立てている。

客層は、主に中高年の男性だ。多くの者が、陽気な赤ら顔をして座席を埋めていた。

その酔客たちをよく見ると、耳にイヤフォンを差し込み、ラジオを聞いている者が多い。イヤフォンをしていない者は、それこそ昭和の街頭テレビの様相で居酒屋のカウンターに置かれている、油とヤニにまみれたテレビ画面に見入っている。

(そうか、今日はG1レースの日か)

通りのあちこちから漂ってくる酒とタバコの匂いに、ギンは何度も鼻をひくつかせた。

レース。要は競馬だ。近くにJRAの場外馬券売り場があるのだ。酔客たちは皆、そこで買った馬券を握りしめ、朝早くから一喜一憂とともにジョッキを傾けているのであった。

まだ幼いと言ってもいい年頃の、それも外国人の女の子が、そん

な通りをたつた一人で歩いている様は、中々の浮きっぷりであった。何人も酔客が、好奇と驚きをない交ぜにした視線を送っている。一方で、少女の方に目をやると、そんな町並みの変化など一切お構いなしという体だ。

怯んだり戸惑ったりするそぶりなどは微塵も見せず、地回りの組がフロントとして置いて置いている雀荘だの、サラ金だのの看板も目立ち始めた路地を、更に奥へ奥へ。土地勘のない人間は、まず立ち入らないだろう裏路地にも、ためらうことなく足を踏み入れていく。

（確かこの先は……。誰かと合流するつもりかな？）

勿論、ギンの頭の中には、そうした裏路地の情報もしっかりと刻み込まれている。

この先は、放置された資材置き場があるだけの袋小路のはずだった。

そんな所で、誰と会う？ 潰れたスナックの店頭に打ち捨てられた枯れ鉢の影から、少女の様子をうかがっていた、その時だった。

「……ここなら、人目につかないでしょう？ そろそろ、姿を見せてくれてもいいんじゃないかしら？」

ギンに背を向けたままで、少女が言った。

（マジで！？ やっぱり、気付かれてた！）

ギンの心臓が、跳ね上がった。

……いや、まだ分らない。この町には、野良の三毛猫など掃いて捨てるほどいる。

「にゃあ〜ん」

そんな一匹になりすましたつもりで、ギンは、ゆっくりと踵を返した。ここは念のため、位置を変えておくべきだと思ったのだが、

「ごまかしてもダメよ。逃げるなら、今度はわたしが追っただけだわ」

少女の声は、明らかにギンに向けられていた。改めて、ギンの胸に戦慄にも似た感情が走り抜ける。

「……いつ、気付いたの？」

ついに観念して振り返り、ギンは口を開いた。人間の言葉。同時

に、より合わせたままにしていた尾をほどく。

少女が、しっかりとギンに顔を向けて、言った。

「あなたは、わたしを監視していたつもりだったみたいだけど、おあいにく様」

「参っちやったな」

「ケット・シー……。ホンモノを見るのは、初めて。本当に人の言葉を話すのね」

「ケット・シー？ 何それ？」
「違うの？」

少女の目が、わずかに見開かれた。強い視線は相変わらずだが、さっきまでばらまいていたような鋭さと厳しさは、感じない。素直な驚きと、好奇心に満ちたものであった。裏町の酔客たちが、少女に向けていた感情と似ているかもしれない。

代わりに、ギンの目が鋭さを増した。

何せ相手は、カワイイ顔をして、トンファーで額をかち割ろうとするような人間である。

「……警戒するな、と言っても無理よね」

軽く息を吐いた少女が、肩をすくめて言った。

「とにかく、まずは名乗っておくわ。わたしは、ティアナ・アーレンス。……ぜひ、あなたと話がしたいの、ケット・シー」

「昨日は、いきなり殴りかかって来て、今日は、お話？」

「それは……」

と、少女が目を泳がせた。

「ちょっと事情があつて……。その、気が立ってたと言うか……。今は、抑えてるから。急に襲いかかってしまったことは、謝るわ。だから……」

（今は、ね）

まだ、警戒は解かない。とにかく、間合いだけはしっかり保っておこうと、一歩ギンが後ずさりした時、不意にヒゲに触れていた空気の流れと、色が変わった。

弾かれるように距離を取ったギンは、コンマ一秒で臨戦態勢に移
行した。

「ちよつと！」

と、少女が不満そうに声を荒げた。ギンは、一瞬、少女の目をキ
ツと睨み付けた。が、

（違う！ こつちじゃない！）

少女が、怒ると言うよりも呆気にとられたような表情をしている
のを見て、即座に疑念を捨てた。

（もっと奥だ……いや、上！）

ギンの感じた空気の変化。それは、明らかな殺気だった。最初、
少女が放ったものと思っただが、違ったようだ。

神経を研ぎ澄ませ、探る。
上。

三方を雑居ビルに囲まれ、切り取られた、狭い空が見えた。その
空の縁から、殺気は降りてくる。

雑居ビルの屋上から、何本ものロープが、ビルの壁面を伝って伸
びてきた。

ロープが、壁面を叩く音が、何層にも重なり合って空き地に響く。
そこで、ティアナも異変に気付いたようだった。素早く首を巡ら
せて、状況を確認している。当然、ギンも同様にした。

ロープは、全部で九本。一方の壁から三本ずつ。地面まで一メー
トルというあたりまで到達したところで、そこを伝って複数の人影
が、壁を蹴って降りてくるのが見えた。

ギンは、前に冴香と見に行った、地元消防署の防災訓練を思い出
していた。

レスキュー隊員たちが、確かこんな形で消防署の屋上からロープ
を伝って滑り降りてくるパフォーマンスがあったのだ。

違うのは、今降りてきた人間たちは、オレンジ色の隊服ではなく、
迷彩服に身を包んでいるということ。手にしているのが、人命救助
用のツールではなく、効率的に人を殺傷するための道具

サブレッサー
消音器

付きの自動拳銃と、コンバットナイフであるということだ。

「……さえちゃんか、言ってた。あなたはお人好しだから、人に騙されないように気をつけなさい、って。その前に、別の人にも言われたけど」

「違うわ！ ケット・シー。わたし、あなたを騙してなんかいない！」
「さすがにこの状況でそう言われても、はいそうですか、ってワケにはね」

完全な、半包围態勢が完成していた。視界の端から端まで、目に入るのは、銃とナイフばかり。構えている人間たちは、ヘルメットとゴーグルで顔を隠しているので人相は分からないが、全員が男であることは匂いで分かった。

「……証拠を見せてあげる」

半目になって訝いぶかっているギンだけに聞こえるような小声で、少女ティアナが言った。

「証拠？」

ギンは、ティアナを見上げた。ティアナは、きつく胸の前で右手を握っていた。その手の中に何か握りこまれているのが、ギンの側から見て取れた。

「撃たないで！」

ティアナが、男たちに向かって叫んだ。左手を開いて、頬の脇に上げている。

「やられたわ。降参する」

続けて言つて、残る右手も開いて上げるような仕草を男たちに見せた。右手が、ゆっくりとティアナの顔の前を通り過ぎる。

と、音がした。乾いた破裂音だ。

ギンは、見ていた。ティアナの右手からこぼれ落ちたパチンコ玉大の物体が地面に落ちて、ティアナの履いている底の分厚い靴でもって踏みつぶされるのを。

何のことはない。ティアナが踏みつぶしたのは、その辺の玩具屋で売っている、かんしゃく玉だったのだ。だが、効果はてきめんだ

った。

たとえ、どんな小さな音であろうとも、何かが爆発ないし破裂する音に反応してしまうのは、訓練された兵士の性である。ビルに囲まれた袋小路で反響した、かんしゃく玉の破裂音は、ギンが想像していたよりも遙かに大きく、そして複雑だった。

ティアナを除く全員の注意が、その破裂音の発生源に向けられた瞬間、ティアナの全身に力が満ちる。兵士の習性を、完全に知り尽くしたタイミングだった。

ティアナが、跳躍した。中央だ。その両手に、まるで魔法を使っ
て呼び出したかのように、トンファーが握られているのを、ギンは驚きと共に見つめていた。

ティアナの手の中で、トンファーが回り、伸びた。中央の男の顔面に、勢いに乗った先端部分が、叩き付けられた。一片の容赦も感じられない一撃だ。かけていたゴーグルが粉々に砕け、正面の男は、目元を押さえてうずくまった。

更に、ティアナが顔の前で腕を交差するようにして突き出す。と、彼女に拳銃の照準を合わせようと向き直った両脇の男たちの喉仏に、絶妙な角度でトンファーの先端が突き刺さり、二人の男が、まったく同じ仕草で喉を押さえて地面を転げ回った。

まさに、電光石火。一瞬で三人を倒された男たちに、動揺が走る。それでも、すぐにフォーメーションを組み直して、半包围を維持しようとする。

ギンが動くとするれば、今だった。

どっちに付くか？

「考えるな、感じるって、昔の人は言いました！」

迷うことなく、ギンは走った。走りながら、ヒト変生の術を発動させる。

ティアナが昏倒させた男の更に右隣、包围を縮めて今まさにティアナの背に銃の狙いを定めようとしていた男の肩を掴んで、強引に引き寄せる。

「何だっ!？」

くぐもった声がした。

反射的に向けられた銃を、わずかに身を引いたギンの右手が難いだ。三十センチほどの長さに伸びたギンの爪が、何の抵抗もなく銃にめり込む。銃は、あっさりと三枚に下ろされて男の手の中からこぼれ落ちた。

「ケット・シー！」

背後の異変に気付いたティアナが、叫んだ。目があったところで、ギンは言った。

「ボクは、ケット・シーなんていう変な名前じゃないよ。ネコマタのギンっていうの。ちゃんと覚えておいてね」

「ネコマタ……。ギン……」

「そ。君、チアナ、だっけ？ 呼びづらいから、ちーちゃん、って呼ぶね」

「え？」

にこりと笑ったギンが、ティアナの腕をぐいと引き寄せた。……尻尾で。

「ちよ、ちよっと！ きゃっ！」

もう片方の尻尾は、既にティアナの腰に回っている。

「な、何？ 何よこれ！」

あつという間の早業で、ティアナの片腕と腰とを絡め取った尻尾は、その小さな体を軽々とギンの頭上に抱え上げてしまった

「乱暴な証拠の見せ方だったけど、それはまあいいや。お話出来るところ、行こう」

見上げ、言った時には、もうギンはそのまま走り出していた。

掴みかかってきた男の頭をひょいと飛び越え、背中を踏み台にして、跳ぶ。

「何するのよ！ 放して！」

「ダメー。放っておいたら、ちーちゃん、この場の全員殴り倒しちやいそうなんだもん」

飛び移った先は、別の男の肩口。因幡いんぱんの白ウサギか、はたまた、義経の八艘飛びか。ギンは、足取りも軽やかに、次々と男たちの肩だ頭だ背中だと踏んづけていく。踏まれた方は、たまったものではない。ギンとティアナ、二人分の体重をもろに受けて、次々にバランスを失って倒れてしまうのだった。

なまじ訓練されているだけに、まったく予想だにしていなかった事態だったのだろう。男たちの狼狽ぶりといったら、目も当てられない。

「ん……。やだ……。変なトコ触らないで！ お、下ろしてよ！」

頭上から、半分怯えたようなティアナの声が降ってくる。

「はいはい、暴れないの」

「分かった。分かったから！ ……ひゃ、あん！」

最後の一人を踏み台にして跳んだ先に、揺れるロープがあった。

男たちが降下してきたときに使っていた物だ。

「あれを使おう！」

自由な両手でそれを掴み、ギンは、足を壁に付けてぐいぐいと壁面を駆け上がっていく。

「えひゃわあ〜っ！」

何とも形容しがたいティアナの声が、ギンの頭上から背中を通って、尻の下あたりに移動していった。重力に引かれたティアナの全体重が、二本の尻尾にのし掛かってくるが、ギンは涼しい顔である。「だいじょぶ、だいじょぶ。ボクの尻尾、お相撲さんと綱引きしたって負けないんだから。絶対に落っこささないから心配しないで」「そ、そういう問題じゃない！ ……ふ、ふさふさしたのが……くすぐったく……て……やあん……」

空き地を囲う壁に跳ね返って、妙に艶めかしいリバーブのかかった美少女の声が、地面にもつれる男たちへの、ささやかな置き土産になった。

「いい加減にもう下ろして」

浅草の中心を西に外れ、南北を太く貫く国際通りを渡った先に、東光院という寺がある。その寺の境内に隣接する、古い空き家の敷地内に、ギンたちはいた。

空き家は平屋の日本家屋で、少し手入れが滞って伸びてしまった生け垣に囲まれていた。

「はいはい」

ごんまりとした門をくぐって、空き家の庭へ回ったギンは、そこでようやくティアナの体に巻き付けていた尻尾をほどいた。庭に突き出した濡れ縁の上に、丁寧な手つき……もとい、尾つきで座らせてやる。

ようやく自由を取り戻したティアナが、キッとギンを見上げた。

ほんのりと頬が桃色に上気し、少々息も荒い。

そんなティアナのことを、何とはなしに見つめ、

(さえちゃんの小さい頃に、ちよっと似てるかな)

ふと、ギンは昔のことを思い出した。子供の頃の冴香は、何故だかヒト型になった時のギンの尻尾がいたくお気に入り、すぐに掴んで振り回そうとしたものだ。そう簡単に捕まえられるのも面白くないので、適当に逃げ回っていると、そのうち本気になってきた冴香は、汗だくになりながら意地でも捕まえようとしてきて……。

「何をにやにや笑ってるのよ。気持ち悪いわね」

ティアナの声が、ギンを現在に引き戻した。

「あ？ いや別に、何でも」

「……それで、ここはどこなの？」

「知り合いが持つてる家だよ。もっとも、普段はあんまり使ってなくて、この辺の野良猫たちが、たまり場にしてるんだ」

「安全なの？」

「持ち主が、人払いの結界を張ってるからね。ここって元々、マダナイ先生が、編集者さんから逃げるために買った家なんだ」

「ケツカイ？ ……何を言っているのかよく分からないけど、安全なのだったらいいわ」

ようやく緊張が解けたようで、ティアナは、濡れ縁から放り出した足をぶらぶらと揺らしながら言った。

「うん。ここなら、ちーちゃんのお話がちゃんと聞けると思ってさー」

「ちーちゃん？」

「さつきも言ったじゃん。チアナ、だから、ちーちゃん」

「わたしは、ティアナよ。ティ・ア・ナ！ 勝手に変な呼び名をつけないで」

「え、じゃあ、ていーちゃん？ ……ちょっと呼びづらいよ」

「呼ばないでいいわ」

「じゃ、やつぱり、ちーちゃんだね」

にっこり笑って、ギンは言った。代わりに、ティアナが無言で大きなため息をついた。

「くだらない話をしてる暇は無いの。単刀直入に、用件だけを話しましょ」

「そーいうところも、さえちゃんにちょっと似てるかも。さえちゃんもさー、ちーちゃんよりもっと小さい頃から、な〜んか難しい言葉で喋るんだよね」

「何でもいいけど、その呼び方はやめて。 ……まったく、何なのよ、あなた」

「何なのと言われても ……。ネコマタだけど？」

バン、とティアナの手が濡れ縁を叩いた。

びくつと肩を持ち上げたギンが、一歩下がる。

「わ、そっちこそ何だよ。どうも人間の女の子って、怒りっぽい子が多いんだから」

「だったら、怒らせるようなことを言わないで。とにかく、わたし

の話は一つだけ。壺を返して。今すぐに」

目をつり上げたティアナが、上目遣いにギンを睨にらんだ。

「返せって言うけどさ」

と、やんわり応じるギン。ティアナの視線を避けるように身を落として、地べたにあぐらをかいて座った。

「あれ、実はさえちゃんがお金出して買った壺なんだって。買ったのは、壺だけじゃないみたいだけど」

「知ってるわ。綾織部沓香が、破産した富豪のコレクションを買い取ったことは。でも、あの壺は、元々はわたしの……いえ、誰の物にしてもいけない代物なのよ。あれに入っているモノを、あなたも見たはずよ。あれは、世に出してはいけない物なのよ」

「……何で？」

「危険だからよ！ 昨日は、あのナントカいう提灯に取り憑いた程度で済んだようだけれど、もしも悪用されて、もっとたちの悪い物に憑かれたら、大変なことになるわ！」

そこまで言った時だった。急に言葉を切ったティアナが、突然立ち上がったかと思うと、濡れ縁を飛び降りて振り返った。

と、それまで閉まっていた空き家の雨戸がゴトゴトと動き出し、左右に開いた。

「……人が気持ち良く眠っているのに、何を大声で物騒な話をしてるのであるかな？」

開いた雨戸の隙間から、ぬつと何者かが現れた。

「誰!？」

ティアナが、厳しい声で問いただした。

雨戸が、全て開く。そこに、一人の女が立っていた。

年の頃なら、二十代の中頃か後半。赤みがかった長い髪を頭の上で結い上げており、その下に、すつと鼻筋の通った小さな顔。

地味な色の着流しに縞の帯を締め、丈の短い紫の丹前を肩に引っかけるといふ、時代がかった出で立ちが目を引く。

「吾輩に、誰と問うのであるか？ 異国の娘さん」

薄く紅の引かれた唇の端を、きゅうつと持ち上げて、女が笑った。
「マダナイ先生、またサザエさんのお父さんみたいな格好してるー」
その女に向かって、ギンは、親しげに声をかけた。女の細い目が、
ティアナからギンへと向かう。

「また君は……。マダナイというのは、そういうことではないとい
うのを、いつ覚えるのであるか？ それと、波平さんルックという
評価も、どうか改めてほしいであるよ」

「何者なの？」

ティアナが、今度はギンに尋ねた。

「マダナイ先生だよ。この家の持ち主。小説家って言って、すごい
物知りなんだ」

「物知りかはさておき、自己紹介はしておこう。吾輩は、この家の
持ち主で、そのギン君が言うとおり、小説家である。名前は、ま
だ無い」

「マダナイ……」

ゆっくりと発音を確かめるように、ティアナが、口の中で呟いた。

「……またギン君のせいで不幸な誤解がこの世に生まれたのであるな」
大層、芝居がかった仕草でかぶりを振って、女　マダナイ（？）
が言った。

「その気配……。あなたも、ただの人間じゃないわね？」

「ほう、気付いたであるか。中々、感性の鋭い娘さんであるな」

マダナイが、腕を持ち上げて広げた。と、着流しの袖で隠れてい
た腰の辺りから、にゅうつと姿を現したのは、ギンのそれとよく似
た二本の尻尾だった。猫又の、尻尾だ。

その尻尾の先には、それぞれ、両切りタバコとマッチ箱とがぶら
下がっていて、

「お見立て通りだ、娘さん。そのギン君と、上野寛永寺の三吉君。
多摩八王子のクロツキ君。それに吾輩で、東京の猫又四天王といっ
たところであるよ」

ギンの尻尾にひけを取らない器用さでタバコを口に運び、マッチ

を擦った。

実にうまそうに一服し、紫煙を吐いたマダナイが、言った。

「で、うるさい編集氏の魔手を逃れた吾輩の、わずかな安息の時を妨げた諸君は、何の話をしていたのであるかな？ 壺だとか、取り憑くだとか聞こえたが」

「んとねー」

水を向けられたギンが、答えようとした矢先、

「余計な口を突っ込まないで。さっさと消えて、仕事に戻るのね」

何かに苛立った風で、声のトーンを落としたティアナが、突き放すように言った。

「ほう……」

その物言いに、マダナイの細い目が、更に一層細くなる。

「初対面の者を相手に、いささか無礼なお嬢さんであるな、君は。吾輩に消えると言うが、この家は元々、吾輩が買い求めた家であるよ？ そこに勝手に入り込んでいる分際で、家主に対して消えるとは、筋が通らぬと思うのであるがね」

マダナイの周囲の空間が、不可思議な力で無理矢理に歪められたような、そんな気配が漂った。その歪み　マダナイの体から陽炎のように立ち上る『妖気』の存在を、ギンは、はつきりと感じた。

「吾輩、寝起きはいつも、少々機嫌が悪いのであるが、今日はまた格別に……」

「ちよつと、ちよつと！　先生、タイム！　待った！」

これは不穏と察したギンは、慌ててティアナとマダナイとの間に割って入った。

「先生、抑えて、抑えて。……ちーちゃんも、何でそういきなりケン力腰なのさ」

マダナイをなだめつつ、ティアナに目をやったギンは、そこで異変に気付いた。

「ちーちゃん？」

さっきまで、血色の良かったティアナの表情が、血の気を失って

真っ青になっていたのだ。呼吸も浅く、苦しげ。額には、べったりと脂汗が浮かんでいる。

「先生！ 何したの！」

「むむ？ いや、少々驚かせてやろうとしただけであるよ、吾輩は何ともはや、妖気に当てられてしまったか？ これは申し訳なかった」

「勘弁してよ。ちーちゃん、大丈夫？」

心配そうに、ギンはティアナに手を伸ばした。

「うる……さい！ わたし……に……触るな！」

だが、その手は、ティアナによって乱暴にはねのけられた。ティアナが、苦しげな息のまま、一歩二歩と後ずさった。

「う、動かない方がいいよ。中で休もう？ 先生、寝てたんならお布団あるでしょ？」

「う、うむ。とにかく、中に入るであるよお嬢さん」

体を開いたマダナイが、ティアナを促す。ギンはギンで、何とかティアナに近づこうと試みる。

しかし、ティアナの手にまたトンファーが握りしめられているのを見て、ギンは動きを止めた。その先端が、ギンの胸に向けられていたのだ。

「は、発射禁止！ 話したいんでしょ？ 落ち着いて！」

「黙れ！ ……壺は必ず取り返す！ ……取り返すわ。あれは、お……ダメ！ ダメなの！ 持っ……て……は……」

「その事は後で話そうよ。ね？ だから今は……」

必死の説得は、ギンの胸に走った鈍い痛みに遮られた。ティアナが、ギンに向けてトンファーの先端部を発射したのだ。

「かはっ！」

「ギン君！」

肺から空気の塊が押し出され、ギンの視界が一瞬、暗転した。

ティアナが、身をひるがえした。生け垣に突進して飛び越えると、向こう側に消えていった。

「待って！」

すぐに後を追ったギンが、生け垣に面した通りに出たときには、既にティアナの姿は、どこにも見えなくなっていた。

(ちーちゃん……)

打たれた胸を押さえ、ギンはしばしそこに立ち尽くしていた。

応接間のテーブルには、ティーカップが二つに、マグカップが一つ。

ティーカップからは、湯気と共にダージリンの良い香りが漂ってくる。マグカップの方から湯気は立っていない。人肌にぬるまった猫用ミルクが入っているのだ。

「……大体のお話は、分かりましたわ」

ティーカップの一つをマダナイの前に置き、マグカップはギンに手渡してやってから、冴香は、自分のカップを持ち上げて言った。

「ティアナ君、だったかな？ 彼女には、少々申し訳ないことをしてしまっただであるよ」

遠慮を見せずカップを受け取ったマダナイが、まだ熱いダージリンを一口含んで言った。

「先生、猫なのによくそんな熱いもの飲めるね」

ギンが、言った。

「慣れであるよ、慣れ。そもそも猫舌というのは、自然界には加熱した食物が無いにも関わらず、人間が飼い猫に加熱した餌を与えたところ……」

「そのお話は、また今度にしていただけますこと？」

早速、本題からズレ始めた話題を引き戻すため、冴香の咳払いが応接間に響いた。

「お二人とも、事態は想像以上にややこしいことになっている、という認識を持って下さらないと困りますわ」

「そうは言うがね、冴香君。認識も何も、吾輩は今さっき、大まかな話をギン君から聞いたばかりであるよ」

「では、これを見た上でもう少し詳しい話を聞いて、改めて危機感を持って下さい」

ダージリンの香りで気持ち落ち着け、冴香は、噛んで含めるよ

うに言った。

カップを置き、テーブルに伏せてあった二枚の写真を、ギンとマダナイの前に滑らせる。

「拝見」

マダナイが、写真を取り、ギンが横から覗き込んだ。

「これは……」

一枚目の写真を見て、マダナイが目を丸くした。

「鉤十字だ……」

「いかにも、このマークは、ハーケンクロイツであるな」

応じたマダナイが、ギンの指摘した、写真に映っている人物が着ている軍服に記された紋章を指でなぞった。

「その人物の持っている壺をご覧なさい」

冴香は、言った。すぐに、ギンが「あっ」と声を上げた。

「ヘロムニヤムニヤの壺だ！」

「ヒエロニユムスの壺、です。その写真の人物こそ、壺の名前の由来ともなった、旧ナチスの技術将校、オットー・フォン・ヒエロニユムス大佐ですわ」

「ナチス……。では、この壺は、やはり単なる美術品ではないのであるな？」

「そうです。ヨーロッパにおける歴史の裏事情に詳しい『機構』の人間から、アフリカの鉱山利権を賭け札にしてまで、ゲームで聞き出した情報です。確かな物ですわ」

答えた冴香は、なぜか問うたマダナイではなく、ギンの方を見て言った。

「当時のナチスドイツが、科学もオカルトも一緒くたにして、なりふり構わない新兵器開発に走っていたのは、事実のようですね。その一つに、このヒエロニユムス大佐が指揮を執った、『エーファー計画』というプロジェクトもあつたのです」

「新兵器って、昨日、ボクと話してた、不死の軍隊ってやつ？」

ギンが、マダナイの手から写真を取り上げ、身を乗り出した。

「残念ながら、こうして具体的な計画名や、実行者の存在も確認されてしまいますと、眉唾とも言い切れなくなってきましたわね」

「冴香は言った。」

「借金のカタに買い取ってやった美術品の来歴を調べてみたら、この壺が混じっていたということであるか。しかし、何ともはや、突拍子もない話であるなあ」

腕組みをしたマダナイが、ソファに深く座り直した。

そんなマダナイの態度に、冴香は、少し心外そうに言った。

「ギンにも言いましたけれど、先生までそういうことを仰るんですの？ わたくし、ギンも先生も、いわゆる常識の範疇から外れたところにいる存在ということを確認しているからこそ、こんなお話を真顔でできるのですわよ？」

「そう言われてしまうと、返す言葉も無いであるが……」

「ばつが悪そうに、マダナイが頭を掻いた。」

「それに……」

と、また冴香は、ギンを見た。

「上野で強盗やらかした連中のことは、何か分かったの？」

視線に気付いたギンが、写真から目を上げて尋ねてきた。

「……ええ。今日、ギンが見た迷彩服の男たちという話で、確信が持てましたわ。二枚目の写真をご覧ください」

ギンが、二枚目の写真を見た。今度は、マダナイがギンの手元を覗くことになった。

「隠し撮りであるな」

「ちーちゃんと一緒にいる時に、ビルから降りてきた奴らと同じ服だ」

「先頃、米軍の横田飛行場で撮影されたものですわ」

「ふん。……って、ちよっと待って」

ためつすがめつして写真を眺めていたギンが、写真の右端を押さえて、冴香に向けた。

「やっぱり、気付いてしまいましたわね」

ギンが押さえているのは、一人だけ迷彩服ではなく、ダークグレーのスーツを身に付けている、壮年の男だ。

冴香は、心の底がすっと冷たくなっていくのを感じた。何度も自分の目で確認して、多少なりとも精神的な抗体を作ったつもりだったが、やはり見る度に同じ感覚を味わう。

「この人、さえちゃんのお父さんだよな」

確信を持った声で、ギンが言った。冴香の心に、一段と冷たい風が吹き込み、同時にその風が、心の奥底で灰を被っていくように感じた。たものを煽り立てる。

「ギンには、以前に何度か言いましたわよね？ その男は、わたくしの父親なんかではありませんわ」

「またそんな……」

「その男は、剣持^{けんもちせいいち}一。たとえば、便宜的にだつて、父などと呼びたくありませんの。薄汚い死の商人、『ソードセラー』で充分ですわ」

冴香は、本当に汚らわしい物を見る思いで写真から目を背けた。できることなら、一秒だつて見ていたくない顔だつた。

「相変わらず、ねちねちとストーカーのようにわたくしの動きを監視して、気持ち悪いことこの上ありませんわね。わたくしが、美術品を買い取ったと知った瞬間に、わざわざ、わたくしの邪魔をするためだけにアメリカから戻ってくるなど、本当に反吐が出ます」

「さえちゃん」

「取り巻きがまた、気に入らないですわ。表向きは、PMSCSのコントラクターですが、実態は、裏で米軍の一勢力と結託した剣持の私兵集団です。まったく、どこで壺の情報を掴んだのだから……」

「ピーえむ？ 何？」

「プライベート・ミリタリー・アンド・セキュリティー・カンパニーズ、略してPMSCS、であるよ。民間軍事請負企業、とても訳せば良いかな？ 要するに、お国のためではなく金のために働く兵隊さんのことで、そういう企業に所属している者を、契約者……つまり、コントラクターというのであるよ」

この手の話には完全についていけないギンに、マダナイが助け船を出した。その流れで、冴香に質すように言う。

「で、状況から見てこの剣持氏は、日頃、あまりそういったことに興味を示さない冴香君が、大量に高価な美術品を購入したことに裏の事情を嗅ぎつけた。果たして、購入した美術品の中にとんでもない代物が紛れている事を知り、力づくでの強奪を企てたと……そういうことなのであるかな？」

「え、ええ。まあ。……そんなところだと思いますわ」

冴香は、顔を伏せるようにティーカップに視線を落とし、言った。

「何だ、冴香君にしては煮え切らない物言いであるな」

「いえ……。うかつだったと後悔しているのですわ。木を隠すなら森の中と、カムフラージュしたつもりが、裏目に出てしまいました。ですが、だからと言ってあの男のような人間に壺を渡すわけにはいきません。何が何でも取り戻さなければ」

再び顔を上げ、冴香は、決然と言った。

「なるほど、確かにこれは深刻な事態かも知れぬよ、ギン君」

マダナイが、横目でギンを見やった。

「どーいうこと？」

「武器商人の剣持氏にとって、この壺は、価値ある商品だということであるよ。しかも、作られた当時と比して、遙かに商品価値は高いと見るべきであろうね」

「商品……」

ギンが、何かおぞましい呪詛を吐くような声で呟いた。

マダナイから話を引き取って、冴香は続けた。

「今の世の中だからこそ、脅威になる使い方がありますわ。例えば、ホムンクルスを使って、核ミサイル基地のシステムを乗っ取るなどということができれば、それはもう世界を人質に取ったも同然……」

自分で言って、ぞっとした。

まだ湯気の立っているカップの中身を一気に飲み干す。たとえば、ずかでも、今の一言で冷え切った胸の内を温め直したかった。

と、

「さえちゃんはさ……」

写真をテーブルに戻したギンが、いつになく真剣な眼差しと声と言った。

「さえちゃんは、何でこの壺を買い取るうと思ったの？」

いつもの、どこか脳天気な雰囲気、完全になりを潜めている。「どこで知ったかは聞いてないけど、さえちゃんは、このヒエロニユムの壺がどういう物か分かった上で、他の美術品と一緒に買い取ったんだよね？　ちーちゃんは、壺を誰の物にしてもいけないって、言ってたよ。……ねえ、さえちゃんは、壺を取り返したらどうするつもりなの？」

その眼差しに圧倒されてしまい、冴香は、思わず身じろぎをしてみました。

「も、勿論、安全な場所にしっかりと保管しておきます。不届き者の手に渡らないよう、わたくしが責任を持って監視しますわ」

「それって、さえちゃんが壺を使おうと思った時には、いつでも使えるようにしておくってことだよな？」

「何を藪から棒に。どうしましたの？」

「ちゃんと答えてよ。使うの？」

ギンが、畳みかけてきた。

「誰も使えないようにするために、わたくしの手元に置いて監視しておく、と言っているのですわ。それではご不満？」

「ボク、そんなに頭良くないけど、さえちゃんが、どういう世界でどういう仕事をしてるかは知ってるよ。さえちゃんのお爺ちゃんに散々聞かされたもん。さえちゃんが、壺を持っているっていうことだけで、その世界の何かが変わっちゃうってことも」

「それは……」

「ボクのことなら、いくらでも好きに使ってもいい。でも、他はやめようよ。……壺は、さえちゃんでも使えないようにするって約束してくれないなら、ボク、手伝わないからね」

ギンが、立ち上がった。そのまま、冴香に背を向けて応接間を出て行くとする。

「本当に、一体どうしたっていうんですの。ギンの言い様は、まるでわたくしが、壺の力を悪用したがつているとでも思っているかのようですわ」

何の前触れもなく、本当に唐突に態度を硬化させてしまったギンに、冴香は戸惑いを隠しきれなかった。

「じゃあ、使わないって約束して。絶対に、さえちゃんも手出しできないところに捨てるとか、できるなら壊しちゃうって約束してよ」「ギン……」

冴香は、即答できなかった。が、それは無理からぬ話である。第一、壺が秘めている力の全てどころか、扱う方法すらもまだ把握していないのだ。捨てるだの、破壊するだの、軽々な約束などできようはずもない。

そのことをギンにどうにか説明するよりも先に、

「ボクの言ったこと、考えておいてね」

ギンはもう、応接間のドアを開けてしまっていた。

「待ちなさい！ どこへ行くんですの」

「ちーちゃんを捜さなきゃ」

短く答え、ギンは姿を消した。室内には、冴香とマダナイだけが残される。

しばし、奇妙に固い沈黙が流れた。

「……動物的直感、というやつであるかな」

その沈黙を破ったのは、マダナイだった。

「え？」

「ギン君は、本能的に壺の持つ危険度と、それにまつわる一種の魅力を嗅ぎ取ってしまったのであるよ。冴香君が指摘したように、この壺は使い方一つで、世界のパワーバランスを大きく傾ける。ギン君は、常にそうした世界のありように介入し続ける『綾織部冴香』にとって、壺がどういふ価値を持つ物なのか、分かってしまった

のであろうなあ」

「それではやはり、ギンはわたくしのことを信用していないということですか？」

「いやいや。ギン君は、『ボクのことなら、好きに使ってもいい』と言ったではないか。冴香君も、壺の話をするとき、しきりにギン君の方を気にしていたのは、ヒエロニユムスの壺が作り出された経緯と、ギン君の生い立ちとを重ねていたからであろう？ 当然、ギン君自身もそのことには気付いているのであるよ」

「だったら、何故？」

「それもまた野生のカンであるかな。君がギン君の要望に即答できなかったとき、ギン君は、君の中に生じたわずかな迷いを見抜いている。冴香君にも、自分なりの理はあるうが、それがいわゆる建前ではないと、私心無し、と断言できるであるかな？」

「わたくしは、あの男とは違いますわ！ 己の利益のために壺を手にしようとしているわけではありません！」

何かを試すような目つきで言うマダナイに対し、冴香は、思わず声を荒らげた。

しかし、マダナイは一切怯む様子もなく、悠然とそれを受け流し、「君個人は、そうであろうがね。が、綾織部のためとなれば、どうであるか？ 吾輩が問うたのは、そこであるよ。綾織部家の成してきた千年の使命を果たすに当たり、壺の力に魅力を感じない……と言うのでは、逆に綾織部家当主としては、失格という烙印を押されかねないであるよ」

冴香は、唇を噛んだ。ギン以外の前では、滅多に見せることのない感情の揺らぎが、瞳に浮かび上がるのが、自分でも分かった。それを、止められなかった。

「……卑怯な物言いなさいますのね」

「すまなんだ。吾輩も言葉が過ぎたようだ。冴香君のその迷いこそ、君が当主たる使命を忘れていない証であるのにな。責めているように取られたなら、謝ろう」

「いえ……。先生の仰ることも、もつともですわ」
ようやく押し殺した声で、冴香は言った。「でも……」と、続ける。

不意に、寂しさにも似た感情がこみ上げてきた。本当は、マダナイではなく、ギンにかけてほしかった言葉だったことに、気付いてしまったのだ。

「ギン君は、考えておいても言うていたではないか。ギン君にとっても不意のことで、わき上がってくる感情をうまく言葉で伝えられなかったのであるよ。その肩代わりを、ティアナという少女に求めて、捜しに行ったのであろう」

「……その子については、こちらでも調べなければいけませんわね」
目を閉じ、揺らぎを殺し、冴香は言った。

新たにやるべきことを見だし、それに邁進することで、乱れた心に落ち着きを取り戻そうと考えたのだ。

「上に参りましょう、先生」
立ち上がった冴香は、ギンが開け放ったままにしていた扉をくぐった。

しかし、二階の自室に至るまでの短い間でも自問は続く。

（わたくしが、壺の誘惑に取り憑かれている？ それはわたくしが、あの男の娘だから？）

何故、あの時即座に、「ギンの言うとおりにいたしましょう」と言えなかったのだろうか。言ってしまうえば、良かったのだ。得体の知れぬ壺の力など借りずとも、歴代の綾織部家当主たちによって築かれたものは、盤石のはずだ。それを受け継ぎ、運用する己の資質についても同様の自負がある。ならば……。

思考が、ぐるぐると回り始める。

こんな時、ギンがいつものように肩に乗っかってきたり、抱っこをせがんだりしながら、

「大丈夫だよー。さえちゃんが、そんな悪いことしない女の子だったこと、ボクちゃんと知ってるんだから」

そんな風に声をかけてくれたなら、もっとしっかりと自分に自信を持てるのに。

詮無いことを考えてしまう。

「ギンの馬鹿……」

思わず口をついてしまった呟きも含め、その思考の矛盾に気付かなかったことは、冴香の失調を如実に表していたのかも知れなかった。

この時、間近に迫っていた危機を、肌で感じ取ることができなかったほどに。

ACT3 猫は湯船で過去を語る

玄関を手で開けた時、ずっとヒト型のままだったことに気付いた。変身を解き、猫の姿に戻ったギンは、「ふう」と大きなため息をひとつ漏らした。

「何であんなこと言っちゃったかな……」

冴香のことを手伝わない、などと、そんな話をするつもりではなかった。だが、冴香が壺の使い道について言及したとき、言いしれぬ不安のようなものが胸に渦巻き、どうしようもなかったのである。ギンが眠っていれば、何も言わずに自分のシヨールをかけてくれる。寝言でぼつりと呟いただけで、好物の猫缶を用意しておいてくれる、優しい『さえちゃん』。

対し、得体の知れない壺の来歴を人知れず調べ上げ、襲撃者たちの正体を暴き出し、そして、その恐るべき使い道を涼しい顔で言うてのけてしまう、『綾織部冴香』。

どちらも、同じ人物。その二面性については、十七年も一緒にいて、分かっているつもりだったのだが……。

では何が、これほど自分の心をざわつかせるのかと考えたギンは、ふと思い出した。

初めて出会った時の別れ際に、ティアナが見せた表情だ。切々と何かを訴えかけるようなあの目。いつかどこかで、自分は、同じ目をした誰かに会っているはずなのだ。

(どこで?)

思い出せなかった。遠い記憶を探ろうとすると、どうしても頭の中にもやがかかったようになってしまい、曖昧な像しか結ばない。

やはりティアナと、もう一度逢わなければならぬ。ギンは思った。

ティアナがあの時訴えたかったことが何かを知ることができれば、それがヒントになるかもしれない。それに、恐らく彼女は、壺が持

つ危険性をギンや冴香よりもよく把握している。ティアナの口から冴香に真実を語ってもらうことができたなら、冴香が最終的に壺をどう扱うのかを決める判断材料になるだろう。

疲れのせいか、わずかに重く感じる足を持ち上げ、ギンは動き出した。

と、屋敷の前で何やら工事が始まるうとしている現場に出くわした。

電線工事を行う高所作業車が一台、電設会社の社名が大きくプリントされたワンボックスワゴンが一台、それぞれ正門を挟んで向かい合う格好で止まっている。

ワンボックスから降りてきた作業服姿の大柄な男たちが、てきぱきとした動作で車両通行止めの看板などを道路に置いていた。

本格的に工事が始まる前に、さっさと抜け出してしまおう。ギンが、足を速めようとした時だった。

「お、可愛い猫がいるぞ」

男の一人が、ギンに気付いて目の前にしゃがみ込んだ。

笑顔でギンを見つめる男。彼にまったく悪気は無いのであるうが、一刻も早くティアナを捜しに行きたいギンにとっては、行く手を塞ぐ障害物でしかない。

「どれ、おやつでもやるか」

男が、言った。

さつき観光客相手にそうしたように、愛想を振りまいてやるうという気分ではない。

「ほれ、食べる」

男が、ポケットから何やら丸っこい物を出してギンの目の前に転がすのを、無視して通り過ぎようとしたとき、妙なことに気付いた。目の前に転がされたのは、ゴルフボール大の球体で、しかも金属質の光沢を放っていた。到底、食べ物には見えない。

何かが、おかしい。目の前で、球体が二つに割れた。ギンの脳内を、激しい警告アラームが駆け巡った。刹那、

「おらっ！」

急に乱暴な声を発した男の手が、もの凄いスピードでギンの首筋を押さえつけた。同時に、割れた球体から霧のようなものが勢いよく噴きだし、ギンの顔全体に降りかかった。

（何だっ！？）

その霧をもろに鼻から吸い込んでしまったギンは、直後に顔全体が爆発したかのような激痛に見舞われた。

絶叫して身をよじった。全力を振り絞り、何とか男の手から逃れることはできたが、

（息が……できない……）

引き続き襲ってきた猛烈な息苦しきで、よろよるとその場に倒れ伏してしまふ。そんなギンの頭上から、

「玉葱とユリの根っこ、それにラツキヨウから抽出して何百倍にも濃縮したエキスだよ。猫にやあ、随分と効くだろう？」

男の声が降ってきた。次いで、腹部に強烈な衝撃が走ったかと思うと、ギンの体は数メートル吹き飛ばされ、道路を挟んだ民家のブロック塀に叩き付けられた。

一般的に、玉葱などラツキヨウなどは、犬や猫にとって禁忌であると言われている。

なぜなら、それらユリ科の植物に含まれている、アリルプロピルジスルファイドという物質によって、血中のヘモグロビンが破壊され、溶解性貧血を引き起こすから……。平たく言えば、血液が酸素を運ぶ機能を失って、酸欠になってしまうからである。

犬猫にとつてこの毒性は強烈で、ペットの猫がキッチンにある玉葱をボール代わりに転がして遊んでいるだけでも、数日で死に至ることがあるほどだ。

ギンは、そうした専門知識を持っているわけではないが、本能と経験則で、その危険は知っていた。町の野良猫たちが、コンビニ弁当の残飯に含まれていた玉葱を誤って食べ、何匹も酸欠で苦しみ抜いて死んでいるのだ。

毒物に対しても、並の猫とは比べものにならない耐性を持っているギンであったが、男が言うように何百倍の濃縮エキスなどを大量に体内に取り入れてしまつては、さすがにただではすまなかつた。息を吸えども吸えども、まるで楽にならない地獄の苦しみの中で、二台の車からばらばらと人が降りてくる気配が、やけに鮮明に感じ取れた。

「住宅街だ。銃器は使つな。護衛は排除したから、後は女一人。どうとでもなる」

「対象が対象です。屋敷内に警備システムがあるので？」

「その点は、ボスから策を聞いている。問題はない。突入し、女と目標を確保した後に速やかに撤収する。急げ！」

ひそめた声でやりとりがあつて、複数の気配が、冴香の屋敷に向かうのが分かつた。

(こいつら……)

やり取りの中にあつた、「女」と「目標」が何を意味しているのかは、考えるまでもなかつた。冴香が、危ない！

連中は間違いなく、先刻ギンとティアナを襲つた連中の仲間……いや、本人たちだ。

うかつだつた。もっと注意深く、男の様子を観察していれば、匂いと感覚とで分かつたはずなのだ。考え事をしていたせいで、警戒意識がおろそかになっていた。

そう思つても、後の祭りだ。まったく呼吸ができなくてもがき苦しむギンを捨て置いて、幾つもの足音が、門の向こうに消えていった。

(さえちゃんを……さえちゃんを守らなきゃ！)

息苦しさと、腹部の激痛とに精神力だけで耐えて、ギンは何とか立ち上がった。

たつたそれだけの事で、視界が霞み、意識が飛びそうになる。

それでも、行かなければならない。冴香の危機を、黙って見過ごすわけにはいかない。

「一か八か……」

ともすれば切れそうになる意識を気合いで繋ぎ止め、集中する。

玉葱の毒は、人間には効かない。ならば、ヒト型を取れば、あるいは……。

果たして、やっとの思いで変身したギンが大きく息を吸い込むと、わずかではあるが、呼吸ができるようになった。

しかし、万全の状態には程遠い。一度破壊された赤血球は、いくら猫又の身体能力をもってしても、そう簡単には元に戻らないようだった。今のギンの状態は、人間で言えば、ろくな訓練も積まず、酸素の薄いエベレストの頂上にいきなり放り出されたようなものであった。加えて、変身するための集中力を維持し続けたことでの、精神的疲労もある。

わずかな呼吸を得た代償は、凄まじい頭痛と吐き気。手足の痺れ。それでも、

「さえちゃん……今、行くからね……」

ギンは、走った。走れぬ体で、走った。

牙香を守る。それは、ギンがギンであるために果たさねばならない、絶対の約束なのだ。

正門を回り込み、屋敷の裏手へ。

わざわざ手の込んだ「タマネギ爆弾」まで用意した連中だ。敵は、こちらの正体を知っている。野良猫を装って侵入、という手は使えない。それ以前に、猫に戻ればまた酸欠だ。

ふらつく足で、不格好に塀を乗り越えた。着地の音を出さないようにするなど、普段は意識すらしないことに全神経を集中する。いつも商店街の御用聞きが出入りする裏口へ。庭木の茂みに隠れて様子を伺うと、目深に帽子を被ったツナギ姿の男が、ドアの前で周囲を警戒していた。見張り役のようだ。敵は、正面ではなくこの裏口から屋敷内に侵入したらしい。

隠密行動に適した猫の姿を取れない今、ヒト型のままでは気付かれないように、あの見張りを仕留めなければならない。

そうする技術を、ギンは知っている。体に刻み込まれていると言っても良い。だが、これまで極力使わないようにしていた。その技術を使うことは、ギンにとって忘れたい過去を、嫌でも思い出させるからだ。

それでも、今は、

（やるしか、ないか……）

覚悟を決め、ギンは行動を開始した。

腰を低く、息を潜め、見張りの死角へゆっくり回り込む。見張りの動きが、ドアを中心にして半径数メートル圏内の警戒に限定されているのを確認し、足下に落ちていた小石を握り込んだ。

投げる。小石は、見張りの死角をついて放物線を描き、見張りの目の前に落ちた。見張りが、上を向くわずかな隙に背後から接近し、天を仰いだことでさらけ出された喉仏にギンの右腕が絡みついた。そのまま力を入れる。

「ごめんね」

喉仏ごと頸骨^{けいこつ}をへし折られた見張りを見下ろすギンの瞳に、凄惨な光が揺らめいている。

すぐさまギンは遺体を調べ、ツナギの懐にあったオートマチックとナイフとを回収した。

慣れた手つきでマガジンの残弾を確認。戻してセーフティーを外し、流れるような手つきでスライドを引いて、チャンバーに初弾を装填。再びセーフティーをかけた。

急な目眩が襲ってきた。頭が、割れるように痛む。だが、まだ始まったばかりだ。

「心頭滅却すれば火もまた涼しくて、昔の人は言いました」

奥歯を噛みしめて頭痛と目眩に耐え、裏口に近づく。慎重に扉を開け、中に転がり込む。起き様、構えた銃を左右に振った。人の気配は、しない。

裏口は、屋敷の巨大なダイニングキッチンに通じている。そこを出た先にある長い廊下の左右には、今は使われていない使用人用の

居室。化粧室。物置。その先が、正面玄関のエントランスホールで、二階に続く螺旋階段が伸びている。

階段の中程に、見張りと同じツナギ姿をした長髪の男が、拳銃を手に座り込んでいた。

廊下の切れ目からエントランスホールに出てしまうと、身を隠す場所はない。それでも、迷うことなく、ギンは長髪の前に身を晒した。

急に転がり出てきたギンの姿に、長髪が声を上げようとする。それより早く、尻尾の先で握ったナイフが、半径の大きいサイドスロ―で放たれ、真横から長髪の左肩を貫いた。

ギンは、舌打ちした。狙いは、肩ではなく頸動脈。一撃で決めるつもりだったのだ。

「状況、02（ゼロツー）ッ！」

肩に刺さったナイフを抜き取った長髪が、二階に向かって叫んだ。何かのコードだろうか。ともかく、これでギンが屋敷に舞い戻ったことは、敵に察知されてしまった。もはや、一刻の猶予もない。

「このバケモンが！」

仲間に状況を伝えた長髪が、日本語で叫んだ。無傷の片手で拳銃を構える。

「失礼な言い方！」

ギンは、長髪に飛びかかった。ナイフでつけた傷口に、容赦なく指を突っ込んで引き寄せる。長髪が、獣じみた悲鳴をあげた。腕をねじり上げ、

「歩け」

ギンは、殊更見せつけるように、先ほど奪った銃のセーフティを外し、長髪の後頭部に押し当てた。

「クソが！」

悪態をつきつつも、観念した様子で長髪が歩き出す。その背に完全に身を隠し、盾にする格好で、ギンは二階へ上がった。

同時に、牙香の部屋から大柄の五分刈り男が、銃を構えて飛び出

してくるのが見えた。

ギンは、長髪の背を思い切り蹴飛ばした。つんのめった長髪が、五分刈りの方に転がる。それで五分刈りの持つ銃の射線を潰したギンだったが、瞬時の判断で銃を諦めた五分刈りが、アメフトのタックルを思わせる動作でギンに突っ込んできた。

中腰で五分刈りに接近しようとしていたギンは、避けきれず、もろにタックルを鳩尾みそおちに食らって吹っ飛んだ。

「がはっ！」

体内にわずかに残った貴重な酸素が、苦悶の声とともに吐き出されてしまう。

仰向けに倒れたギンの真上に、無言で五分刈りがのし掛かってきた。一本の太さが葉巻ほどもある指が、ギンの首筋に食い込んでくる。首をねじ切るか、その前に窒息するか、どちらでも構わないというような凶悪さで、五分刈り男はギンの首を締め上げた。

歯を食いしばり、全力で身をよじるが、五分刈りの体はびくとも動かない。

更にそこへ、血まみれの腕をだらりと下げた長髪が、痛みと怒りとで歪みきった表情でギンに近づいてきた。片手で持った銃を、ギンの眉間に向ける。

「ぶっ殺してやる！」

引き金に、指がかかった。

自分の首を締め上げている腕を掴み、ギンは、内にある全てを振り絞るつもりで押した。

わずかに、ギンの背と腰が持ち上がる。そこに、勝機があった。

自分の体の下敷きになって自由を奪われていた尻尾が、稲妻の素早さで、銃を構える長髪の手首に巻き付いた。同時に、発砲音が屋敷の中に轟いた。

ギンの首に食い込む指から、唐突に力が抜けた。ギンに馬乗りになっていた五分刈りの体がゆっくりと傾き、どうと倒れる。五分刈りの側頭部に、赤黒い穴が開いていた。

ギンは、長髪が引き金を引く瞬間に、尻尾を巻き付けた手首を引っ張り、銃口の向きを変えたのだった。

続けざまに、寝転んだままの状態で、長髪の足を左手で思い切り払った。

「あ？」

何が起こったのか、まだ理解していない様子の長髪が、いとも簡単に尻餅をつく。

身をねじって右膝を振り上げた。長髪の鼻っ柱に、ギンの膝が突き刺さった。長髪が、自分が撃ってしまったスキンヘッドの体に、折り重なるようにして崩れた。

それを見届けて立ち上がると、自分の意志とは無関係に全身が小刻みに震えた。吐き気と頭痛は、もはや耐え難いレベルだ。

廊下に転がった拳銃を拾い上げ、壁に体を預けるようにして、ようやく冴香の部屋の前までたどり着いた。

細かい呼吸で、何とか息を整える。

意を決して扉を押し開けると同時に銃声が轟いた。続けて、三発。室内で待ち構えていた敵が、発砲したのだ。それを読んでいたギンは、床に身を投げ出すように転がった。頭のすぐ上を、鋭い熱風が吹き抜けていった。

ギンは、床にうつぶせのまま、両手で銃を構える。

そこでようやく、室内の様子が見て取れた。

冴香が普段使っている執務デスクの上に、日本人の男が腰掛けている。ギンに「タマネギ爆弾」を食らわせてくれた、張本人だった。

その男と向かい合う形で、床に冴香が座らされていた。

マダナイの姿を探すと、マダナイは、男に程近い場所である壺を抱えて立ち尽くしていた。そちらも無事なのを確認して、ギンの視線は冴香に戻った。

冴香は、左肩を押さえている。肩を押さえる白い指の隙間から、赤い筋が流れ落ちているのを見た瞬間、ギンの中で何かが爆発した。「冴香っ！」

ギンは叫んで、机の上の男に向けて、引き金を絞った。しかし、当たらない。

精密な射撃をするには、ギンの体は消耗しすぎていた。

反撃を避けるべく更に転がる。応射の銃声が出て、手元に衝撃が走った。ギンの手が跳ね、持っていた拳銃が、もぎ取られるように床に転がった。

「おやめなさい、島津！」

冴香の声がした。端正な顔を苦痛に歪ませながらも、凜として気丈な声は健在だった。

「島津……」

冴香の口にした名前を、ギンは口の中で転がした。

(そつだ、確かあいつは……)

男の顔には、見覚えがあった。冴香の父親が、まだこの屋敷にいた頃、ボディガードとして仕えていた男だ。再び、ギンの胸に後悔の念が浮かんだ。最初にそのことを思い出していれば……。

「まさか、そんな体の状態でここまでたどりつくとはな」

男、島津が言った。

「さすがにお嬢様お気に入りの化け猫だ。だが、その顔色を見る限りでは、そろそろ限界だろう。まとも息をすることもできない」

冴香が、ゆっくりと片膝立ちになったギンを振り返り、はっと息を呑むのがわかった。

ギン自身では気付いていないが、今のギンの顔色は、蒼白を通り越して青紫色になってしまっている。

「島津！ ギンに何をしたの！」

「ちょっとタマネギの汁が目にしみた、なんてことはよくある話でしょう。お嬢様」

それで、聡明な冴香にとっては十分な情報だったようだ。唇をわななかせた冴香が、怒りに満ちた瞳で島津を撃った。

「本当になあ。目えどころか、鼻の奥にまでタマネギの臭いが染みついちまって、気持ち悪いったらねえよ」

冴香が、口を開くより先に、ギンは言った。

「……ま、んなこたあどうでもいい。それよりも、だ。てめえ、オレが見てねえ所で冴香に怪我させるたあ、やってくれんじゃねえかよ。死にてえのか？」

「ギン、駄目！」

「いいから冴香は黙ってる。すぐに落とし前は付けさせてやる」

島津が、鼻で笑った。

「ボロボロのくせに威勢がいいじゃないか、小僧」

「小僧だあ？ オレの半分も生きてねえくせに、笑わせんじゃねえや」

強気に言い放ちつつ、ギンの目はマダナイを追った。

マダナイは、島津の近くに立っている。島津が、ギンに注意を向けている今、マダナイが動けば事態は好転するように思われた。

が、ギンの視線に気付いたマダナイは、強ばった表情で、小さく首を振った。ギンに向いていた銃口が、いつの間にか冴香の眉間に狙いを変えている。

「一応、人選には気を遣ったつもりだったよ。古ぼけてカビの臭いにまみれているとは言え、さすがに正規の訓練を積んでいるだけのことはある、と言っておこうか」

「野郎……」

「弾は、残り十八発入ってる。お前が下手に動けば、不本意ながらお嬢様を撃つのに一発。十七発あれば、今の弱ったお前ぐらいは楽に仕留められる」

島津が、勝ち誇って言った。

コンディションが万全ならば、文字通り一蹴してやるものを。ギンは、歯噛みして島津を睨み付けることしかできなかった。

「さて、最後に飼い主の顔も見られて満足だろう。……ボスの命令だ。悪く思うな」

「つまんねえなあ。三下のセリフじゃねえか」

「三下だからな」

挑発に乗ることもなく、島津が再び銃をギンに向け直した。ギンも身構える。黙ってやられるわけにはいかない。差し違えてでも、冴香を救うつもりだった。

「やめて！ あなたの狙いは、壺をあの手の下に持ち帰ることでしょう。だったら、無益なことはいしないで、さっさと壺を持って去りなさい」

「それは……」

島津が、首を振って言いかけた時だった。

「それはできない相談だわ」

部屋の外から、声がした。

驚いた島津だけでなく、ギンや冴香も声のした方向を見た。

部屋の入口に、ティアナが立っていた。

「貴様！」

瞬時に、島津の銃口がティアナへ向く。そのわずかな間隙を突き、飛びかかったギンの爪が島津の手首に突き刺さった。銃が落ちる。

島津が、ギンを振り払いながら肘を繰り出してきて、それを辛うじてかわしたギンは、倒れ際に島津の腰を後ろから蹴りつけた。

そこをチャンスと見て、ティアナが突進していった。

「くらえええっ！」

大きく体勢を崩した島津の顔面めがけて、必殺のトンファーが振り下ろされる。

が、島津もプロと自負するだけのことはある。インパクトの瞬間に、自らティアナに向かって突っ込み、衝撃を殺すと同時に、体格差を活かした体当たりでティアナをはじき飛ばす。ティアナの小さな体が、宙を舞った。

「うおおおっ！」

島津が、雄叫びを上げた。鮮血に濡れた手を、ツナギの懐に突っ込む。その手に握られていた物を見て、ギンは、島津に叩き付けるべくため込んでいた残る気力と体力の全てを冴香に向けた。

手榴弾。

「血迷いやがって！」

覆い被さるようにして冴香の体を抱きかかえたギンは、窓ガラスを突き破って、テラスに飛び出した。

「先生！ ティアナ！ 逃げろっ！」

叫んだ。あとはもう、出来ることは何も無かった。最後の力を振り絞ってテラスを乗り越えたギンは、冴香の体をきつく抱きしめたまま、庭に向かって落ちた。

爆発音。

耳をつんざく閃光と轟音とが、ギンの脳を容赦なく揺さぶる。それは、とうに限界を超えていたギンの意識を四散させるのに十分な衝撃だった。

が、真っ白になって薄れ行く意識の中でも、冴香の体温と鼓動を糧にするかのように、冴香を抱きしめるギンの力が緩められることはなかった。

「オレは、死ぬのか？」

「あなたが、憑^よいていた国家は、消滅したわ。あなたにかけた『国憑^よきの呪法』は、依代^{よりしろ}の消滅とともに効力を失う。……死ぬのは、嫌？」

「つまらねえ末練と、笑ってくれていいぜ」

「依代を、付け替えてあげる。そうすれば、死なずに済むわよ」

「何だつて？」

「私、こんな体になっちゃったけど、もう一回ぐらいなら儀式にも耐えられるわ。……実はもう、新しい依代から話は受けているの。」

あなたの活躍に、と言つて良いのかわからないけど、さる名家が興味を持っているのよ。これから、上も下もバラバラに解体されるこの国の中で、恐らく唯一、向こうが一切手出しできないぐらいの

「それで、あんたはどうなる？」

「死ぬ、でしょうね。……ちよつと、そんな顔しないの。私ね、あなたを逃がし損ねた後で、色々あつて、広島に帰つたのよ。この体もその時に、ね。でも、収穫もあつたわ。あなたの存在を、この世界に繋ぎ止め直す方法を、ある方に教わることができたの」

「誰だ？」

「秘密。そういう約束なの。それより、どうする？ もう少し生きてみる？ 新しい自分になつて、私たちがしでかしたことの行く末を見てみるのも、悪くないんじゃない？」

「代わりに、あんたが死ぬ」

「何もしなくても、すぐに死ぬわ。私も、長くてあと一年つてころなのよ。でも、私のその一年をあなたに託せば、それは、あなたの百年になる。私の命が、あなたの中に入って、あなたの目を通して、生まれ変わっていく世の中を見られると思えば、ずいぶんと割の良い取引だと思うんだけど」

「百年、か」

「百年、よ。長いわよ。あなた、その姿でもいい男だから、きつともてるわ。可愛い女の子と出会えて、幾つもの恋をできるかもね」
「そんなに幾つもの、いらねえよ」

「あら、無欲ね。意外だわ」

「あんたが死んで、何十年か経ったら、あんたもどっかの誰かの子供に生まれ変わるかもしれない。それまでの間、生きて待つてるっ
ても、悪くねえかもな」

「素敵ね、それ。その時は、強い子に生まれ変わっていたいわ。もう誰の指図も受けなくていい強さ。高貴で、凜として、自分が正しいと思つたことを貫ける子に……」

「できるだけ、近くに頼むぜ。もう、あちこち嗅ぎ回るのは、面倒
でかなわねえ」

「そうね。きつとそうするわ。……じゃあ、約束よ。生きて、生きて、生き抜いてね」

「ああ。生まれた町に戻って、のんびり待つてるさ。新しい自分とやらになつて」

「死なないでね。絶対に、死んでは駄目よ。いつか必ず、私があるに償う日が来るまで。それまでは……」

「……死んだら、許しませんわよ。もういいでしょう？ ギン。もう目を覚まさない。わたくしを、一人にしないで……」

「……そんなこと、しねえよ。約束、したじゃねえか」

自分の呟き声が耳に入ってきて、それがきつかけで、ギンの意識は急速に覚醒へと向かい始めた。白が黒に、黒が白に入れ替わる長いトンネルを抜け、ゆっくりと目を開けた。

「あれ？ オレ、何で……」

覚醒の瞬間、状況が飲み込めなかった。ただ、顎を撫でる白い指先の心地よさが、どこか遠いところから戻ってきたという確信に繋がった。それを、もっと確かな物にしたくて、ペろりとその指先を

なめた。

「ギン！」

瞬間、ぴくりと反応した真っ白な指が、体を持ち上げたかと思うと、そのまま暖かくて柔らかいものの中に、ギンはすっぽりと包み込まれた。

伝わってくるのは、温もりだけではなく、何か規則正しく刻まれる音。その音が、ギンの意識を更にはつきりとしたものに変え、ぼやけた記憶を繋ぎ直した。

「冴香……。無事だったんだな」

「ああ、良かった！ ええ、ええ。ギンのおかげで無事ですわ。：

…ですから」

「……ですから？」

「もう、そんな乱暴な喋り方をしなくても、いいんですわよ。島津は、どこかへ行行ってしまいましたわ」

言われて、ギンは顔を上げた。泣き笑いになった冴香の顔が、やけに近い。その時初めて、ギンは冴香の胸の中に抱きしめられているのだと気付いた。

「ご、ごめん。……さえちゃん」

「わたくしのこと、呼び捨てにしたことは、助けてくれたことでチヤラにして差し上げてもよかったですよ。……もう、苦しくはなくて？」

何度も何度も、ギンの背を撫でながら、冴香は言った。

また気付く。あの、耐え難いほどの息苦しさで頭痛、吐き気が、あらかた収まっていた。

「うん。だいぶ、いいみたい。……でも、今は別の意味で苦しい」

「そんな……。お医者様は、もう大丈夫だって」

「さえちゃんのおっぱい、やーらかいんだもん。幸せすぎて、苦し
い」

ギンの狭い額にぴたりとフィットするように、空手チョップが突き刺さった。

「ひどい」

抗議の声に耳を貸すことなく、冴香が、ギンの体を離した。コンマ一秒、無意識のうちに足が地面を向いて、ギンは音もなく着地した。三半規管も正常。ヒゲの感覚も元に戻っている。

と、

「何をじゃれているのであるか」

背後から、マダナイの声がして、ギンは振り返った。

開け放たれた障子の敷居に、黒猫姿のマダナイが前足を乗せていた。その隣に、ティアナまでもが立っているのを見て、ギンは目を丸くした。

「マダナイ先生……」

「さすがは、東京猫又四天王。丸一日眠っただけで、もう回復しているとは」

「丸一日？」

「うむ」

「あれからそんなに？ …… って言うか、ここどこ？」

「む？ まだ今ひとつシャッキリしていないであるかな。ここは、浅草の『和宝』であるよ。冴香君の屋敷は危ないであるからな、気を失った君を抱えて、こちらのティアナ君ともども、隠れ家に避難したというわけだ」

和宝は、江戸の末期から浅草に店を構える老舗の料亭である。大仰な造りでもなく、看板も出していない。まさにマダナイが言うところの「隠れ家」的な料亭で、限られた常連客のみを相手に商売をしている店であった。

改めてギンは、今いる室内を見渡した。広くはないが、しつとりと落ち着いた和室。何気なく配された調度品は、どれも古今の名匠の手になる一級品。何度か、冴香が政治家たちと会食する際に、護衛として訪れたことがある貴賓室だった。

「そっか。何か、手間かけちゃったみたいだね。先生にも、ちーちやんにも」

「その呼び方はやめてって言ったでしょう。それと、勘違いしない

でちょうだい。わたしは、あなたを助けたわけじゃないわ」

後ろ手に障子を閉めたティアナが、ややぎこちない所作で畳に腰を下ろした。その視線は、冴香に注がれている。最初に出会った時から変わらない、あの目だ。

「で、でも、結果的には、ちーちゃんのおかげでボクは助かったんだから、お礼は言わないと。……そうだ、二人は怪我してない？もの凄い爆発だったけど」

二人の間に、やけに冷えた空気が流れているのを察して、ギンは慌てて話題を変えた。

「島津が投げたのは、手榴弾ではなく、スタングレネードだったそうであるよ」

「すたんぐれねーど？」

「大音響と閃光で、敵の目と耳を一時的に潰す武器よ。あなた、銃もナイフもあれだけ使えて、そんなことも知らないの？」

横文字にはめっばう弱いギンが首を傾げるのを見て、ティアナが言った。

「あゝ。鉄砲は、昔とそう変わらないから使えたけど、最近の武器はね」

「……昔？」

「ああいや。それより、島津のおっさんは？」

「まんまと逃げおおせたようであるな。が、心配は無用。壺ならほれ、そこに」

マダナイが、顎をしゃくって示した先は、床の間だった。そこに壺が鎮座していた。

和室の床の間に、洋風の壺。取り合わせとしては妙だったが、何故だかしっくりと収まっているようにギンには見えた。

「それで、家の方はどうでしたか？」

冴香が、マダナイに訊ねた。

「騒然、の一語であるな。パトライトが十重^{とえはたえ}二十重。昨日の今日で、美術品強奪犯が、冴香君の屋敷に押し入って狼藉を働いたとあって

は、警視庁の体面も丸潰れであるなあ」

「米軍の裏ルートで忍び込んでくるような相手ですから、不問に付して差し上げたいところですが、表向きの責任は取っていただくこととなりますわね」

ギンを抱きしめて生還を喜んでくれた「さえちゃん」から、支配者の顔になった冴香が、言った。そこでギンは、再び冴香を見上げた。

「ボクもその……三人も……」

「それは、正当防衛ですわ。いえ、そもそも、そのような事実があったことを記録に残すような真似はさせませんわ。ギンが気に病んでいるのは、そんなことではないというのは、分かっているつもりですけれど」

そう言われると、ギンも何と答えていいものか分からなかった。

が、そんな冴香の言い様に、別の所から噛みつく声があがった。

「そうやって、自分の都合の良いように事実をねじ曲げるのが、綾織部のやり方？」

ティアナだった。

「何が仰りたいの？」

「そういう物の考え方で、壺を自分の物にされちゃたまらないっていうことよ」

「子供のくせに、中々弁が立ちますわね」

「馬鹿にしないで！ 大体、あなただって子供じゃない」

ティアナが、気色ばんだ。

「馬鹿になどしていませんわ。たとえ、物事の一面しか見ていないとしても、ある事実を的確に表現できる知性をお持ちなら、お話しやすいですし」

冴香が、切り返した。少なくとも、表向きは冷静に。

ギンは、ヒゲがぴりぴりと震えるのを感じた。恐らく、同じ感覚を共有したであろうマダナイと、無言で目を合わせる。

「壺の取り扱いについては、ギンの目が覚めるのを待って、あなた

からお話を聞いて判断しようと考えておりますわ。だから、ご無理を言つて残つていただきました」

「わたしの話はシンプルよ。壺を渡して。それだけ」

「その理由をお伺いしたいのですわ、ティアナ・アーレンスさん。米軍の指揮系統から独立した、NSA直属の特務工^{コマンドスクール}作員養成機関に身を置いていたあなたが、どうして剣持と行動を共にしていたのか。そして、今は追われる身となっているのかも含めて」

ティアナの顔に、わずかな動揺が走った。

「たった一日で……それもここを一步も動かさずによく調べられたわね」

「これもまた、綾織部ですわ。どうか、気を悪くなさらないで」

「だったら、その先も自分で調べたら？」

「あなたの口から直接聞くことに意味があると、わたくしは考えていますの」

そう言った冴香の目が、ほんの一瞬、ギンに向けられた。ティアナもまた、ギンを見る。

そして、言った。

「……勝手ね」

「わたしは、ママとの約束を果たしたいだけなのよ……」
そう言つて、ティアナが話し始めたのは、自らの生い立ちについてからであった。

ティアナの母親、カミラ・アーレンスは、NSA（アメリカ国家安全保障局）に籍を置く優秀な職員だった。ドイツ系移民の子孫であったカミラは、主に東欧を中心とした旧共産圏の国々を周り、現地の情報収集を行うことを主な任務としていた。

当時の東欧情勢は、ユーゴスラビア解体に端を発した民族紛争の真っ最中であり、そこで彼女は、紛争の中で暗躍する一人のテロリストを内偵する任務を与えられる。

名前も年齢も不明。世界中の紛争地域に出没し、思想も信条も、金すらも関係なく、自分の思うがままに対立する陣営の一方に肩入れしては、激烈な戦果を上げる謎の男……。

戦場に死をまき散らすことだけを目的としているとしか思えぬ狂人として、半ば伝説となつている人物が、当時のユーゴ紛争の影で暗躍していることが分かったのだ。

カミラは、すぐにそのテロリストを追った。だが、内偵の半ばでカミラの正体は相手方に発覚し、逆に彼女が拉致されるという事態が起きてしまった。

紛争に介入していたNATO（北大西洋条約機構）を通じて、秘密裏に救出部隊が組織され、拉致から数ヶ月後に奇跡的な生還を遂げたカミラだったが、救出されたその姿を見て、誰もが絶句するこゝとになった。

カミラは、明らかに妊娠していたのである。

一度だけであったが、カミラは、拘束中に強姦されたことを、自身の口から告げた。このとき、体は既に安定期に入っており、もはや墮胎は不可能な状況であった。

カミラの上司や同僚は、生まれてくる子供はすぐに養子に出すよう、再三にわたって提案した。しかし、その提案をカミラは拒否し、そればかりか、拉致される以前に入手しており、未報告のままになっていた数々の情報を交渉材料として、生まれた子供は外の世界に出さず、組織の中で育てることを認めるように迫ったのである。

カミラが掴んでいる情報の重要性は、当局にとって無視できるものではなかった。幾らかのすったもんだはあったが、最終的にカミラの意向が認められることとなり、やがて出産の時を迎えた。

「そうして生まれたのが、わたしよ」

淡々と、己の出生にまつわる秘密をティアナは語った。

重い、あまりにも重い空気が場を支配する中で、ティアナの話は静かに続く。その言葉は、どこか異様な熱気を帯びていて、聞く者が耳を塞ぐことを許さぬ迫力があつた。

「周りの反対を押し切って現役復帰したママは、それまで以上の熱心さで世界中を飛び回った。そして、わたしが四歳になると、ママは私のことを鍛え始めたわ」

最初は、遊びのようなものだった。

「ママの体によじ登って、後ろからママの首に抱きつけたらティアナの勝ちよ」

「射的ゲームをしましょう。向こうの的に全部当てられたら、キャンディーをあげるわ」

「今日は、外国語でしか喋っちゃいけない日。英語を使ったら、晩ご飯にティアナの嫌いなグリーンピースをいっぱい入れちゃうんだから」

外の世界を知らず、同年代の友達が出来ようはずもないティアナにとつて、カミラの与えてくれることが、世界の全てであった。ママに褒めてもらえること。ママが喜んでくれることは、ティアナの存在意義そのものと言つて良かった。

数年が経ち、訓練は徐々に本格的な形へと移行していく。よじ登り遊びは、実戦的な近接格闘術に。射的ゲームで使う銃は、玩具か

ら実践に。外国語遊びは、語学研修に……。

そして迎えた十歳の誕生日。ティアナは、NSAが主催する、工員養成課程に特例として参加が認められた。無論、人道的観点ひとつ取ってみても公にできるはずはなく、このことは完全な極秘事項として扱われた。

その一年後、新たな転機が訪れる。

「一年ぶりに会ったママは、NSAに追われる身になっていたわ。ママは、任務のかたわら、密かにある物の行方を探っていたの。その事が発覚して、拘束されそうになったとき、ママはNSAを脱け、危険を冒してわたしに会いに来たのよ」

ティアナの語尾が、ほんのわずかに震えた。

「まさか、あなたのお母様が追っていた物と言うのは……」

鋭敏に話の流れを読み取った冴香が、口を挟んだ。

「その通りよ。ママは、わたしを産んで現役に復帰した時からずっと、上司にも同僚にも全てを隠して、失われたヒエロニユムの壺の行方を追っていたのよ」

話が、繋がってきた。

ここからが、核心。ギンとマダナイも、冴香にならうように身を乗り出した。

「ママは、わたしを連れて逃げた。その時わたしに、ヒエロニユムの壺について教えてくれた。そして、言ったの。もしもママの身に何かあったら、あなたがママの代わりに壺を探し出して。そして、あなたの手で壺をこの世から消し去って……と」

「待って、待って！ ボクちよつと混乱してきた。何でそこでいきなり、壺が出てくるわけ？ 大体、ちーちゃんママは、何で壺のこと知ってたの？ 何で調べてたの？」

「猫のくせにせっかちなね。何の義理もないのにこうして話してあげてるんだから、最後まで、黙って聞いてなさいよ」

潤みかけた声を憎まれ口で整え直し、ティアナは続ける。ギンがせつついた答えを、あっさりと口にした。

「簡単な話よ。ママを妊娠させたテロリスト……つまり、わたしの父親が、ヒエロニウムスの壺をこの世に生み出した張本人、エーファール計画の立案者であり、実行責任者だった、オットー・フォン・ヒエロニウムスだからよ。ママは、ヒエロニウムスに拉致監禁されているときに、本人からその話を聞いたの」

本当に、あっさりと。

何の抑揚も感情の動きも見せず、昨日の夕飯に食べた食材を淡々と列挙しているのかというぐらいの物言いであった。

「い、いくら何でもそんなことはあり得ませんわ」

今度は、冴香がティアナの言葉を遮った。その冴香の声の方が、上ずっている。

「ヒエロニウムス大佐は、計画遂行当時、三十歳。今生きていたとしても、百歳近い老人ですわ。そんな人間が……」

「あなたがどう思うかなんて、関係ないわよ。わたしは、ママの言葉を信じてるの。だって、ママの死に際の言葉だったんだもの」

感情が動いていないのではない。むしろ、わずかなきっかけで決壊しそうになるところを、強靱な精神力で押さえ込んでいるのだ。

「ママは、ヒエロニウムス自身もまた、戦後の混乱で行方不明になった壺を探していることを知ったわ。壺を取り戻して何をしようとしているのかも。どうして奴が、ママにそんな話をしたのかは分からない。でもママは、自分を辱めた男に、自分の尊厳を賭けて、戦いを挑んでいたのよ。誰にも頼らず、たった一人で。でも、ママの望みは叶わなかった。ママは、わたしを逃がすために追手と戦い、死んだわ」

今も目を閉じれば、その時の全てを、ティアナは思い出すことができた。

母についていくことを選んだティアナの身を守るため、致命傷を負いながらも追手を殲滅したカミラが、血に濡れた手をティアナの胸に押し当てながら言った言葉。

「お願い、ティアナ。ママの代わりに、壺を……どんな手段を使っ

てでも、必ず壺をこの世から消し去るの。それが、あなたの運命を変え、自由にしてくれる唯一の方法……」

急速に温もりを失っていく、カミラの体。何をどうしようとも、それを止めることの出来ない無力な自分の姿。

「ママは、あなたに伝えられることの全てを伝えたわ。たとえママがいなくなっても、あなた一人で、呪われた運命に打ち勝てるように。それが、ママの……」

カミラは、いつかこうなることを予見していたのかもしれない。遺品の中に、カミラがNSAを退職した後、身柄を引き受けることが記された契約書があったのだ。

その契約相手こそ、剣持がオーナーを務めるPMSCSだったのである。

米軍上層部の一部派閥と結託し、米軍内に強い影響力を持っていた剣持の会社であれば、いかなNSAでも簡単に手出しはできない。カミラの死後、契約書を頼りに、ティアナは剣持の下を訪れた。NSAトップクラスの工員が直々に育て上げたティアナの実力は、剣持の眼鏡に充分適うものであった。

「……ティアナさんは、剣持の下でお母様と同様、密かに壺の行方を追うつもりでしたのね。そしてある時、その行方を掴んだ」

「十七億円分の美術品目録の中に壺の名前を発見した時、わたしはママが引き寄せてくれた奇跡だと思った。でも……」

「その時に剣持もまた、壺の本当の価値を知ってしまったのですわね。あの男も、お爺さまに勘当されたとは言え、一時は綾織部家の全てを掌握したことがある身です。あなたがどう隠蔽を試みようと無駄だったと思いますわ」

冴香が、嘆息した。

「これで分かったでしょう？ わたしの話は、お終いよ。さあ、そこにある壺を渡して」

ティアナは、立ち上がった。後はもう目的を果たすのみと、床の間に歩いて行く。

正座していた冴香の肩に手をかけ、無遠慮に脇へ押しつけようとした。その手首を、冴香が、思いがけない機敏さで掴んだ。

「まだ肝心なことを伺っていません。ティアナさんの望みは、壺をこの世から消し去ることのようですが、その方法についてはご存じなのですか？ それが分からない限りは……」

「あなたには、関係ない！ あなたも、そこのお節介な猫も、黙ってこの件から手を引けばいいのよ！ これは、わたしとママの……家族の問題なのよ！」

「わたくしと、わたくしの……便宜的にもそう呼びたくはありませんけれど、わたくしの父親との問題でもあります。無関係では、いられませんわ」

「このっ！」

こんな下らない押し問答に、これ以上付き合ってはられない。今すぐ、この場の全員を叩きのめしてでも、壺を手に入れる。

決意と共に、拳を固めたところで、

「待った！ 待った！」

またしても、と言うべきだろうか。資材置き場でもそうだったように、いつの間にか伸びていた柔らかい尻尾が、ティアナの手首に巻き付いていた。振り切ろうとしても、ティアナの腕は、万力に挟まれたかのように動かない。

「ほら、さえちゃんもだよ」

また、ギンが言うのが聞こえた。同時に、冴香に掴まれていた方の手首に自由が戻る。完全に自分を拘束するつもりではなかったのかと、意外な思いで首をめぐらせると、ギンが伸ばしたもう一方の尾の先は、主であるはずの冴香の手首に巻き付いていた。

「二人とも、落ち着こうよ。ケンカしたって、始まらないじゃん」
冴香とティアナの間に割って入ったギンが、相変わらずの口調で言った。

「おかめはちめく岡目八目って、昔の人は言いました。だよ。何か口挟みにくい空気だったから、黙って見てたけどさー。さえちゃんも、ちーちゃん

も、頭に血い上りすぎ」

二人の顔を、ギンが交互に見上げた。

最初は、ティアナ。

「ボク、ちーちゃんの気持ち、よく分かるよ。できれば、協力してあげたいと思ってる。でも、話せば分かることを、わざわざグーで解決しようっていうのは、良くないよ」

「余計なお世話よ。わたしは、誰の手を借りるつもりもないわ！」
ティアナは、間髪入れずに言った。

ギンからの返答は、無い。黙って、今度は冴香を見た。

「さえちゃんが、イライラするのも分かるよ。でも、ここはぐつと堪えて冷静に、ね？」

「わたくしは、冷静ですわ。ギンこそ、話をスムーズに進めたいのでしたら、邪魔をしないでほしいですわ！」

冴香の返答も、強烈だった。

それを聞いたギンの口から、「はあくっ」という、長く太いため息が漏れた。それが、ゆっくりと室内に染み渡り、広がっていった後、

「じゃかあしいっ！ まだグダグダ抜かすんなら、二人まとめて隅田川に叩っ込むぞ！」

唐突に別の人格に切り替わったかのように、ギンの口調が、がらりと変わった。さすがにティアナも、この急変ぶりには驚くしかなかった。それは、冴香も同様……いや、それ以上の衝撃だったのだろうか、口も目も、まん丸に開いたまま、ぽかんとしている。

一発の怒声で主導権を握ったギンが、また二人を見る。ただし、その目つきの鋭さは、さっきまでの比ではない。

「まず、冴香。何が、わたくしは冷静です、だ。どうにかして、てめえの手であの親父に一発くれてやろうつてえ腹の内隠すために、冷静なふりしてるだけじゃねえか」

「ギ、ギン？ あなた……」

「うっせえ、ちよつと黙ってる！ ……それにティアナ！ おめえ

は、母ちゃんから何教わったんだ？ 母ちゃん、こう言ってたはずだぜ。『目的を果たす為なら、利用できるものは何でも利用しろ』ってな。周りの状況も見えてねえで、一人で突っ走るなんざ、プロの仕事じゃねえだろうがよ。違うか？」

何か見えない力で、ドンと胸を突かれたような気がした。その衝撃で、ティアナの目も、丸く見開かれた。

それは、ギンの言葉が、正鵠を射ていたからだ。

「周りを見て、利用できるものは、全て利用しろ」

訓練中、ほとんど口癖のようにカミラがそう言っていたのを、ティアナは思い出した。

「冴香、オレもあのオツサンは何かしなきゃなんねえと思ってる。だったら、冴香の知らねえオツサンの情報をティアナから聞くのが、まず最初のことだろうが？」

「そ、それは……」

「ティアナ、壺を取り返すのに綾織部の力は使えるぜ？ 壺をぶっ壊すにしろ、海の底にでも沈めるにしろ、とにかくまずは、残りの壺を取り返すのが先だろうよ」

「……くっ」

「な？ 二人とも、頭あ良いんだからよお、ちっと考えりやあすぐ分かるこつたるうがよ。オレみてえなのに、いちいち出しゃばらせんじゃねえや」

一息にそれだけまくし立てたところで、ようやくギンの舌が回転を止めた。

ギン自身も、相当興奮していたのか、まるでオーバーヒートしたエンジンから冷却液が噴き出すかのように、また太い息を吐く。

パン、という乾いた拍手の音が響いたのは、その時だった。

「その辺にしておくであるよ。岡目八目、まさにしかり。熱弁ご苦労であるが、ギン君も少しクールダウンが必要であるかな？」

最初にティアナが、自らの出生について話し始めてからこつち、一度も発言していなかったマダナイが、初めて口を開いた。

いつ姿を変えたのか、また和服をまとったヒト型になっている。
「誰にでも、譲れぬ思いや考えがある。そこに衝突が生まれ、理よりも感情が優先するのも、むべなるかな。吾輩だって同じであるよなれば、互いの感情の熱が収まるまで、しばし時をおいてはどうであるかな？」

言いながら、マダナイの手が入口の障子にかかり、すうと引いた。廊下から、冷たい空気が室内に流れ込んできた。それに伴って、部屋の中に充満していた、マダナイが言うところの「感情の熱」が、押し出されていく。

「ギン君、ティアナ君を連れて少し町へ出てきたまえ。見たところ、ティアナ君は服も綻びて、髪も顔も埃まみれ。お湯にでも入ってリフレッシュして、服も新調するといい」

「だから、そんな時間は……」

何を言っているのかこの女は。髪だの服だの、どうでも良いことである。また余計なことに時間を取られるのは、ご免だった。百歩譲って、ギンの言うとおりに話し合う余地があるのなら、さっさと済ませてしまえばいい。

それは、冴香とて同じ事だろう。こんなタイミングでというのも妙なものだが、ある意味で、初めての連帯感に似た気持ちを冴香に對して抱いたティアナは、同意を期待して言ったのだが、

「よし、行こう。そうしよう。すぐ行こう！」

まだ手首に巻き付いたままだったギンの尻尾が、ティアナを引っ張った。

「ちよつと！」

抗議の声も虚しく、ティアナは、ギンに引きずられるようにして部屋を出て行かざるを得なかった。まったく、細くて柔らかいくせに、このネコマタの尻尾の力たるや、常軌を逸している。

「じゅっくり〜、であるよ。冴香君のことは、吾輩が見ているゆえ」
マダナイが、言った。

「人の話聞きなさいよ！」

さつきまで、「話すことなどもう無い」と啖呵を切ったことも忘れたティアナの声が、板張りの廊下をわんわんと跳ね返っていった。

「さつきは、ごめんね。急に大声出しちゃってさ。びっくりした？」
ポロポロになったパーカーのポケットに手をつ込み、肩をいからせて歩くティアナを小走りに追いながら、ギンは言った。

「ねーってばー」

追いついたところで、以前冴香にそうしたように、背中からティアナの肩へと飛び移る。

「ちよつと、やめてよ」

「いいじゃん。欧米式スキンシップ」

あからさまに嫌そうな顔をしたティアナが、無理矢理ギンを肩から下ろそうとしたが、

「ねえ、見て見てー。お母さん、あの子肩に猫乗っけてる。猫、猫だよ」

「あら本当。仲良しのねー」

行き交う人々から投げかけられる視線に気付いて、今まさに尻尾をふん捕まえようとしていた手を止めた。

「降りなさいよ。目立つじゃない」

小声で、ティアナが言った。

肩口に猫を乗せた少女。しかも、外国人である。人目を引く要素が倍がけになっていく状況で、一人と一匹に目を向け、立ち止まる通行人の姿は、増える一方だった。中には、無遠慮にケータイやらデジカメラやらを向ける者までいる。

「ちーちゃん、工作人員なのにつつも目立ってるね」

前足でヒゲをしごきながら、ギンはにやりと笑って言った。

「憎ったらしい猫ね、本当に」

仕方なしと言った体で、ギンを肩に乗せたままでティアナが再び歩き始める。

そのまま、五十メートルばかり進んだところで、

「交差点、左ねー」

カーナビの音声案内よろしく、ギンは言った。

またしても返事はなく、ティアナが黙って交差点を折れたところで、左手にこの浅草では、比較的大きな建物が鎮座していた。この地域の文化芸能の中心地、浅草公会堂だ。

その更に先の丁字路で東西に延びているのが、雷門から浅草寺へと続く仲見世通りと並ぶ浅草商店街の顔、伝法院でんぽういん通りである。

二百メートルほど続く通りの左右には、衣料品店や雑貨を扱う店が並び、土産物屋中心の仲見世通りとは、やや趣が異なる。また、どの店も外装に江戸の町並み風の意匠を取り入れているというのが、通り全体の特徴であった。

「面白いでしょ？ 何年か前に、新しい電車の駅が出来たから、お客さんが増えるのを狙って通り全体を模様替えしちゃったんだって」
ギンが、そう得意げに解説する側を、楽しげに談笑する観光客を乗せた人力車が、颯爽と駆け抜けていった。

江戸の町並みに、明治大正の人力車というあたり、節操が無いと言われてしまえばそれまでであるが、ここからちよっと歩いた先は、今度は昭和レトロの息吹漂う浅草六区であった。様々な時代と、それぞれの風俗に対して、懐深く同居を許すところが、浅草という町の魅力であると、ギンは思っている。

と、ティアナが、すぐ横を人力車が通り抜けたのをきっかけにしたように、道の両脇にせわしなく目をやり始めた。

幕府からのお触れが記された木札風にこしらえられた案内看板。火消しの使う物見櫓。浮世絵の技法で彩られた商店のシャッター。観光客受けを狙った、いかにもテンプレートな「江戸情緒」であっても、だからこそ、かもしれないが、彼女にとっては、どれも新鮮で興味深い代物に見えているのだろう。

「さ、まずは服かな。でも、この辺りで服買つと、芸者さん用の着物とか、演芸場で使う変な衣装ばかりだから、ROXロックス行こう。この通り、まっすぐね」

「どこでもいいわよ。ちゃんと着られる物があれば」

面倒くさそうに言ったティアナが、人混みをかわして伝法院通りを抜けると、ギンが言った浅草ROXの建物が見えてくる。

浅草六区にあるので、ROX。これも何ともはやのセンスではあるが、これでも浅草で唯一と言っても過言ではない、若者向けの流行商品を取り扱う複合商業施設なのである。

「じゃ、ボクここで待つてるから。好きなの買って来なよ」

「すぐに戻るわ」

そう言っつて、店内に消えたティアナが戻ってきたのは、十五分と経たないうちであった。

何度か冴香の荷物持ちに駆り出された経験から、女性の買い物の長さについては覚悟をしていたギンであったが、ちよつと横になつて一休みという間すら無かつた。

しかし、改めてティアナの全身を上から下まで眺めてみれば、確かに服が真新しい物に変わっている。ただし、全体的なコーディネートは以前のままだつた。

上着が、フード付きのパーカーになり、ハーフパンツの色がベージュからモスグリーンに。黒地のTシャツは変わらず。ただ、胸元に大きく「忍」の一字が入り、その下にアルファベットで「NIJJA」と小さく記されている。

「そ、そのTシャツ……いい、いいね」

女の子の服は、褒めるべし。いつだつたか、冴香から受けた教えを思い出したギンは、何とか一言だけ絞り出した。

「色々、漢字の入ったシャツがあつたけど、一番クールなのは、やつぱりこれね」

着られれば何でもいいと言っていた割に、実に満足そうな表情でティアナが頷く。

「……ま、いいや。そつだ、ちゃんとパンツとブラジャーも買った？ 次は、お待ちかねのお風呂だからね」

再び薄い肩の上に飛び乗ると、ティアナの胸元を見下ろす格好

になった。とりあえず、忍者から話題を変えておくのが無難ぐらいの、軽い気持ちでギンは言った。

そこで、

(あれ?)

不意に訪れる違和感。すぐに気付く。冴香の肩から同じように見下ろしたときは、豊かな丸みの双丘に遮られて、地面が見えないのだが、ティアナの場合は……。

「ブラジャーは、まだいらんか」

ほんのジョークのつもりだったが、それが、地雷だった。

突如、毒蛇の凶暴さでティアナの手が伸びてきて、ギンの顔を頭蓋骨ごと掴んだ。いわゆる、ベアクローという奴である。

「今度また下らないこと言ったら、このまま頭握りつぶすわよ」

「ふあ、ふあい……」

開ききらない口で、もごもごと返事をすると、押さえる力が緩んだ。これは一旦退くのが戦の常道と、ギンは自分から地面に降り立った。

「ま、まあその、悲観することないって。さえちゃんも、十六歳になったあたりから本領発揮、って感じだったしさ」

トレッキングシューズの靴底が、背中めがけて降ってきた。

横っ飛びにかわすと、「チツ」と舌打ちする音が聞こえた。

その後、おろし金で背中を削り取られるかのような、殺気に満ちた視線に耐えて、先導すること数分。ROXから南へ、ふれあい通りという小さな商店街を経て、ちよいちよいと細い生活道路を通り抜けた先に、一見すると雑居ビルのようにも見える銭湯がある。

「ここが、蛇骨湯じゃこつゆ。こんな東京のど真ん中にあるけど、ちゃんとした温泉なんだよ」

振り向いて案内するのに、幾らかの勇気を使わねばならなかったが、

「温泉? ……ジャパニーズ・スパね」

そこでギンが見たのは、ほんの少し浮かれたように、金髪の毛先

を指でなぞるティアナの姿だった。ティアナの髪は、マダナイの別宅で別れた時よりも更にべた付き、ほつれ、艶を失っている。

やはり、こういうところは女の子なのだなどと、ギンは思った。口では何と言おうとも、いざ風呂を目の前にすれば、今の自分の有様は気になるものらしい。

周囲に他の人目が無いのを確認してから、ギンは自動ドアの入口をくぐった。

建物自体は古いものだったが、中は昨年行った大々的な改装工事によって、現代的な内装にリニューアルされている。

「こつち」

ティアナを招き入れ、フロントへ。

「あら、本当に来たよ」

驚いたような女性の声が出たのは、その時だった。

ブースの中からこちらを見ているお婆ちゃんが、一人。

「うにゃー」

そのお婆ちゃんに挨拶するように、ギンは一声鳴いた。

「あらギンちゃんいらっしやい。……じゃあそつちの子が、お嬢様の言つてたお客さんかい？ ほら、じゃこつち来て。はいこれ、タオルね」

「どういうこと……ですか？」

状況が飲み込めていない様子で、ティアナがお婆ちゃんに尋ねた。「あなた、綾織部のお嬢様のお客さんでしょう？ 電話があったのよう。ちよつと訳ありで汚れちゃった子が、ギンと一緒にいきますからって」

お婆ちゃんが、ギンを見た。

「外人さんで子供、それで訳ありだなんて言うから、一人で来られるか心配してただけ、ちゃ〜んとギンちゃんが案内してくれたんだねー。お利口さんだねー」

「にゃにゃー」

「はいはい。さーおいで。お嬢ちゃんもね。冴香お嬢様が、お嬢ち

やんが上がるまでは貸し切りにしてくれって言うから待ってたんだよ」

言うなり、しゃっきりとした足取りでフロントから出てきたお婆ちゃんが、下足箱の上から、油性のマジックでぶつとく「ギンちゃん用」と書かれたタライを下ろした。

「さー、こつちこつち」

お婆ちゃんが、満面の笑みで奥の脱衣場へギンたちを手招きした。絵に描いたような下町の世話焼き婆ちゃんの押し出しには、さしものティアナも完全に気を吞まれてしまったようで、何も言わずにおとなしく手招きに応じた。

「ここで服脱いでね。……日本語は、平気？」

「え、ええ」

「良かったわ。あたしゃ、英語なんてからつきしだから」

ティアナが頷くと、お婆ちゃんが、今度は脱衣場の隅からゴムホースを取り出した。

「今ね、ギンちゃんのお風呂作ってくるから。この子、変な子でねー。猫のくせに温泉大好きなのよ。だから、専用の風呂桶につて、かつぱ橋で買って来たの。本当はいけないんだけど、お役所には内緒にしといてねー」

浴室に続く引き戸を開けたお婆ちゃんが、洗い場のカランにホースをねじ込んで、タライに湯を張る。

「家はね、洗い場のお湯も全部温泉なのよ。あ、このホースのお湯、上がるときに止めてもらえる？ お風呂出たら、冷たい物あげるから声かけてね。それじゃ、ごゆつくり」

台風の勢いで、喋るだけ喋ったお婆ちゃんが去ってから、

「ちーちゃん、日本式のお風呂の入り方分かる？」

ギンは、小声で尋ねた。

「馬鹿にしないで」

言って、ティアナが服を脱ぎ始める。胸の大きさをギンに指摘されて怒った割に、一応雄であるギンの視線など気にしていない、堂

々たる脱ぎっぷりであった。

それではつちりと、自分の予想が正しかったことが確認できてしまったギンであったが、

（仏の顔も三度って、昔の人は言ってるし）

さすがに、そこを突っ込むのは自重して、先に浴室へ入っていく。お婆ちゃんが、ホースとタライで作ってくれた、特製の掛け流し風呂に身を横たえるように浸かる。

すぐに、一糸まとわぬ姿になったティアナが、入ってきた。湯船の縁に手を付いて、洗面器に湯をすくおうとするところで、ぴたりと動きが止まる。

「汚れてるわよ、このお湯。真っ茶色じゃない」

「違うよ。元々そういう色なの。大昔の植物が溶け出してるんだよ」
タライの中から伸ばした尻尾で、ティアナの手から洗面器を取ったギンは、たっぷりとすくった茶褐色の湯を頭からティアナにかけてやった。

何度かかけ湯をしてやるうち、ほんのりと桜色に温まってきたティアナの肢体のあちこちに、白く浮かび上がってくるものがあつた。傷跡だ。

母親との訓練の日々で付いた物、実践の中で付けられた物、様々なのだらう。その一つひとつから、ティアナがこの年で背負わされ、味わわされてきた労苦の一端が、垣間見えるようだった。

「ねえ、ちーちゃん」

「だから、その呼び方はやめて」

「ちーちゃんはさ、壺を何とかしたら、その後はどうするつもりなの？」

「話、聞きなさいよ。……先のことなんか何も考えてないわ。少なくとも、もうNSAには戻れないわね」

「ざぶ、と湯をかき分ける音がした。」

「じゃあそ……」

「待って」

言いかけて、身を起こしたギンと、ティアナの目が合った。

「さつきから、わたしばかりに話をさせて、不公平だわ。わたしにも、質問させなさい」

「な、何？」

「……あなた一体、何者なの？」

「前もそんなこと聞かれたね」

「そして、まともな答えは得られなかった。普段はそうしてとぼけているかと思えば、綾織部の屋敷で剣持と向かい合ってる時といい、わたしとサエカの間に割って入ってきた時といい、急に人が変わったようになるし」

「そ、そうかな」

「まだあるわ。ネコマタ、という存在が並の人間を超えた身体能力を持つていることは、理由はともかく、事実として理解したわ。でも、剣持の部下を倒した手並みや、手慣れた銃器の扱いは、それだけじゃ説明がつかない。あれは、訓練を受けたプロの動きよ」

「見たたの？ あの時？ ……だったら、最初から手伝ってくれても良かったのに」

ざぶ。また、湯の音。

ティアナが、ぐつとギンに近づいてきていた。

「もう一度聞いわ。あなた、何者なの？ なぜ、本性を隠しているの？」

「本性って……。別に、猫かぶってるわけじゃないんだけど。あ、今のはシャレね」

ティアナの手で、浴槽から押し出された湯が、頭から降ってきた。「ぶべ」

「そうやってはぐらかすなら、いいわ。わたしは、綾織部冴香のように、無理矢理嫌がる人間の口をこじあけるような趣味はないし。任務でない限りは、ね」

急所を押さえた言い方だった。

「それじゃ、さえちゃんだけが悪者になっちゃう。……分かったよ、

せつかく裸のお付き合いをしてもあるし、ちーちゃんには、教えてあげちゃおうかな」

これが、目的か。ギンは悟った。

ここまでティアナが、素直に町歩きに付き合ってきたのは、この話をギンから聞き出す機会をうかがっていたからだということに。

「お察しの通り。実はボクも昔、ちーちゃんのママみたいな仕事をしていたことがあるんだ」

「やっぱり……」

「ボク、三毛猫って種類なんだけど、三毛猫の雄が自然に生まれる確率って、三万分の一しかないんだって。でも、ボクの場合は、もつとレアケースで、父ちゃんも三毛猫だったの。そうするともう、その確率ってば、凄いことになっちゃうのよ」

「それと、あなたが工作員だったことと何の関係が？」

「そこはもつと、驚こうよ。……ま、そういう珍しくい生まれに、目を付けられちゃったんだよね。実はボク、自然に猫又になったわけじゃないんだ」

「どうということ？」

「昔、この国がアメリカやイギリスと戦争してた時、陸軍の連中がボクのことをさらって行ったんだ。戦争に負けそうになってる国ってさ、考えること一緒みたいだね」

ギンが、故郷の浅草から連れ去られた先は、帝国陸軍が管轄する、とある研究所だった。

ただし、その研究所に集められていた「研究員」は、物理学者でも生化学者でもなく、太古の昔からこの国の闇に息づいてきた人間たちであった。

陰陽道や真言密教などの比較的メジャーなものから、名も無き土着の呪術まで、およそ近代的な軍隊内の組織とは縁遠い所に生きてきた、呪術者や妖術師たちが一堂に会し、上層部の命令によって、そうした呪術・妖術の軍事利用を研究していたのである。

「笑っちゃうよね。軍の偉い人たちが、本気も本気の大真面目で、

一発逆転が狙える呪術的新兵器つてやつを開発していたんだつてさ」
あえてティアナの顔を見ないように話していたギンだったが、見
ずともその表情は手に取るように分かった。

「でも、大体は妖術師なんて言ってもまがい物だったりでさ。上手
くいきつこないわけ。そんな中でも、妖怪を人工的に作り出して、
人間に代わる戦力にするのはどうか？　なんて無茶苦茶言つてた部
署があつたんだ。で、そこから更にたちが悪いところなんだけど、
そーいう一番おかしい事言い出すところに、本物が配属されちゃっ
てたんだねー」

本物。

ギンがそう評した人物は、陰陽道の源流に近いある呪法を代々継
承する、中国地方出身の女呪術師だった。彼女は、その希少さ故に
圧倒的な霊格を備えた一匹の猫を素体として、陰陽師が用いる式神
を応用し、史上初の「人造猫又」をこの世に作り出そうと考えた。

女は、技術中尉の身分を与えられ、計画を実行に移すこととなっ
た。

「で、ボクに儀式を施したつてわけなんだけど、全て上手く行つた
ところで、急に自分のしでかしたことが恐ろしくなつたつて言つて
た」

「それで……どうなつたの？」

「どうにもならなかつた。その人は、ボクのことを逃がそうとして
くれたんだけど、当のボクはその時、自分が何者なのかさえよく分
かつていない状態だったし。そこは責めないでね。昨日まで、ちょ
っと変わった生まれだけど普通の猫だったのが、突然人の言葉は話
せるようになるわ、変身できるわで、ワケ分かんないのは当たり前
でしょ？」

どこか他人事のように、ギンは迷懷した。実際、その瞬間に限つ
て言えば、他人事に等しい出来事なのだから仕方がない。

女の企てた計画は、呆気なく頓挫し、ギンは己のアイデンティテ
ィーも定まらぬままに、陸軍の諜報員として訓練を受けさせられる

ことになった。

「自慢じゃないけど、優秀だったんだよ、ボク。だから、色んなことさせられた。人も、いっぱい殺した。……ちーちゃんは、誰かを殺したことはある？」

「無いわ。……まだ」

ティアナが答えた。声の中に、幾らかの恥じらいのような感情が見え隠れしているのが、ギンには悲しかった。人を殺していないことを、恥じるような世界で生かされてきたティアナの境遇に、心の底から同情を覚える。

「殺さないで済むなら、争わないで済むなら、その方がいいよ。絶対。だって、ボク一人があれこれしたところで、結局、何も変わらなかったんだもん」

ギンの言葉が、タイル張りの浴室内に湿った残響を残して消えた。ギンの言うとおり、日本は戦争に敗れた。ギンの、個人として残した戦果なり成果なりは、特筆すべきものなの、ずば抜けているだのという次元を超越したものだだったが、それでも大勢に与えた影響は、微々たるものだったのである。

そんな、虚しさに満ちた数年こそが、ギンに人間の考え方を教え、高度な自己を形成する土壌となった。こうして、自身の体験を言葉にして他者に伝える、本物の知性を与えた。運命という見えざる存在の皮肉屋ぶりときたら、何と度を超していることであろうか。

なればこそと、終戦を迎え、新たな時代が始まるその時に、ギンは決意したのだった。

あの夏の日、変わり果てた姿でギンの前に再び姿を現した彼女の文字通り命を賭けた申し出を受け入れ、再び生まれ変わったつもりで生きることを。

こうして、畜生としての生を超えて、生きる意味と理由を求める存在に自分を変えた運命が、その遙かな先で何を自分に見せるのかを、知るために。

(ああ、そうか。あの時だったなあ……)

そこまで話し、考えたとき、ギンは思い出していた。

最初にティアナと壺を奪い合った時に、ティアナが見せた、何かを訴えかけるような表情。あれは、自分を逃がそうとした彼女が、連行される間際に見せた表情に良く似ていた。

「……さっき言った、ちーちゃんの気持ちがよく分かるっていうの、信じてくれるよね?」

ギンは、言った。

「それでも……」

ティアナが、言った。

「綾織部冴香と、わたしの考えが最後まで相容れなかったなら、ギンはどうするの?」

重い、問いかけだった。

「そんなことには、ならないと思うよ。さえちゃん、責任感が強いから、中途半端に投げ出せないだけなんだ。大丈夫、ちゃんと話し合えば、二人とも仲良くなれるよ」

「だと良いけど」

長い話になっていた。少し体が冷えたのか、ティアナが再び湯船に身を沈めて言った。

やや行儀悪く、口元まで湯の中に浸かったティアナに向かって、ギンは微笑みかけた。

「さっさとこの事件にケリつけてさ、今度はもっとゆっくり浅草観光しようよ。まだ、浅草寺にもお参りしてないでしょ。花やしきにだって行ってないし」

「花やしきって、何よ?」

「遊園地。デイズニールランドには、負けるけどね。あ、隅田川の花火大会も見なきや」

「狭いくせに、忙しい町ね」

「そこが良いんだってば。三社祭は……来年のお楽しみ!」

「考えておくわ」

一度頭の先まで湯に潜り、ざばっと勢いよく立ち上がりながら、

ティアナが言った。

わずかに、ほんのわずかに、その顔に笑みらしきものを浮かべて。「そうと決まれば、そろそろ行きましょ。頭と体、洗っちゃうわ。ギンも、体を乾かしておいてよね」

そうと決まれば、という言葉が何にかかっているのか。冴香と話し合うことなのか、それとも、一緒に観光するということが。後者であればいい、とギンは思った。

さっぱりとして蛇骨湯を出たところで、ギンはまた、黙ってティアナの肩に飛び乗った。ティアナは、何も言わなかった。一度だけ、ギンの鼻筋をなぞるように指で撫で、蛇骨湯を後にした。

踵を返すその瞬間に、輝きを取り戻したプラチナブロードから、ほのかなシャンプールの匂いが漂ってきて、うっとりとしてギンが鼻をひくつかせた時だった。

「兄貴！ ギンの兄貴！」

人の通れない細道からギンを呼ぶ声が聞こえ、小さな影が転がり出てくるのが見えた。

「竹虎？」

影の正体は、ギンのために情報を集めてくれた、あの乾物屋の竹虎であった。

「どうしたの？ そんな血相変えて」

「た、大変でさあ兄貴！ ー大事なんで！」

よほど急いで走ってきたのか、息を切らせた竹虎が、そこで一度唾を飲み込んでギンを見上げた。その困り果てた表情に、ギンの身が引き締まった。

「お、お嬢様が……、お嬢様が……」

「落ち着いてよ竹虎。さえちゃんが、どうしたの？」

「ゆ、誘拐されやした！」

衝撃的な一言が胸に突き刺さり、ギンの目が見開かれた。

「誘拐！？ 誰に！？」

問い返す。

「それが……その……。マ、マダナイ先生になんて
二度目の衝撃。

まるで想像していなかった竹虎の返答に、ギンは、ティアナの肩
から転げ落ちた。

ACT 4 猫は二人を縛る真実を知る

料亭「和宝」に、荒らされたり、争ったような痕跡は一切無かった。

何しろ、ティアナがさりげなく従業員に、冴香とマダナイの行方を訊ねてみても、誰も二人がいなくなったことに気付いていなかったぐらいなのだ。

手がかりを求めて店の周囲を見て回ったギンが、これといった収穫もなく貴賓室に戻って障子を開けると、厳しい顔つきになったティアナと目があった。

「あのさ、ちーちゃん」

「分かってるわよ。ギンが、わたしをはめたとは思っていないわ」
苛立たしげに、何度も掌に拳を打ち付け、ティアナが言った。気を抜けば、すぐにでも沸点に達しそうな神経を、すんでのところで押さえつけているような仕草だった。

ひとしきりそうやって気を落ち着けた後で、パーカーのポケットから一枚の紙片を取りだし、ギンに見せた。

「先生の字だ」

「そんなのは、わたしにだって想像つくわ。何が書いてあるのか教えなさい」

紙片には、ボールペンで何か書き付けられていた。かなりの達筆である。

さしものティアナでも、漢字仮名交じりな上に、大きく崩されているその文字列を読み解くことは、適わなかったようだ。

「どうしても譲れぬ理由あって、壺と冴香君の身柄を一時拝借させていただく……」

例によって尻尾で紙片を受け取ったギンは、それを目の前にぶら下げて音読した。

「このような形での報告、誠に申し訳ない。愚拳と糾弾されるは重

々承知なれど、時として理に勝る感情に身を委ねざるを得ない時があること、特にティアナ君には理解されたい。事が済みし折には、吾輩の一身を差し出してその責めを負う所存なり。尚、冴香君の身の安全についても、吾輩の力及ぶ限りに最善を尽くし、無事にギン君の元に送り返すことを約するものである」

書き置きの内容は、以上だった。

「どこにあったの？」

紙片をちよいと掲げるようにして、ギンは訊ねた。

「そのの、灰皿の下に敷いてあったわ」

「灰皿……」

「吸い殻が、二本あるわ」

さすがにティアナは、察しが良かった。ギンは、頷く。

「タバコ二本も吸うぐらいの余裕がある状態で書いたってことか」

「明らかに、計画的な行動だわ」

「理由は？」

「直接、聞くしかないでしょう」

ティアナの返答は、実に端的だった。

「問題は、マダナイたちの行方を捜す方法だわ」

「捜す方法は、向こうから来るよ。……と言っか、今来た」

ギンは、書き置きから目を上げた。それとまったく同じタイミングで、ペこりと頭を下げた竹虎が、ティアナを気にするそぶりを見せつつ、再び姿を現した。

「大丈夫、この子は味方だよ」

ギンは、自信を持って断言した。納得した様子で頷いた竹虎が、話し始める。

「カラスどもに頼んで上野まで行ってもらいやした。三吉親分の方からも、手下を回してくださるそうです。丁度、多摩の方からクロツキの旦那もお見えになってまして、旦那のお弟子さんたちにもご協力いただけることに」

「クロツキさんが？」

クロヅキというのは、新宿の西、立川の辺りから山梨との県境に至るまでの地域に住む猫たちの顔役を務める黒猫で、やはり猫又である。

幕末の頃に猫又に変じたという日本猫又界の重鎮であり、ヒトの姿で天然理心流という剣術の奥義を修めた武人でもあった。

「そりゃ心強い」

「ええ。ですんで、とにかく一時間ばかりいただけやせんか？ 必ず、マダナイ先生とお嬢様の居場所を掴んでお知らせいたしやす」
「任せる」

「へい」

短く応じた竹虎が、音もなく姿を消した。

「内緒話は、無しよ」

それを見計らったタイミングで、ティアナが声をかけてくる。

「何か分かったの？」

「これから、分かるの。上野、浅草一帯の猫たち……千匹ぐらいかな。先生と、さえちゃんの行方を追ってもらってる」

「千匹……ですって？」

「猫の手も借りたいって、昔の人は言いました。……必ず連絡が入るから、ご飯でも食べて待ってようよ」

ギンに言われ、ティアナが冴香の名前を出して頼むと、すぐに食事が運ばれてきた。

手早く食べられてスタミナをつく物をとということ、用意されたのは、天然鰻のひつまぶしである。ギンには、猫用に味付けされた鶏雑炊。無論、ねぎ抜き。

「その土瓶の中に入ってるダシをかけて、お茶漬けにすると、サラサラ食べられるよ」

器にしる、料理そのものにしる、本物の高級品だけが持つ気品に圧倒されて完全に固まってしまったティアナのために、ギンは、巧みに尻尾を操って茶漬けを作ってた。

「あ、ありがと……」

「ご飯って気分じゃないのは分かるけど、食べとかなないと大事な所で力出ないからね」

言いつつ、自分も古伊万里の鉢に盛られた雑炊に顔を突っ込む。だが、余裕を見せてそう言ったものの、ギン自身も、高級料亭の逸品を堪能するようなゆとりは、まるで無かった。

せわしなく口を動かしながらも、脳もまた同様に動き続けている。真っ先に考えたのは、冴香の安否だ。マダナイの書き置きには、身の安全について言及されていた。マダナイの真意、目的はともかく、今はそれを信じるより他ない。

思考が、シフトする。マダナイについて。

どのような理由があったとしても、それをギンにも冴香にもひた隠しにして、完全に虚を突く形で行動に出た辺り、尋常ならざる決意を臭わせるものがあつた。

あるいは、見落としているだけで、兆候はあつたのだろうか。

ギンは、この二日におけるマダナイの言動を一つひとつ思い出してみた。

まず、マダナイの別宅へ行ったところから。ティアナと話をしようとしたところに現れたマダナイは、無礼な態度を取ったティアナを驚かそうと、妖気をみなぎらせて迫った。

(妖気……)

ふと、引っかかった。あの段階で、素性の知れない人間の子供一人を驚かせるのに、そんなことをするものだろうか？ 小説家として人間社会に溶け込み、生計を立てるほどの人生(猫生?)巧者(こうしゃ)が少女の癩癩ひとつをさばくのに、何ほどの手間があるう……。

そんな疑念が、ギンのシナプスをちりちりと炙り始めると同時に針の穴ほどの何かが、ぷつぷつと壁の向こう側に突き抜けた気がした。

そう、妖気だ。マダナイが、長い年月を経て身に付けた、妖怪・猫又としての力。

それは、狂気に溺れた人間によって、ほとんどでっち上げのよう

に覚醒させられたギンと比して、より純粹で、強力なものである。たとえ荒事に慣れていなかろうとも、乱入してきた傭兵の一人や二人、彼らに人質を取る時間を与える前に排除できるほどに。

事実、ギンとて島津の「タマネギ爆弾」さえ食らわなければ、余裕で冴香を救出できたという自信がある。

開けた針の穴に指をあてがい、突っ込んだ。押し広げた穴を覗き込めば、マダナイと剣持一派が、どこかで通じていたのではないかという可能性が見えてくる。

「……お湯にでも入ってリフレッシュして、服も新調するといい」あの提案が、ティアナを壺から遠ざける方便だったとしたら？

ギンの性格も、壺に対して抱える思いも、ティアナの胸に揺れる感情も、全て見抜いた上で、冴香一人が相手ならば、どうとでもあしらえる確信の下での。そして……。

「ギン」

急に呼ばれ、ギンは、真実へ至る道筋に立ち塞がっている壁の穴にかけた指を離した。

「何？ どしたん？」

まだ半分、向こうの暗闇を覗き込んだままの目で問うと、一瞬、訝しげな顔になったティアナが、顎をしゃくった。きれいに空になったティアナの膳を目の端に捉えて動かした視線の先に、竹虎がかしこまって座っている。

「兄貴、場所が割れやした」

緊張した面差しで報告する竹虎に向き合ったところで、ギンの意識は、はつきりはこちら側へ戻ってきた。

「早いじゃん。どこ？」

「駒形です」

簡潔な問いに、簡潔な答え。

駒形は、浅草の中心部から見て南にある、オフィス街として発展している地域だった。あのガンプラで有名なバンダイ本社があるのも、駒形である。

「二ヶ月前に倒産した旅行代理店が入っていたビルに、タクシーで乗り付けた先生とお嬢さんが入って行くのを、屋形船屋の飼猫が見ていました」

「てことは、川沿いだね」

「あの辺は、ここら以上に入り組んでます。人目を避けるのもわけないことで」

ギンは頷き、ティアナを振り返った。

ティアナは、既に立ち上がって身支度を整えていた。猫の言葉は分からずとも、気配で全ては察したようで、トンファーを止めたベルトを、腰へ回しているところだった。

「もう行く？」

「当たり前でしょ」

竹虎から詳しい場所を聞き、ギンとティアナは、料亭「和宝」を飛び出していった。

遅い昼食を挟んで、時間はほぼ夕刻。ふとギンが空を見上げると、空一面をどんよりとした雲が覆っていた。一雨あるかもしれないと、ギンは思った。

「どうかお気を付けて」

見送る竹虎の声を背に受け、一路南へ。全ての因縁の発端となった雷門を駆け抜け、隅田川を左手に、走る、走る。

十分ほどで、目的地のビルに到着した。ビルは六階建て。各階の窓から張り出している看板用のボードは、どれも白紙の状態だった。一見すると、ビル周辺に見張りのような人影は無い。

互いに無言で頷きあったギンとティアナは、ビルの正面と裏手へ別れた。

「見張りが居ない」

手分けしてビルの周囲を調べてから合流し、やはり外には誰もいないことを確かめたところで、ギンは言った。

「畏かもしれないわ」

「だからって、ここまで来て帰るわけにもいかないでしょ」

「当たり前よ」

ジャキツ、という硬質な音がして、ティアナの両腕にトンファーが装備された。

「ギンは、その姿のままでもいいの？」

「できれば、穩便に済ませたいからね」

装備したトンファーをくるりと回し、ティアナが、「ふん」と鼻を鳴らした。

「甘い考えかな？」

「別に……。行くわよ」

ティアナが、先に立ってビルに乗り込んでいった。ギンが後に続く。

まずは、一階を検索。やはり、誰もいない。エレベーターは使わずに、内階段で二階、三階と駆け上がった。いった。

しかし、進めど進めど無人の階ばかりで、気付けば最上階の六階に到着していた。

「奇襲は、無意味ね。堂々と行きましょう」
「だね」

ここまでの様子で、ギンは半ば確信に近い思いを抱いていた。

マダナイは、この最上階でギンたちを待ち構えている。トラップだ、待ち伏せだといった下手な小細工を弄するつもりは、最初から無いのだということに。ティアナもまた、同じ考えを持っているに違いなかった。

「いきなりそれ振り回して殴りかかるとか、無しだからね」
「状況によるわ」

六階は、それまでの階と違い、フロア全体が一つの大きな部屋という構造になっていた。

階段を上りきったところに、大きく左右に開け放たれた鉄製の扉があり、奥にガランとして何も無い空間が広がっている。敵も味方も、互いに身を隠す場所は無いということだ。

ギンは、迷わずに扉をくぐると、
「さえちゃん！ 先生！」

わざと大声を張り上げた。果たして、
「ギン！」

名前を呼んで応ずる、冴香の声が聞こえた。
無事だった。無事で、いてくれた。

絶対に大丈夫と信じていても、頭の片隅にこびりついて消えなかった「最悪の事態」の光景が、霧が晴れるように消えていき、ギンは思わず安堵のため息を漏らして、天井を仰いでいた。ゆっくり、声のした方へ顔を向ける。

扉の前からは見えなかったフロア左手の奥、大きなはめ殺しの窓を背にする形で、埃を被ったオフィスチェアに座らされた冴香が、

後ろ手にロープで拘束されていた。

その傍らには、壺を両腕で抱えたマダナイが、感情を消した表情で立っている。

そして、冴香を挟んでマダナイの反対側に立つ二つの人影。

一人は、綾織部邸でギンを苦しめた島津。やはり、まんまと逃げおおせていたようだ。

もう一人は、上等な仕立てのスーツをスマートに着こなした男。

「久しぶりだな、ギン」

「おっさん……」

剣持斉一。

冴香が二年前に綾織部家の当主となる以前、わずかな期間ではあったが、綾織部の全てを手中にしていた男。その後、冴香の祖父、綾織部興斉によって放逐され、その名を綾織部家歴代の当主名鑑から永久に抹消されることとなった男。

何より、冴香にとつての、実の父親に当たる男であった。

「元気そうじゃないか。私が、綾織部を捨て、家がつぶれかけた時は、力を失って今にも死にそうだったのが」

「追い出された、の間違いでしょ。……ほんと、あの時はどーも。さえちゃんが綾織部家を立て直してくれなかったら、危なかったよ。そんな大恩人のさえちゃんを、乱暴に縛り付けてくれちゃって、どういつつもりなわけ？」

「こうでもしないと、娘は、私の話を聞いてくれんのでな」

激しい音がした。自由を奪われた冴香が、もがくように椅子を揺らしている。

「何度でも言いますけれど、わたくしはもう、あなたの娘などではありませんわ！」

純然たる憎悪の情念だけが出させることの出来る声で、冴香が言った。言葉の一音一音に、震えが来るほどの呪詛が込められている。そう、ギンには聞こえた。

だが、剣持は、そんな呪詛など意に介さぬと言わんばかりに、

「まあ、ご覧の通りだね」

悠然と受け流して、言う。

「さえちゃんが怒るのも、もっともだとボクは思うよ。おっさんが、さえちゃんのお母さんにしたことを考えればさ……」

その態度は、ギンを鼻白ませるのに十分な冷淡さであった。ヒゲを上下させ、下からすくい上げるような目つきで剣持を見上げて言うこと、

「今その話を蒸し返しても始まんよ。娘も、ますます感情的になるだけだ。……それより、もう一人のゲストが、そろそろしびれを切らしてしまいそうなので、こちらの用件を先に片付けるとしよう」
右手を挙げてギンを制し、にべもなく会話の流れを断ち切った剣持が、ギンの背後に目を向けて言った。

「そうしてもらいたいわね」

答えたのは、ギンに遅れてフロアに足を踏み入れてきたティアナである。

背後から、ギンの体を足で押しつけるようにして進み出てきた。

「理由なんか聞かないわ。だからお願い、マダナイ。壺を渡して」

ティアナの言葉に釣られるように、ギンもマダナイを見た。

相変わらず、一切感情の起伏を見せぬままに、マダナイは、無言で首を振るだけだった。

「ひとつ、教えておこつ」

代わりに、再び剣持が口を開いた。

「島津、あれを」

「はっ」

剣持に命じられた島津が、フロアの片隅に置かれていた、大きな段ボール箱を剣持の前に運んできた。剣持が、箱の中身を取りだし、床に並べていく。並べられた物を見て、ギンは目を丸くした。

「オットー・フォン・ヒエロニウム大佐が遂行しようとしていたイーファー計画において作られた人造靈魂……ホムンクルスは、全十二体というのは、既に知っているかな」

剣持の言葉と共に床に並んだのは、十一個の壺。本体は皆、同じデザインで、栓の部分だけ形が違っている。それぞれ、ローマ数字の??を象った栓。そのうちの?番の壺は、マダナイが持ったままだ。

「見たまえ」

並べた壺の栓の一つに、剣持が無造作に手をかけた。

「おいよせ、おっさん!」

ギンの叫びが、フロアに響く。しかし、剣持の手は止まらず、次々に壺の栓を外していくのだった。

「落ち着きたまえよ、ギン。良く見るんだ」

床に並んだ十一個全ての栓を開け終わった剣持が、壺を指さして言った。

「こうして壺の封印を解いても、この十一個の中からホムンクルスは姿を現さない。……空っぽなんだよ、この中は」

「にやつ!?!」

「元々、計画が万全ではなかったのか。それとも、戦後半世紀以上が経過したせいで中身がいつの間にか散逸してしまったか。今となつては本当の理由は分からないが、十二体のホムンクルスの内、実に十一体は失われているというわけだ。今、彼女が持っている八番目の壺の中にいるものが、最後に残った一体なのだよ」

どこかおかしそうな様子で剣持が言い、拾い上げた壺の一つを指で弾いて見せた。逆さに振って底を何度も叩くが、澄んだ陶器の音がフロアの空気を震わせるばかりで、何ら変化は起きなかった。

「これではとても、商売にはならない。抑止力としての核がなぜ有効なのかと言えば、お互いにミサイルの槍先を相手に向け合っているからだ。それと同じ事だよ」

商売、という部分を強調し、剣持は自嘲気味に笑った。

予想外のこと、ギンもティアナも呆気にとられてしまい、ただ剣持の演説を聴いているしかできない。

「対立するどちらか一方の陣営のみを利するというやり方は、武器

商人としては三流のやり方だ。この意味、分かるだろう？」

「相変わらず、品のない発想ですこと……」

ただ一人、冴香だけが、奥歯を軋ませて吐き捨てた。それすら、柳に風と受け流し、

「そこで私は、たった一つ残されたホムンクルスを人道的な形で立てようと考えた。戦争を食い物にしていることへの、小さな罪滅ぼしのつもりでね」

持ち上げた壺を床に戻し、剣持は朗々と歌うように言った。

「全つ然、本気に聞こえないよ」

舞台役者の振る舞いで語り続ける剣持に、ギンは不審の目を向ける。

「まあそう言うな。それで、百年もの間、報われることのない願いを胸に秘め、虚しさの海に漂っていた一匹の迷い猫が救われる」

迷い猫。

ギン、ティアナ、冴香……三対六個の瞳が、同時にマダナイを見た。

「許せ、ティアナ君。だが、こうすることで壺が悪用される心配は無くなる。君を縛る母上の遺言という鎖を断ち切ることになるよ、吾輩は……信じているであるよ」

そのどれとも目を合わさず、マダナイが言った。ティアナに向けてという体裁を取ってはいたが、実際には、その言葉は自分の行動に対して向けられていることは、誰の耳にも明らかであった。

「本当に構わぬのであるな？ 剣持殿」

「望むようにしたまえ。私は、娘の前で真意を示せば、それでいい。これで君を、かりそめの名で呼ぶ者はいなくなるだろう。ただし……」

「分かっている。分かっているのであるよ。それでも、吾輩はもう一度、先生に……」

マダナイの手が、たった一つ封じられたままになっている壺の栓を掴んだ。

と、その瞬間、

「やめろ！ 壺に触るな！」

全身から吹き上がる熱風を巻いて、ティアナがマダナイに飛びかかった。

一瞬で最大の長さまで伸ばしたトンファーを真横に構え、マダナイの首を刈り落とさんばかりの一撃を繰り出す。

が、その一撃が届くよりも先に、着物の腰帯然として巻き付いていた尻尾の先端が、ティアナの体に巻き付き、締め上げた。

「あうっ！」

ティアナの表情が、苦悶に歪む。

「先生！ 何やってくれてんのさ！ ちーちゃんを離して！」

今度は、ギンが動いた。身動きを封じられてもがくティアナを救おうと、巻き付いた尻尾の中段に飛びつくが、もう一本の尻尾が鞭のようにしなうってギンを打ち据えた。

猫の姿のままだったことも手伝って、ギンの体は勢いよく吹き飛ばされる。何とか空中で身を捻って着地するも、ギンは、信じられないものを見る面持ちでマダナイに向き直ることになった。

「マジかよ先生……」

ギンの目の前で、二股に分かれて蠢いていた尻尾が、更に枝分かれして数を増やしていく。二股が三股に。三股が四股に。

枝分かれした尾のそれぞれが、大蛇が鎌首をもたげるのにも似た動きで持ち上がり、ギンを威嚇する。その四尾を操るマダナイが全身から放つ妖気は、半端なものではなかった。

「いかなギン君と言えども、今、吾輩の邪魔をするならば、容赦はしないであるよ」

黄金色に輝く虹彩の中、上下の先端を鋭角に細らせた瞳が、ギンを射る。

「正気、なんだよね」

対するギンも、まっすぐにマダナイの射かける視線を瞳で受け止めると、ベタ足で床を捉えていた四肢の踵を持ち上げて、臨戦態勢

を取る。

「いけません、ギン！ マダナイ先生も、おやめなさい！」

互いに妖力を奮い立たせた猫又同士、激突必至の光景に、たまらず冴香が声を上げた。

「好きにさせてやりたまえ、冴香。彼女は、百年もの間、この時を待ち続けていたのだ」

椅子ごと立ち上がるうとした冴香の肩を、剣持が押さえつける。

「その手を退けなさい！ 汚らしい！」

「相変わらず、気の強い子だ。だが、今お前は事象の中心には立っていないのだよ」

剣持が、腕に力を込めるのが、横目にも分かった。が、それ以上何か危害を加えるようにも見えなかったので、ギンは視線をマダナイに戻した。

マダナイの指が、ゆっくりと壺の栓を抜く。

陶器の擦れ合う微かな音と共に栓が外れた。その途端に、隅田川に落とした提灯から抜け出てきた、あの「ヒトダマ」……ホムンクルスと呼ばれた人造靈魂が、壺の口から抜け出してくる。

姿を現したホムンクルスに向かって、マダナイが何事かを呟いた。その声は小さく、何と言ったかはわからなかったが、その声に反応したホムンクルスが、マダナイの頭上をぐるりと旋回するように飛び始める。かと思うと、頭のとっぺんから一直線に、彼女の体の中へと入って行ってしまった。

「あっ！」

という、驚きの叫びは、誰のものだっただろうか。ギンも、ただ呆然と成り行きを見守ることしかできなかった。

動こうにも、動けない。何をして良いのかが、分からない。この先、何が起こるのかまったく予期しようのない状況で、変化を待つしかなかった。それは、前後左右にそそり立つ壁が、じりじりと自分を押しつぶそうと迫ってくるのを見るような、不快な圧迫感に満ちた時間であった。

と、待たざるを得なかったその「変化」は、唐突に訪れた。

マダナイの体内に消えたホムンクルスが、今度はマダナイの胸から飛び出すようにして、再び姿を現したのである。

「だめっ！ これ以上は、ダメなの！ やめてえっ！」

ティアナの、悲痛な叫びが響いたのは、その時だった。

ギンは、びくりと身を震わせてティアナの方を見た。

マダナイの尾に捕えられたティアナが、何とかして戒めを振りほどこうと、がむしやらにもがいていた。その瞳には、それまでついでぞ見せたことのない、大粒の涙が光っている。

「うあああつ！ 離せっ！ 離せええっ！」

髪を振り乱し、ティアナは更にもがく。瞳に溜まった涙が、幾つもの雫となって、辺りにまき散らされた。

その光る雫を目にした瞬間、ギンは直感した。

ティアナは、知っている。この後何が起こるのかを、知っている。しかもそれは、ティアナにとって耐え難い出来事なのだ。

泣きわめくティアナの目の前で、「変化」は更にその度合いを増していく。

マダナイの体内を通って再び現れたホムンクルスが、その姿を変え始めている様子が、ギンの目に映った。

見えざる手が、粘土をこねているような、そんな光景だった。

驚くべきことに、ホムンクルスはヒトの姿を模そうとしていた。

「ヒトダマ」と表した不定形な姿が、男のものと思しき胴体に変化していく。そこから腕、首、脚が伸びる。最後に、頭と顔。

「ああ……。先生、先生……」

徐々に目鼻立ちのはっきりしてきた顔は、やはり男。それも、中年の男性のものだった。

その顔を見たマダナイが、恍惚とした表情を浮かべ、呼びかけるように言った。

マダナイの瞳にも、涙が光っている。ただしそれは、ティアナのものとは違い、歓喜の涙であった。

「吾輩がこの姿に变更后、先生が亡くなられて百と二年。もはや……もはや今生でまみえることは、けっしてかなわぬはずでしたのに……」

ホームクルスが模した男。その膝元にすがるように、マダナイの体がくずおれた。

どこかで、どこかで見たことのある男だった。

神経質そうな細い瞳。真っ直ぐに通った鼻筋。その下に蓄えられた豊かな髭。薄い唇。

絶対に、一度は見たことのある顔なのだ。

「文豪、当世に蘇り、か。流布している写真や、紙幣に描かれた肖像よりも少し若いな」

軽く驚きつつ、感心したような、剣持の声がした。

(文豪……。紙幣……)

ギンは、剣持が口にしたキーワードを胸の中で反芻した。刹那、すべてが繋がった。

「な、何てことですよ。まさかこのようなことが……。でも、あの姿はまさしく……」

同時に、驚愕に充ち満ちた冴香の声がした。

そう、あの男、見たことがあると思うのも道理である。あれは、まさしく……。

「やめろ！ やめろ！ やめろおおっ！」

と、確信に至ろうとしたギンの思考を、ティアナの絶叫が切り裂いた。

その叫びに、一番早く反応したのは、意外なことにマダナイであった。が、すぐにその理由にギンは気付いた。

ティアナが、力づくで絡みついた尾を引きはがしつつあったのだ。猫又の尻尾が持つ膂力じりょりきは、ギンの言い様ならば「お相撲さんと腕相撲しても負けない」ほどのものである。それを、いかに特殊な訓練を積んできたと言っても、ティアナの小さな体から出せる力のみで振りほどくことなど、到底不可能なはずだった。

しかし、現実にはティアナは鬼の形相でそれを成し遂げようとしていた。

「それは、わたしのものなの！ わたしが、使うの！ ママを、ママを取り戻すの！」

ティアナの右腕が、まず戒めを逃れた。そして、胴に巻き付く尾をがっちりと掴む。

「お前なんかに！ お前なんかに！ お前なんかに！」

わずかに緩みが生じた隙間から、次いで左腕が抜け出す。

「渡してたまるかっ！ わたしが、わたしがママを！」

喉が裂けようと、構わない。全身の血管が切れようと、構わない。……いや。

もはや、魂が千切れ飛ばうとも、構わない。そんな叫びだった。

「ママを返してええええっ！」

流れる涙の筋を、赤く染めて、ティアナが咆哮した。

「行きなさい、ティアナ」

消え入りそうな声だった。

冷たい雨が、頬を打ち続けている。

お願い。やんで。雨よ、やんで。

少しずつ温もりを失っていく体に、ティアナは覆い被さった。たとえほんのわずかでも、この冷酷な雨に母の体温が奪われないように。

「ママ……ママ……」

「ごめんね。だけど、こうするしかなかったの」

「いや、嫌よママ。お願い、一緒に来てよ。わたし、わたし！」

「ティアナは、強い子よね？ 大丈夫、あなたら、一人でもきつとやり遂げられるわ」

血の気を失った手が、胸を押してきた。それは、拒絶ではない。動けずにいる自分に、前に進む力を分け与えようとしてくれているのだ。だが、分かっている……。

「ママを置いてなんかいけない。わたし、ママがいなかったら」

「大丈夫よ、ママの心はいつも、ティアナと一緒にいるから」

胸を押していた手が、急に力を失って左右に流れた。ぬかるんだ地面に、ぼちやりと音を立てて落ちる。まるで、残された全てを託し終えたかのように。

「ママ！」

「教えたこと……守って。……ママの……。ティア……。あなたを……。産め……。一緒……。嬉しかった……」

「ママ！ ママあっ！」

どんなに呼びかけても、もう答えてはくれなかった。光を失った瞳は、自分の顔を見つめ返してはくれなかった。

泣いた。母の骸に突っ伏して、泣いた。

「お願い、ママ。行かないで。わたしを……」

(待つて、先生。吾輩、まだ……)
とさり。

スコップですくわれた土が、体にかけられるのが分かった。

だが、体を動かすことも、声を出すことも出来なかった。

「結局、名前をつけてやるのができなかったな」

どこか物憂げで、少し疲れた声でした。いつもの、先生の声だった。

「約束、していたのにな。お前はいつでも、空気のように私たちの側にいたものだから、勘違いしてしまったのだ。許せよ」

先生が何を仰っているのか、一語一区違わずに、ようやく理解出来るようになったのに。これから、先生が海外で目にし、学んでこられたことを教えてもらおうと思っていたのに。

先生が書かれたご本をうんと読んで、先生のお友達ともお話がしたかったのに。先生に、英語というものを教わってみたかったのに。先生。先生は、勘違いをなさっています。今この体は、そうやって望んだことの全てを叶えられるようにするために、生まれ変わろうとしている最中なのです。死んだように見えても、死んではいないのです。ただ、時を止めて眠っているだけなのです。

そう伝えられないもどかしさで、胸が張り裂けそうになる。何という業。何という皮肉。

(ああ、神様。何なら、仏様でも結構です。分かりました。ご無理は申しません。大それた望みの数々は、捨てることも厭いといませぬ。だから、だからせめて……)

ほんの少しだけで良いから、この姿のまま先生とお話ができる口を、わずかな時間で良いから、前倒しで渡してくださいませまいか？ 先生は、大変に頭のよろしいお方です。驚きながらもきつと、吾輩の言うことを信じて待つていてくださるはずなんです。

今の望みはただ、先生のことを心からお慕いしていることを伝え

て、それから……。

（吾輩に、綺麗な響きの名前を……。当代で言葉の粋を極められた先生のお口から、名前をお聞かせいただけ約束を……）

とさり。

とさり。

土が、被せられる。最後に、短くお経の文句が唱えられたのが聞こえ、やがて足音が遠ざかっていく。

（ああ、待ってください先生。お願いですからその足音も聞こえなくなつた。

（お願い、先生。行かないで。吾輩を……）

わたしを……。

吾輩を……。

自由を取り戻したティアナが、感情の箍たがが完全に外れたまま、突進していった。

「ちーちゃん！」

ギンが呼ぶ声など、まったく耳に入っていない様子だった。何もかもをかなぐり捨ててティアナが走って行く先には、もうあとわずかですべて完全にヒトの姿を取り終えようとしているホムンクルスがいる。「お前じゃない！ ママなのっ！ わたしのママなのっ！」

ティアナが、横から飛びかかるようにしてホムンクルスに組み付いた。出来上がったばかりの首が、何事かといわんばかりにティアナの方へ向く。

と、口ひげを蓄えたその顔が、ぐにやりと歪んだ。しばらく、また粘土をこね直すように蠢き続けたその顔が、今度は美しい外国人の女性に変化する。

「ママ！」

異様極まる光景であった。しかし、ティアナの顔には歓喜が爆発している。だが、それも束の間のことだった。

「先生に触れるなッ！」

発せられたマダナイの声に、ギンは全身の被毛を逆立たせた。マダナイの黄金の瞳には、この世のものとは思えぬ光が満ち充ちている。

もはや、マダナイからも箍が外れていた。全身から解放された妖気の渦が、大蛇の鎌首と化した四本の尾に乗り移って、ティアナに襲いかかる。

「きゃああつ！」

滅多打ちにされたティアナの体が、木の葉のように宙を舞った。

「ギン！」

部屋を貫いた冴香の声に定められた意志を察し、ギンは跳躍した。

即座にヒト型へと変じ、ティアナの体が床に叩き付けられる前に抱き留めた。

「ちーちゃん、しっかり」

ティアナの顔を覗き込んだギンは、そこで絶句した。今の今まで、激情ほとばしる赤に染まっていたティアナの顔色が、土気色に変わってしまった。

ギンは、Tシャツの上からティアナの薄い胸に手を押し当てた。心臓が脈打つ感触が手に伝わってきて、ほっと息を吐く。

が、それとは別に、何か得体の知れない違和感がギンを包み込んだ。

猫又の直感で、ティアナの身に生じた異変を察したギンだったが、まずは気付けをするべくティアナの肩に手を回し、活を入れた。

「かはっ」

一時的に止まっていたティアナの呼吸が回復し、吐き出される息と共に血色が戻っていく。「よし」と声に出して確認したギンは、そこで異変の正体を知ることになった。

ゆっくりと戻っていく呼吸に紛れ、ティアナの口からするりと抜け出してきた見覚えのある塊。ギンの表情が、一瞬で凍り付いた。

「な、何で……」

未だ意識を失ったままのティアナから出てきたもの。それは、

「ホムンクルス！」

これは一体、どういうことだ。

十二個の壺に封じられたホムンクルスの内、十一体は失われてしまっていたのではなかったのか？ 何故、ティアナの体内からこんなものが出てくるのか？

幾つもの疑問符が頭の奥で明滅するギンをよそに、新たなホムンクルスは、ティアナの体内から抜け出ると、一直線にマダナイが解放したホムンクルスの下へと飛んでいった。

まずい。何かが、まずい。危ない！

真っ赤なランプを灯した警報が、疑問符に取って代わった。

それを伝えようとするが、伝えるべき相手も、伝えるべき言葉も、思いつかなかった。

マダナイを見た。一時の激情は覚めたものの、まだ悪鬼羅刹の如くティアナに敵意を向けるマダナイの真横を、ティアナから飛び出したホムンクルスが擦るように飛んでいく。

はっと、マダナイが振り返った。

その目の前で、ヒト型に変わった最初のホムンクルスと二つ目のホムンクルスが、まるで互いに互いを飲み込むようにして融合した。「下がってください、ボス。何かおかしい！」

これまで、ほとんど沈黙を貫いていた島津が、剣持に呼びかける声が出た。歴戦の傭兵もまた、ギンと同様に異変を感じているようだった。

「先生？」

くたり、とマダナイの尾が垂れ下がった。連れだって歩く父の掌を求める幼子のように、おずおずとホムンクルスに手を差し出す。

ヒトを模したホムンクルスの手が持ち上がる。マダナイの差し出した手を握り返すつもりだろうか。マダナイの顔に、わずかな笑みが浮かび……。

しかし、その手がマダナイの手を包むことはなかった。ゆっくりと、握り拳を作るように固められた手は、……マダナイの顔の高さで真横になぎ払われた。

ぶん、という風切り音。裏拳のような格好で、マダナイの頬に拳がめり込んだ。

「先……生？」

あっさりと床に倒れたマダナイが、呆然と呟いた。信じられぬという表情で顔を上げ、赤く腫れた頬をさする。

それは、「靈魂」と表現されていたはずのホムンクルスが、いつの間にか肉を持ち、実体化しているということを示していたのだが、問題はそんなことではない。

「お前は……誰だ？」

ティアナを床に横たえて立ち上がったギンは、マダナイを殴り飛ばしたホムンクルスの背中問いかけた。

今やホムンクルスは、完全にヒトの、人間の姿になっていた。細身ながらも隆々と盛り上がった全身の筋肉が、脈動するのがはっきりと分かった。

ただ、肌の色は、到底血の通った肉体には見えない。元々、自身が収められていた壺の肌のように、青白い光沢を放っている。

「誰だっけ聞いてんだよ！」

問う意味も明確にならないまま、再びギンは声を荒らげて訊ねた。ホムンクルスが、ギンの方へ振り返った。自分の脈が一気に速まるのを、ギンは感じた。

振り返ったホムンクルスに貼り付いていた「顔」は、マダナイが縫った口ひげの男でもなければ、ティアナが血の涙とともに呼びかけた女性のものでもなかったのだ。

しかし、ギンはその顔を知っていた。その顔は、牙香がギンに示した写真の男。

己の名を冠した壺を抱えて、不敵な表情を浮かべていた男の顔だったのだ。

「うばおれえいのなるうば……」

ホムンクルスが、口を開いた。ひどいだみ声に加えて、更に風邪をひき、とどめに痰が喉に絡みついたような、声と言うより雑音に近いものが、その口からこぼれ出る。

「ぼれの……なば……」

ホムンクルスが、喉に指をあてがい揉んだ。ぐにぐにと喉仏が動き、少しずつ雑音が声に近づいていく。

「おれの……な……俺の名は」

やがて、落ち着いた低音に変じた声が、はっきりと言った。発音も完璧な日本語である。

「俺の名は、オットー・フォン・ヒエロニムス。偉大なる総統閣下と、帝国の繁栄に身命を捧げる者」

「何が……どうなつてんだよ……」

予測していたとおりの名前が出てきたにも関わらず、ギンの脳は混乱の極みにあった。

そんなギンを見て、「ヒトダマ」から「ホムンクルス」になり、「先生」から「ママ」を経て「ヒエロニウムス」になったモノが、陶器の顔に固い笑みを浮かべた。

「お前のことは、娘の目を通して見ていたよ。かつての同盟国の忘れ形見か。東洋人の目指す方向性も中々興味深い」

「娘、だつて？」

「俺も大戦中は、技術交流の一環で日本を訪れたこともある。お前には親近感を覚えるよ。できれば、色々と話をしたところだが、成り行きとは言え遠回りが過ぎているのでな、目的の遂行を優先させてもらおう。悪く思うな」

ギンの問いは、言外に無視された。

「さて」

もう興味は無いとばかりに、しっかりとした足取りで歩を踏み出したヒエロニウムスが、ギンとすれ違う形で通り過ぎていった。その先には、剣持と冴香がいる。

「現状では、お前の方が有効に使えるか。武器商人、だつたな？」

ヒエロニウムスが、剣持に声をかけた。

「待つであるよ……」

そこへ、ヒエロニウムスと入れ替わりに、こちらが実体を失つて、幽鬼のようになってしまったかのようなマダナイが、か細い声で割って入った。

「吾輩は、君など呼んでおらぬ。先生を……先生どこへやつた？」

答えるであるよ」

「下らない女の妄執や、甘えた子供の思慕のために、エーファー計画最後の遺産を使い潰されてはたまらんな。……諦める、既にこの素体は俺と完全に同化した。もはや、俺の意志を無視して、再び素体に戻ることはない」

ヒエロニウムスが言った。

「そんな……。それでは、それでは吾輩は何のために……」

糸の切れた人形のように、マダナイがその場でへたり込んだ。

「もつとも、俺がこうして素体を制御できたのは、お前が我が娘の意思を挫いて、俺の自由を取り戻してくれたからだ。その事には、礼を言っておく」

マダナイに一瞥いちへつすらくれずに言い放ったヒエロニウムスが、また剣持に意識を戻した。

「では改めて相談といこう。……ソードセラー、俺に手を貸せ。そうすれば、今以上に巨万の富を得る術を授けてやる」

「金も富も嫌いではないが、即答はしかねるな」

剣持が、答えた。少なくとも、表向きは完全に平静を保った声だった。

そこへ、剣持の前に立ちはだかるように島津が身を乗り出してきた。

「邪魔だ。お前に話はない」

「こちらにも、話すことは何もない」

言いざまに、島津がナイフを払ったことに気付いたのは、ギンだけだった。それほどの早業であった。寸分の狂い無く滑らされたナイフの刃は、ヒエロニウムの首、人間であれば頸動脈が通っている部分を切り裂いていた。が、

「浅はかなことを」

バターのように首筋を切り裂かれながら、ヒエロニウムスは平然としていた。確かに、ぱっくりと傷口らしきものが開いているにも関わらず、そこからは血の一滴も出ていない。

言葉を失った島津の手首を、ヒエロニウムスが掴んだ。

大して力を入れていないようにも見えたが、わずかにヒエロニウムスが手首を返すと、骨の碎ける嫌な音がフロアに鳴り響いた。

「ッ！」

叫び声こそ飲み込んだものの、激痛に顔を歪めた島津が、膝を折

った。

「人の話を聞くとときは、静かにするものだ」

まるで、鏡写しに同じ光景を見るようだった。島津の手からナイフを奪い取ったヒエロニウムスが、島津がそうしたのとまったく同じ動作で、島津の頸動脈を切り裂いた。

違ったのは、島津の首からは噴水のように鮮血が舞ったということ。島津は、絶命したことに気付かなかっただろう。

「貴様っ！」

剣持が吠えた。

そこに拳銃を吊っているのだろう。素早く右手をスーツの内ポケットに入れる。

ヒエロニウムスが、島津の血に染まったナイフを無造作に薙いだ。ナイフは、吸い込まれるように剣持の右手首を切り裂いた。

「所詮、お前も蛮人か」

手の甲側から切られたので、致命傷とはならなかったものの、剣持の体勢を崩すには十分な行動だった。無防備に身を退いた剣持の胸元に、やはり何の予備動作もなく振り上げられたヒエロニウムスのつま先が突き刺さり、数本まとめて、肋が折れる音がした。

「ふ……はっ！」

為す術もなく後方へ吹き飛んだ剣持が、大の字に倒れた。

「くっ……」

血が滲むほどに唇を噛みしめ、必死に悲鳴をあげるのを堪えた冴香が、繰り広げられた惨劇から顔を背けた。

「何と気丈な。素晴らしい。やはり、こちらのフロイラインの力を借りることにしよう」

その様を見たヒエロニウムスが、冴香に向かって薄く笑いかける。冴香のものよりも更に白い指で、冴香の顎をつまみ、無理矢理に自分の方を向かせる。

確かに、冴香はどこまでも気丈だった。それでも、その瞳から怯えの色をすべて消し去ることはできなかった。

「しかも、美しい」

そんな冴香の瞳を覗き込んで、ヒエロニウムスが言った。

ギンの胸が、怒りで燃え立った。到底、看過できる絵ではない。

「てめえ！ さえちゃんに触るんじゃねえ！」

怒りを腕に込め、後ろからヒエロニウムスの肩を掴む。

ヒエロニウムスが、無造作に腕を払った。その腕の先にナイフが握られていることは、織り込み済みである。紙一重でかわし、逆に腕を取ってやる心づもりだったギンだが、そこに誤算があった。

ヒエロニウムスが払った手に、ナイフは握られていなかったのだ。それにギンが気付き、次の行動をためらったほんのわずかの隙が、命取りになった。

「動くな」

流れるような身のこなしで冴香の首もとに回された反対側の腕に、ナイフはあった。いつ持ち替えたのか、まったく気づかなかった。

ナイフの切っ先は、言うまでもなく冴香の首筋に狙いを定めている。

「娘の目を通して見た、と言ったのを忘れたか？ 猫は、記憶が数秒しかもたないとも言つが、お前もその口だな」

「野郎……」

「言っておくが、俺の望みを果たすに当たっては、とりあえず死体であっても一向に構わんのだ。できればそうしたくはないが。この意味は、分かるな？」

ぴくりとも身動きできないギンを尻目に、ヒエロニウムスの手が、冴香を縛っていたロープをあっさり引きちぎった。

そのまま、あろうことか、王子が愛しの姫君にそうするかのように、冴香の体を優雅な振る舞いで抱き上げたのだ。

「ギン！ 助けて！」

「さえちゃん！」

言われるまでもなく、そうしたい。しかし、今一歩でも動けば、ヒエロニウムスは容赦なく冴香の首に鮮血の花を咲かせるだろう。

ギンはただ、齒噛みするしかなかった。

「さえちゃんを……。冴香をどうするつもりだ！」

答えず、背を向けたヒエロニウムスは、冴香を抱きかかえたまま、広いフロアを奥へ奥へと歩いて行く。

やがて、窓際で立ち止まると、そこから曇天の空を見上げた。

雲は、ギンたちがビルに乗り込んでからも厚みを増していたようで、いよいよ低く垂れ込めている。部屋の中程に立つギンの目からも、その様子はよく分かった。

「あの建物は……」

と、不意にヒエロニウムスが呟いた。動けずとも、全神経を集中させているギンの耳は、それを聞き逃さない。

ヒエロニウムスの視線の先にあるものを、ギンは探す。すぐに、気付いた。

隅田川を右手にした窓辺に立つヒエロニウムスの目に、最も強い印象で飛び込んでくる建物があるとすれば、ただ一つだった。

間違いない。奴が見ているのは、現在建設中の東京スカイツリーだ。

だが、そんなことが分かったところで何になる。「あれは、新しく建てる電波塔だよ」とでも教えてやれば、冴香を解放してくれるならともかく。

当然ながら、そんなギンの内心などまるで意に介する様子もなく、ヒエロニウムスは、冴香を抱えたまま、足で窓ガラスを蹴破った。

防犯性と断熱性を兼ね備えた二重構造の窓ガラスが、いとも簡単に破れた。けたたましい音が響く。びょうびょうと、冷たい風がフロアの中に吹き込んできた。

「では、さらばだ」

最後に、首だけで振り返ってヒエロニウムスが言った。

「待て！ 待ってくれ！」

懇願にも近い声で、ギンは言った。その声すらも無慈悲な沈黙で返される。

ヒエロニユムスの体が、ガラス片にまみれた窓枠を踏み越え、消えた。

微かな冴香の悲鳴が、吹き込む風に乗って耳に届くのを、ギンは何も出来ずに聞くことしかできなかった。

ACT 5 猫は塔の上で願いを受け継ぐ

「百年の恋が破れた気分というのは、どんなものなのかな」

「露悪趣味、というやつであるか？ …… 本当にそういうところは、冴香君の言うとおりに品のない男であるな。手当してやらぬであるよ」

上腕部の動脈と、ナイフを突き立てられた傷口とを、裂いた手ぬぐいできつく縛り上げながら、マダナイは言った。

「とりあえず、これで良からう。後は、自分で救援を呼ぶのであるな」

「ティアナの様子は、どうだ？」

「まだ、眠ったままであるよ」

つと、マダナイが目をやった先には、パーカーを布団代わりに掛けられたティアナが、思いの外穏やかな寝息を立てていた。

「ティアナ君は、知っていたのであるか？ エーファー計画の生み出したホムンクルスの本質と、そして、自身の内に飼っていたモノについて」

「知っていたのだらうな。私の前では、おくびにも出さなかったが。もし、私が彼女の真意に思い至っていたならば、わざわざ君と裏で接触することもなかった」

「……先ほどギン君に語ったこと、本心だったのであるな」

「ずいぶんと、話が飛ぶじゃないか」

「吾輩が、エゴに満ちた愚かな願いをうたつたのを、娘に見せて何とするつもりであった？」

「単なる決意表明だよ。私は、綾織部を含む、『機構』も、親父も憎んでいる。心底な。だからこそ、私自身の才覚と力で奪い取り、その上で叩き潰したいと思っただけだ」

「その決意を、現当主の前で示そうと？ 闇の世界に名を馳せる死の商人が、存外ロマンチストであるなあ」

「父と家とを憎んでいても、娘は……冴香だけは愛しているつもりなのだ。私なりに」

そこまで言った剣持が、呻いた。折れた肋が痛むのか、額に大粒の脂汗が浮かべている。

「今更言っても詮無いことだが、冴香は壺の中身をさっさと使ってしまうべきだったのだ。あれを無害な形で処理することなど、実は造作も無い。それこそ、最初の騒ぎの時に、そのまま放っておけば……」

「それを言うなら、冴香君の買い物を横取りしなければ良かったのではないか？」

マダナイは、残った手ぬぐいの切れ端でその汗を拭ってやった。

「先に大江山の資産目録に目を付け、交渉していたのは私だ。冴香の方が、私への対抗心で、ろくにその内容を調べもせず横槍を入れてきたのだよ」

「それは本当であるか？」

「私は、NSAを追われたティアナの母、カミラ・アーレンスから情報を得て、羽振りの良かった頃の大江山が、戦後のどさくさで東欧一帯に流出した出所不明の美術品を買い漁っていたことを知ったのだ。そうでなければ、時系列が合うまい」

「やれやれ……」

言われてみれば、納得できる部分もある。冴香には、最初から美術品強奪犯の目星がついていたのだ。だからこそ、たった数時間の間に情報を収集できたのだろう。

「父と娘のいさかいを戒めるにすれば、少々酷な授業になってしまったのであるな」

マダナイは、自らをヒエロニムスと名乗った、あのホムンクルスが蹴破った窓の方を見やって、言った。

一方の自分も、人の事は笑えない。

ホムンクルスの力を借りて、百年も前に死別した元の飼い主を現世に蘇らせたとしても、それが単なるまやかしにも等しいものであ

ると、頭では分かっていた。だが、エーファー計画が真に目指していたことを剣持から聞いたとき、どうしても己を抑えることができなくなってしまう。それが、大切な友人を騙し、裏切ることと知りながら。

その結果、得たものは何だ？ わずか数十秒の再会。それも、胸に秘め続けた望みを伝えることはおろか、言葉を交わすことすらできなかつた。

ティアナも、同様だ。

死んだ母親から、計画の詳細は聞かされていたのだろう。母の願いは、その阻止であったことも想像に難くない。

しかし、ティアナは、母親を自分の元に取り戻すことを願った。無理もない。どれほど高度な訓練を受けていたとしても、まだ十二歳の少女なのだ。たった一人の肉親を、冥府から呼び戻す術を知っていて、それを実行しようと、異国の地で泥にまみれる姿を、誰が責められようか。

「そうとも知らずに吾輩は……」

ティアナは未だ、目覚めない。

「ギンは、どうした？ 姿が見えないが」

剣持が、訊ねてきた。

「聞くまでもなからう。剣持殿が気を失っている間に、冴香君の救出に向かったであるよ。勝算の有りや無しやは分からぬがね」

数分前の光景を思い出しながら、マダナイは答えた。

「先生、ボク行くね。……もう、大丈夫？」

「心配はいらぬであるよ」

「ならいいけど。それじゃ、ちーちゃんのこと、よろしくね」

床に寝かせたティアナの体にパーカーをかけてやりながら、ギンが言った。

「吾輩を……責めぬのであるか？」

ギンの横顔に向かって、マダナイは言った。

「そつだね……」

その横顔に、どこか寂しげな表情を浮かべて、ギンが答えた。

「先生の気持ちも、ちーちゃんの気持ちも、ボク、よく分かるからボクにも、絶対に守りたい大事な約束があるし、大事な人がいるからね」

ギンの手が、ティアナの額に触れた。乱れた前髪を、優しく整えてやっていた。

「まあ二人とも、ちよ〜つとやり方をまずつちやっただかなーとは思っ……かな」

親指と人差し指で、「ちよ〜つと」のジェスチャー。茶化して言うギンの優しさは、マダナイの心をほんの少しだけ軽くした。

「人間……あー、ボクらは人間じゃないけど、なんてーの？ 何かこつ、心の隙間にそーいう悪いって言うか、アヤシイもんが、ぷいっつと入って来ちゃう時って、あるよね。だからまあ……しよ〜つがな……いんじゃない？」

「しよ〜つがない、で済ませられるのであるか？ では、もしギン君が吾輩と同じ立場でも、そうすると？」

「さあ、どうだろ。ボクはもうずっと前に、もらっモノもらっちやっつて生きてるからなあ、あんまり好き勝手できないんだよね。後で怒られるの、嫌だし」

「怒られる？ 誰に？」

マダナイの投げかけたその問いに、ギンが答えることはなかった。ただ、一瞬だけ遠いどこかへ思いを馳せるような目をして、

「じゃあ、ちよ〜つと行って話付けてくるよ。アレはやっぱり、誰も幸せにしてくれなさそうだからさ」

そう言っつて、笑った。

「……誰も幸せにしてくれぬ、か。ギン君は、最初からそのことを訴えていた。そして、それは正しかった。根拠のないカンと言えはそれまでであるが、ギン君だからこそ、そのカンが働いたのである

な。ホムンクルスも、ギン君も、言ってみれば親戚のようなものであるうから」

「結局、ギンの約束とやらについては、最後まで話さずじまいか」
「聞いてどうなるものでもない。それとも、剣持殿には何か心あたりがあるか？」

「そんなものは無いさ。ただ、親父が戦後にギンを家に引き取って以降、あいつは普通の猫として暮らしていた。毎日のんびりと、町を歩き回って過ごしていただけだ。私が子供の頃から、ずっとあいつは家にいたが、一言も人間の言葉を話すことなどなかった」

「ほう、それは初耳であるな。吾輩とは、普通に話をしていたが」
「それが変わったのは、冴香が産まれた時だった。十七年前、病院から自宅に戻って来た冴香を一目見るなりギンは、ベビーベッドに飛び乗ってこう言った。これからは、ずっとボクが側にいてあげるからね……と。親父も、驚いていたなああの時は」

「それが、約束だと？」
「さてな。ふと、思い出しただけだ」

柄にもない話をしたと、自嘲気味に剣持が笑った。

苦労して携帯電話を取りだし、どこかへ電話をかけ始める。これ以上は、何も話すつもりは無さそうだった。

「……私だ。少々トラブルがあった。悪いが、すぐに迎えを寄越してくれ。それと、医師の手配を頼む」

潮時と見て、マダナイは立ち上がった。

テイアナの小さな体を抱きかかえると、電話を切った剣持と目があつた。

剣持が、わずかに頷く。目で、「行け」と促していた。

「冴香君は面白くないだろうが……一時とは言え、夢を見させてくれたことについては、感謝しているであるよ。この借りは、いずれ」
「夢は覚めてしまったようだがね。すまないことをした」

一度だけ、深々と剣持に頭を下げて、マダナイはその場を後にした。

そう、夢はいつか覚める。問題は、覚めた後だ。

ギンと冴香にも作ってしまった大きな大きな借りを、わずかずつでも返済していかねければならないのだから。

駒形から、東武線業平橋駅まで、走りに走って十五分。

建設現場をぐるりと覆うフェンスを跳び越え、敷地内に侵入したギンは、注意深く周囲を見渡して人の気配を探った。

今日の作業は、既に終了している。現場作業員はおるか、誰の気配も感じられない。

本当に冴香がここへ連れてこられたという確証は、どこにもなかった。ただ、ヒエロニウムスが、駒形のビルからこのスカイツリーをじっと眺めていた姿が、脳裏にこびりついて離れなかった。

折から低く垂れ込めている雲の中に、塔の上部は隠れてしまっている。

改めて、根本から見上げるスカイツリーの異様は、また特別であった。つい先日、大提灯との追いかけてこをしていた時に見た姿と、今の姿が、まるで違う物のように見えるのは、自分の心の内をこの塔に映しているからだろうか。

調べてみると、塔をよじ登ることそのものは、大して難しいことではないと分かった。

竹細工か何かのようにみっしりと交差する形で組み上げられた鉄骨の躯体は、ギンにとっては十分に足場として機能するし、作業員が上り下りするための階段もあれば、中心部分を貫くエレベーターシャフトもある。

もしもヒエロニウムスが、このスカイツリーの上に冴香を運ぶならどうするだろう。不定型なヒトダマから、人間の姿となり、冴香を抱えて二本足で歩く……。

「階段か」

決めて、階段を上り始めた時だった。

「あれは！」

数メートル上った最初の踊り場に、冴香のカチューシャが転がっ

ているのを見つけた。何かの拍子に、外れて落ちたのだろう。

カンは正しかった。やはり冴香は、ここに居る。この塔を上った先で、ギンが迎えに来るのを待っているに違いない。

尻尾でカチューシャを拾い上げると、染みついた冴香の匂いが、微かに漂ってきた。ギンの四肢に力が漲る。

走った。階段を三段飛び、四段飛びで駆け上がっていく。急げ。急げ。急げ！

ただひたすらに自分を叱咤し続け、心肺能力の限界を超えるつもりで走り続けた。

380メートルをノンストップ。唐突に、終点が訪れた。

鉄骨とパイプとケーブルとが、複雑怪奇に絡み合った所から、急に何も無い開けた空間に出たのである。

そこは、現時点での塔の突端だ。観光用の大展望台が作られる予定の場所。今は、垂直から水平に転じて渡された鉄骨の上に、仮の床材として、所々に赤さびの浮いた鉄板が敷かれており、その縁を安全柵が取り巻く殺風景な広場になっていた。

屋根もない。見上げれば、そこはもう一面の曇り空だった。

「さえちゃん！」

「ごうごうと唸る風に負けぬよう、ギンは腹の底から声を張り上げた。

巨大な闘技場のようにも見えるその場所を隅々まで見やって、冴香の姿を探す。

と、それまで消えていた夜間作業用の明かりが、そこかしこで灯り始めた。

「待っていた」

声が出た。冴香のものではない。

広場のほぼ中央、乳白色の光の中に、ヒエロニムスの姿が浮かび上がった。

「さえちゃんはどこだよ、瀬戸物野郎」

ギンの瞳が、強い光を受けて、すつつと縦長に瞳をすばまった。

実体を得たヒエロニユムスの体は、相変わらず陶磁器を思わせる白さのまま、投げかけられる光を反射している。全裸ということもあって、その姿はまるで大理石の彫像だ。

「そう怖い顔をするな、ネコマタ。フロイラインは、俺にとっても大事な体だ。傷一つ付けていない」

答えたヒエロニユムスが、滑らかな仕草で顎をしゃくつた。

そこに、冴香がいた。

「ギン、来てくれたのね」

それこそ彫像のように固く強ばっていた冴香の顔が、ギンを認めた瞬間、安堵に緩むのが分かった。

「来るに決まってるでしょー。待っててね、もうぱぱぱーっと助けあげるから。んで、こんな寒い所さっさとおさらばして、和宝であつたかいお鍋とか食べようよ」

「いいですね。地鶏のつくねを一杯入れましょうね」

「軟骨入りでね」

「ネギは抜かないといけませんわね」

「ちーちゃんと……それから、マダナイ先生も呼んでいい？」

「……ええ。勿論ですわ」

何気ない、いつものやり取り。それで、冴香はすべてを分かってくれた。気丈に浮かべる笑みの中にそれを確かめたギンも、冴香を勇気づけるために大きく相好を崩して頷いた。

そこに、冷や水を浴びせるもう一つの笑い声がして、ギンは再び表情を引き締めた。

「さて、と。で、待ってたってのはどういうこと？ 何か話があるんだったら、手短かにね。早く帰ってお鍋食べたいんだからさ」

「手を組まないか？ 俺と」

手短かに、というギンの要望を聞き入れたわけでもなかるうが、ヒエロニユムスが端的に切り出してきた。

「やだ」

ギンは、更に短く即答した。

「……大体あんた、何なの？ ボクらみたいなの、妖怪つてわけでもなさそうだし。その辺、一切合切内緒のまままで、いきなり手を組めとか、無理でしょ普通」

「言つたらう？ 俺は、オットー・フォン・ヒエロニムス大佐。」

「……まあ、正確を期するならば、その記憶と人格を受け継いだホムンクルスだが」

「記憶と人格？」

「エーファー計画の真髄は、無機物にかりそめの命を与えて自律兵器とするなどという即物的なものではない。ホムンクルスは、総統閣下に不死の体を差し上げ、その偉大なる治世を永久に継続させるための素体として生み出されたのだ」

「そこまで聞いて、既にギンはうんざりした気持ちになっていた。」

「……つたく、どいつもこいつも」

ヒエロニムスの喋り方は、あの狂った時代、まだ人間の価値観を理解し切れていないギンを体よく洗脳するために、戦争の大義だ神国の理想だと熱弁しまくってくれた陸軍の高官どもと、まったく同じものだった。

「しかし、計画半ばで第三帝国は敗れた。敗戦の混乱で多くの素体は行方不明。だが俺は、計画を次代の闘士に引き継ぐために、たった一つ手元に残った素体に自らの記憶と人格を写し取らせたのだ。そして六十年、戦後の混乱で失われた他の素体を探し求めながら、いつか復興する祖国に仇なす者たちと戦い続けてきた」

そんなギンの内心など、まるで慮おもんばかることなく、ヒエロニムスの演説は続く。喋れば喋るほどに、自らの言葉に興奮し、ますます雄弁になるところも同じだ。しかも、大方その手の話には、ろくな才チが付かない。

「そして今こそ、我が元に戻った素体に総統閣下をお迎えし、愚かな人類を超越した真の指導者として……」

(あーあ、言っちゃった)

ここでギンは、ヒエロニムスを見切った。

今や恍惚として、熱く握り拳を振り上げて語るヒエロニウムスは、ギンの動きにまるで注意を払っていない。

小さくかぶりを振って、冴香を見る。

(いいよね？ さえちゃん)

目で訴えかけると、冴香もまた首を左右に振り、ギンを見た。その瞳に頷いたギンは、

「ほあつたあつ！」

ヒエロニウムの演説をぶった切る、カンフー映画ばりのかけ声と同時に、充分に捻りを利かせた後ろ回し蹴りでもって、いきなりヒエロニウムの顎を跳ね上げた。

「ぐんっ！」

カエルが潰れたような声をあげたヒエロニウムの体が、垂直に持ち上がる。そこへ、軸足を入れ替えた中段蹴りを、流れるようなモーションで叩き込んだ。くの字に折れたヒエロニウムスが、軽く三メートルばかり吹き飛び、鉄板の上に転がった。

「はい、アウト〜！」

ぐいっと親指を突き出した拳を掲げる。それが、宣戦布告であった。

「畜生は所詮、畜生か……」

ゆらりと立ち上がったヒエロニウムスが、失望も露わにギンを見た。

繰り出した二発の蹴りに、ギンは一切の手加減を加えていなかった。普通の人間ならば、最初の一撃で、齒ごと顎の骨が砕けて再起不能になってもおかしくない。

しかし、ヒエロニウムスは、大したダメージを受けた様子もなく、青白い体についた赤さびの粉を払って平然としている。

「いやー、悪役の台詞として、『愚かな人類』だけはダメでしょ、やっぱ。色んな意味で」

「後悔するぞ」

蹴られた顎の具合を確かめるようにしていたヒエロニウムスが、ぼそりと言った。

「もうしてるよ。……何十年も前にね」

軽くステップを踏んで動きのリズムを維持したまま、ギンは言った。

「ボクを作った軍の連中も、似たようなこと言ってたよ。今や、畜生すらも八紘はつこう一宇いつうの理想高く、陛下の御為に報国の志を持つ……とか何とか。今にして思えば、なぐんであんな連中の言うこと信じちゃったんだろうなー、ボク」

そのギンの後を、冴香が引き継いだ。

「時計の針は、戻らないのだということに自覚なさい。狭義のナチズム・ファシズムの否定は、大きな歴史の潮流だったのですわ。それに納得できず、人の身を捨ててまで続けてきたあなたの闘争と、その労苦に対しては幾らかの同情も覚えはしますが」

「同情だと!？」

「ええ、同情ですわ。それに、あなたの語る永遠の命と支配とが、

夢物語であることは、あなたご自身の行動で、既に証明されてしまっているではありませんか」

冴香が、きつぱりと言いつつ切った。

「ティアナさんは、彼女のお母様をみごもらせたのは、ヒエロニウムス本人であると言っていましたわ。あなたは、捕えたカミラさんを強姦した際に、霊魂……あなたの言う『素体』の状態に戻ってカミラさんの胎内に移動したではありませんか？ ……その後、カミラさんのお腹で育つティアナさんの体に乗っ取って、もう一度生まれ変わろうとした」

同じ女性として、許せぬものがあるのだろう。冴香の声が厳しいものになった。

「問題は、なぜそのような事をしなければならなかったのかということですね。考えられる可能性は、いかにホムンクルスと言えども、その寿命は永遠ではないことに、六十年にわたる闘争の中であなた自身が気付いてしまったからですね？」

ギンの脳裏に蘇る光景があった。

ママを返せ、と叫んだティアナがマダナイに飛びかかったとき、マダナイの妖気に打たれたティアナの体から飛び出して来た、もう一体のホムンクルス。あれこそが、今日の前に立っているヒエロニウムスの人格を持つ者の正体だったのだ。

「しかも、そこには誤算があった。あなたは、ティアナさんの体も意識も乗っ取ることができず、十二年間、彼女の体内に閉じ込められてしまっていた。ティアナさんが、マダナイ先生の妖気を受けて弱った隙を突き、何とか脱出に成功した……そんなところではありませんか？」

ヒエロニウムスからは、何の反論もない。

冴香のターンは、更に続く。

「同情するというのは、その部分です。己の行動の破綻はたんを認められず、反省せず、疑わず、同じ過ちを繰り返す。どうするつもりかは知りませんが、あなたが今身を宿している素体とやりに、あの画家

崩れの弁士の人格を植え付けたとして、二十一世紀のこの時代、誰がその言葉に耳を傾けるといふのです？ あなたは、遠い昔に記憶と人格をその素体に移したとき、そういった当たり前の判断力を切り捨ててしまったのですか？」

「貴様……言わせておけば……」

「まだわたくしの話は終わっていません！」

稲光のように落ちる冴香の一喝に、何故かギンの方が身をすくませってしまった。

「今のあなたの行動は、打ち込まれたコマンドを盲目的に実行する初歩的なプログラムと同じ……いいえ、このご時世、コンピュータだってもっとまじな判断をしますわよ」

冴香は、怒っている。しかしこれは、少々まずい。

「ならば、わたくしの身柄を押さえた理由も、想像がつかます。わたくしを、第二のカミラさんかティアナさんにしたいのですが、そんなことは……」

冴香が言い終わるよりも早く、ヒエロニユムの拳が冴香の方を向いた。

ほれ見たことか！ と、ギンは足を跳ね上げた。踵が、ヒエロニユムの肘を内側から叩き、拳の軌道を間一髪で逸らす。

巻き上がった風が、冴香の髪をなぶって揺らした。

「……ギンが許しませんわ」

だが、冴香は身じろぎ一つしなかった。迫り来る拳から目を逸らさず、最後まで言った。

「では、ギン。後はお任せしますわよ」

自分の出番はここまで、とばかりに、冴香がすつと身を退いた。

まったく、とんだお嬢様に飼われてしまったものだと思息し、ギンは改めてヒエロニユムと向かい合った。

「……だつてさ。でもまあ、ボクも同じ意見だよ。今更、そんなことしたつて……」

「黙れ！」

ギンの言葉を遮り、鋭い突きが来た。

猫手ねこてに丸めた左手で円を描くようにしてその突きを受け流し、ヒエロニウムスが突進してくる力をそのまま跳ね返す形で、ギンは右の掌底でヒエロニウムスの胸板を打った。見た目の印象とは違い、太いゴム束を打ったような感触が、肘まで突き抜けた。

「貴様らの汚れた言葉で、偉大なる総統閣下の理想を貶めることは許さん！」

ヒエロニウムスの手が、伸びたままのギンの腕を鷲づかみにした。そのまま、関節を砕けよと、ねじりあげてくる。

自分からねじられる方向に体を回すことでダメージを逃がしたギンは、懐に飛び込み、斜めにヒエロニウムスの臍すねを蹴り下ろす。

「思うのは勝手だよ。ボクも、あんたも。ただ、それを実行に移しちゃったり、人に押しつけようつてのが問題だし、気に入らないって言つてんの！」

ヒエロニウムスが、膝を折りかける。ここは畳みかけるべく、後頭部に肘を落とそうとした矢先、素早くはね上がったヒエロニウムスの頭が、カウンターでギンの顎を直撃した。膝を崩したのではなく、バネを溜めていたのだと理解したときには、もう遅い。

「がっ！」

目の奥に火花を散らせて、ギンは尻から崩れた。そこに、体重を乗せた足刀そくとうが降ってくる。真横に転がって、避けた。

それを読んでいたのか、すぐに追い打ちが来る。サッカーボールキック。無防備な背中を蹴り抜かれた。あまりの衝撃に、全身の神経が一時的に麻痺し、呼吸が止まる。

それでも、蹴られた勢いで転がることで間合いを離し、立ち上がる。

「オカルト技術屋のくせに、やってくれんじゃん」

「閣下直属のSS士官ならば当然の心得だ」

立ち上がった膝が、震えた。

それを見て取ったヒエロニウムスが、あざけるように笑う。

「威勢が良かったのは、最初だけか」
「んなる！」

パン、と痺れの残る太ももを平手で叩いて気合いを入れ直し、ギンは前へ出る。手数で圧倒するように、固めた両拳を上下左右から連続で繰り出した。

すべての攻撃が、あっさりとはさばかれ、弾かれた。両腕が左右に流れ、顔から股間まで、急所の数々がガラ空きになってしまふ。

ノーモーションの蹴りが飛んできた。直撃すれば、内臓破裂ぐらいしかねない。が、ギンの狙いはそこだった。繰り出したパンチはすべて、フェイントだ。

蹴りの軸足を、死角から飛ばした尻尾で払った。今度こそバランスを崩したヒエロニウムスが、床に膝をついた。

絶妙の位置に降りてきた顔を、全力で蹴り飛ばす。仰向けに倒れたヒエロニウムの後頭部が、床に打ち付けられる鈍い音が響いた。

ようやく、呼吸を整える間を得て、ギンは大きく深呼吸してから言った。

「今からでも考え直す気、無い？ どう転んだって、先のない事に血道を上げるよりさあ、もっと自由に生きてみたらいいじゃん。月並みなこと言いたかないけど、永遠の国家とか命とか……そんなもん無いってもう分かってんでしょ？ 意地張るようなことじゃないと思うんだけどなあ」

「自由に生きる……だと？」

「そうそう。せつかくそんな便利な体持ってるんだからさ、変な型に捕われないで、違う自分になったつもりで生き直すのも悪くないんじゃない？」

「便利な体……。型に捕われず、か。なるほどな」

身を起こしたヒエロニウムスが、笑った。歪んだ笑みだった。

「意地を張らず、自由に生きるか。良かろう、だったらそれを実践して見せてもらおうか！」

ヒエロニウムスが、手を振り上げた。その形が、妙にいびつなものになっていくような気がしたその時だった。

鞭のしなるような音がして、ギンの真横を何かが通り抜けていった。はっとして振り返ると、背後に立っていた冴香の腕に、青白く作業灯を照り返す、細長い紐のような物が巻き付いていた。

「型に捕われない、というのはこういうことかな？」

ヒエロニウムの言葉に、ギンの背筋が粟だった。

腕だ。粘土のように形を変えたヒエロニウムの腕が、冴香を捕えているのだった。

「全然、ちげえつての！」

吠えたギンの指先から、カギ爪が生える。振りかぶった。ぴんと張っていた腕が、たわむ。間に合わない！

冴香を捕えた腕が、その華奢な体を空中へ持ち上げる。まるで、釣り餌を海にでも放るかのようにしなった腕が、邪悪な揺らめきを見せ、

「やめろおっ！」

ギンの絶叫も虚しく、冴香の体が安全柵の向こう側へと消えた。

「またも、油断してしまった。ホムンクルスの体が、元々不定形だということとは、最初から分かっていたのに！」

「だが、後悔の時間は無い。なりふり構わずに自分も安全柵を跳び越えたギンの真下、冴香がいた。その姿が、わずかでも小さくなつてしまえば、待つのは絶望だけだ。」

「真上に伸びた冴香の手が、宙をさまよう。その手を掴んでやれるのは、自分だけなのだ。」

「尻尾を鉄骨の一本に巻き付け、ギンは自らの体を宙に躍らせた。せた。」

「手を伸ばせ！ 冴香！」

「ほとんど祈るように言ったギンの手首に、辛うじて触れる温もり。直後、ギンの腕にずしりとのしかかってくる重量感があった。」

「ギン！ ギン！」

「冴香が、ギンの名を呼んだ。」

「喋んな！ 今助け……！」

「言いかけたギンの尻尾に、不気味な感触が走った。ギンは冴香の体ごと、何かに引き上げられるのを感じた。」

「嫌な予感がして振り向く。元の形に戻した腕でギンの尾を掴んだヒエロニウムスが、凶悪な喜悦の笑みを浮かべていた。」

「さあ、実践はここからだ」

「安全柵の一つを蹴り飛ばしたヒエロニウムスが、吹き付ける突風をものともせず、空と床との境界線に立った。」

「意地を張らず、自由に生きるのだろうか？ だったら、その手を離してみる。そうすれば、お前は自由だ。命を長らえる機会をくれてやる」

「言つと思つた中で最高に陳腐で、最低に卑怯な事言いやがったな！」

生殺与奪は思いのまま。互角の殴り合いから、一瞬にして圧倒的優位に立ったヒエロニウムスの耳には、ギンの言葉など何の痛痒こつようももたらしていまい。

尻尾を掴んだ腕を、弄ぶように上下に揺さぶる。その振動だけで、冷や汗に濡れた冴香の手が、ギンの手からこぼれそうになる。

「きゃああつ！」

気丈が服を着たような冴香をしても、高度400メートル近い場所宙吊りにされる恐怖を前にしては、通り一遍の悲鳴しか出て来ないようだった。

何とか、冴香を広場に戻さなければならぬ。

(この距離なら、全力を振り絞れば何とか……)

隙を見て冴香を投げ飛ばそうと、ギンが様子をうかがっていると、余計な選択権は無いと知れ

「ギンの脇腹を、これまで感じたことの無いような灼熱感が襲った。え？　と思う間もなく、腕からがくと力が抜ける。のしかかる冴香の体重が、一気に何倍にも膨れあがったようだった。

見れば、今度は鋭利な鎌のような形状に変わったヒエロニウムスの腕が、ギンの脇腹に深々と突き立っていた。その青白い刃の上を、真っ赤な血液が伝っている。

「お前の言葉がきっかけになったのは、事実だよ。なるほど、固定観念というのは怖いものだ。今の今まで、この体をこんな風に使ったことなど思いもよらなかった。礼を言うぞ」

「や……ろお……」

突き立てた鎌を、ヒエロニウムスは情け容赦なくえぐった。ギンの意識がスパークし、白く染まる。悲鳴すらあげる余裕が無かった。それでも、それでも冴香の手首を掴む腕の力を緩めることだけはできなかった。

「さあどうした？　その手を離して、自分の言葉を証明して見せる」

「できるわけ……ねえだろうが、そんなこと」

「では、どうする？　この俺に対する数々の侮辱を撤回し、命乞い

をするか？ 自分こそが愚か者であつたと認め、俺の足下にひれ伏すか？ …… そうだな、それならば俺も寛大な心で許してやらんこともない」

じくり、と刃の角度を変えて、ヒエロニウムはどこまでもサデイステイックに迫った。

「およしなさい！ …… 分かりました。わたくしが間違っていました。ギンに代わって、主のわたくしが、謝罪いたします。だから、だからお願い…… ギンを殺さないで……」

「やめる！ ダメだ冴香……。お前はもう…… 誰の指図も……」

絞り出したギンの声は、弱々しく掠れていた。高らかなヒエロニウムの哄笑が、その声をかき消してしまふ。

「良からう」

満足げに頷いたヒエロニウムが、ギンの尾を掴んだ腕を無造作に振った。ギンと冴香の体が、鉄板の上に投げ出される。

「ギン！ しっかり！ しっかりなさい！」

朦朧とする意識の隅で、冴香の声がした。目を開ける。這いずるようにして近づいてきた冴香が、ギンを見下ろしていた。

ヒエロニウムの手が、背後から乱暴に冴香の髪を掴んで引きずり起こした。

「さあ、今一度言ってみろ。俺の手に口づけし、自分が間違っていたと懺悔しろ。己の下らぬ価値観で、総統閣下の理想を貶めた、唾棄すべき人間だと。以後は、再臨される閣下に忠節を尽くし、真の理想国家の復活に身命を賭すと誓え！」

「ああっ」

投げつけるように冴香の体を離し、ヒエロニウムが、冴香を無理矢理に自分の足下にひざまずかせた。

「それで…… ギンの命は助けてくださるのですね……」

「閣下の栄光に賭けて、誓おう」

「わかり……ました……」

冴香の手。

優しくギンの背を撫で、誇り高く世界を動かす指先が、ヒエロニ
ユムスの手に触れる。

「わたくしは……」

「言っなっ！ 冴香っ！」

「ここに己の過ちを……」

「さえかああああっ！」

ギンは、立った。立ち上がった。

足下に血の海を作りながら、それでも立たねばならなかった。

「へへっ、見てよさえちゃん。ボク、まだピンピンしてるよ。ちょ
っと、そごいって……。今、ほんとにもう、さくっと、すぱーっと、
そいつのことぶっ飛ばしちゃうから」

「……死に損ないが。どこまでも愚かな奴だ」

ヒエロニユムスが、鎌の腕を振り上げた。

何も迷うことなく、真一文字に振り下ろしてくる。ギンには、避
ける術も受ける力も残っていない。意地だけで立ち上がったが、完
全に手詰まりであった。

刃が、迫る。

せめて、目だけでも逸らさずにいようと悲壮な決意を固めた、そ
の時だった。

「君はまだ、死んではいかんであるよ」

聞こえるはずのない声が、聞こえた。

同時に、ふらふらの体を、背後から支える腕の感触。

目の前では、わずか三十センチに迫った刃が、艶やかな毛並みを
した四本の尻尾によつて、がちりと絡め取られているのが見えた。
「先……生」

「危ないところだったであるな」

横から、穏やかで落ち着いた笑みを浮かべたマダナイが、ギンの
顔を覗き込んできた。

更に、その脇を疾風のように駆け抜けていく小さな影。

「はあああっ！」

裂帛れっぱくの気合いとともに、びゅんと風を切る音がした。

瞬間、ヒエロニユムスの顔面が、爆発に巻き込まれたように大きく背後にのけぞった。

「ぐおっ！」

「今の一発は、ママの分だと思いなさい」

ギンとヒエロニユムスを隔てるわずかなスペースに、小さな竜巻が巻き起こったようだった。その竜巻の中心には、闇の中で煌びやかに輝くプラチナブロンドが揺れている。

小さな体の利点を存分に活かし、うなりを上げるトンファーによる、凄まじい密度の連撃で、ヒエロニユムスを滅多打ちにしているティアナの姿だ。

「これも！ これも！ これも！ これもママの分よっ！」
更に、

「今だ！ みんな、兄貴とお嬢様をお助けしろっ！」

「てめえら、遅れを取るなよ！ この寛永寺の三吉に恥いかかせた野郎は、全員荒川に叩き込んでやるからな！ 気合い入れて行けえっ！」

「多摩のクロツキ、義によって助太刀いたす！」

続けざまに勇ましいかけ声が聞こえてきたかと思うと、狭い階段から、エレベーターシャフトの隙間から、溢れるようにわき出てくる、猫、猫……ネコ！

数百匹はくだらない猫の大群が、思い思いに威嚇の声を上げながらギンたちとヒエロニユムスとの間に毛玉の壁を作り上げたのだ。

「マダナイ先生から、話は聞いたぜ兄弟え。こんな一世一代の力チコミに、この三吉さんと呼んでくれねえたあ水くせえにも程があらあ」

でっぷりと肥え、頭一つ抜きんでた貫禄を持ったブチ猫が、ギンを見上げて言った。

「拙者も、過去にギン殿や冴香殿に大恩を受けた身。間一髪、間に

合つてようござつた」

袴（姿も凛々しい美貌の女剣士が、自分の胸に巻き付けていたサラシを解いてギンの傷口にあてがい、慣れた手際で止血をしてくれた。

「お嬢様はあつしらにお任せくださいませ。もう野郎にやあ指一本触れさせやしませんぜ！」

頼もしい一言を投げかけてきたのは、竹虎である。

「さて、再び形勢逆転であるな。言っておくが、卑劣な手段を用いてようやくギン君一人と渡り合えるような小者が、吾輩たち猫又四天王を同時に相手にして勝てるなどは、微塵も思わぬことであるよ。言わば、君は『詰んだ』状態と知りたまえ」

マダナイが、悠然とくゆらせる紫煙と共にヒエロニウムスに叩き付けた一言に呼応して、集結した数百匹の猫たちが、一斉に「ニャーッ！」と声を上げた。

「ケダモノどもが……調子に乗るな！」

両腕を巨大な剣のような形に変化させ、ヒエロニウムスが叫んだ。取り巻く猫たちをなぎ払うように振り回す。素早く反応した猫の壁が、ざーっと形を変えた。それでも、ギンと冴香を守る陣形に、狂いは無い。

「往生際の悪い野郎だ。……まあ心配すんな、兄弟え。ここはおいらたちに……」

ギンの傍らで、ブチ猫の三吉が言った。

「や、それじゃあボクの寢覚めが悪くてダメだね。ここまでしてくれたら、充分だよ。後は、サシでケリ付けさせてくんないかな？」

だがギンは、きっぱりとその申し出を断った。

「男だねえ、兄弟え。……野郎ども！ タイマンだ！ 花道を開けるいつ！」

三吉が頷き、再び猫の壁が動く。モーセが示した奇跡もかくや、ギンとヒエロニウムスとの間を結ぶ一直線上に道ができあがった。一步、その花道をギンの足が踏み出す。

「傷の具合は、どうかな？ そのサラシは、拙者の妖気を込めて織り上げた物だ。幾らかは、楽になっていると思うが」

「ありがと。幾らかどころか、全然平気」
もう一歩。

「吾輩も、ティアナ君も、既に覚悟は決めてある。どうか君の手で、何もかもを葬り去ってほしいであるよ」

「オツケー。この後、和室で打ち上げだからね」
更に一歩。

ティアナが、ギンを見上げていた。

「お母さんの、本当の願いを叶えてあげなきゃね。……ボクに、任せてくれる？」

「本当は自分でやりたいけど、しょうがないから譲ってあげるわ。その代わり……」

「わっかってるって」
更に一歩。

既に、ヒエロニユムスの間合いである。

怯むことなく、仁王立ちで対峙したところで、ギンは声を張り上げた。

「ご依頼をどうぞ、冴香お嬢様」

「ぶっ飛ばしなさい」

「可及的速やかに？」

「その通りですわ。比内地鶏の茹でささみを一年分、差し上げましてよ」

法外な報酬に、ギンの頬がにんまりと緩んだ。

「舐めるなあっ！」

直後、空気を切り裂いてヒエロニユムスの剣腕けんわんが襲いかかってくる。

「はああああっ！」

ギンは、腹の底から絞り上げるように気合いの声を上げた。

ギンの衣服が、全身に生えてきた白銀色の被毛によって覆い隠さ

れていく。髪も伸び、きれいな三角形をした猫の耳が、頭頂部に現れた。

完全に猫目に戻った灰色の瞳もまた、その名を示すように白銀色の光を放ち、四肢は、獣ともヒトともつかない独特の形に変化した。二股の尻尾が、天を向いて持ち上がる。

「オレも、あんたも、言ってみりゃあ、あの時代の亡霊だ。だから、できればあんたの事、見逃してやりたかった。でも分かった……こうすることが、あんたへの供養なんだってな」

燐りんが燃えるのにも似た青白い光がギンの腕を包み、一瞬速く、ヒエロニユムスの胸元に突き刺さる。

「そんな虚仮威しが！」

意に介さず、と前に出ようとしたヒエロニユムスだったが、不意にその膝からがくつと力が抜けた。

「なにっ!？」

ヒエロニユムスの胸にぼっかりと空いた穴から、ギンの腕を包む物と同じ光が筋となって漏れていた。しかも、その光は、ギンの体に吸い寄せられていくようにも見える。

「何だこれは……」

「あんたの精气。言ってみりゃ、タマシイだよ。猫又の本当の好物はな、ささみでもカツブシでも、ましてや行灯の油でもねえ。……」

人間の魂魄こんぱくさ」

「俺の、魂だと!？」

「ああ。……あんたの魂、苦いなあ。あの頃、浴びるほど味わった、忘れられねえ味だよ」

「ふざけたことを抜かすなっ!」

大上段に振りかぶった腕が、ヒエロニユムスの頭上で一つに融合し、巨大なハンマーのような塊になって振り下ろされてくる。

だが、その一撃はギンの頭を粉碎するどころか、逆に振り下ろした勢いに耐えきれず、砂糖菓子のように脆く崩れ落ちてしまった。

「あばよ。せめてあんたの無念、オレが一生背負って行ってやるよ」

「馬鹿な……純粹アーリア人種たるこの俺が……。ケダモノ如きに……」

輝くギンの右手が、被毛を波立たせてゆっくりと動く。妖しい輝きを放つ五本の爪を食い込ませ、ヒエロニユムスの顔面を掴んだ。

「因果応報って、昔の人は言いました」

砂を握るような儚さをギンの右手に残し、あっさりと最後の決着はついた。

エピソード

夏の花火大会を彩る出店とテキ屋の呼び声が、浅草中に響いている。

その様子を、冴香は、雷門通り脇に組み上げられた特設の物見櫓から見下ろしていた。

「今年も、お嬢様には多大な援助をいただきました」

仲見世通りの商店会長が、丁寧に頭を下げた。それに鷹揚おつように頷いて、冴香は言った。

「新しい提灯も間に合って、良かったですわね」

「まったくでございます。どうぞ今夜は、ごゆっくりお楽しみになつてください」

商店会長が応じる。と、そこで冴香の携帯電話が、シンプルな着メロを響かせた。

『……あー、冴香君であるか』

「あら、マダナイ先生」

『う……む』

「どうなさったんですの？」

『その名前、自分では受け入れたつもりでも、どうにも気持ちの収まりが悪いであるなあ。やはりもう少し何とかならぬであるか？』

「それを決めるのは、先生ではありませんわ。町の皆さんがそう呼んでらっしゃるんだから、慣れてくださいますし。……それで、ご用件はなんですか？」

『ああいや、用があるのは吾輩ではなくてだな……』

電話の向こうで、不意にマダナイの声が途切れた。ややあって、やっと捕まった。例のグループのアジト、突き止めたわ』

切羽詰まったようなティアナの声が飛び込んできた。

「本当ですか？ でも、なぜマダナイ先生の携帯から？」

『……壊されちゃったのよ。失敗したわ』

「どつやら、増援が必要そうですね」

『必要無い、と言いたるところだけど、ぼやぼやしていると逃げられちゃう』

「すぐに向かわせますわ」

電話を切ると、商店会長が、怪訝な目で冴香を見ている。

うつかりしたと後悔しつつ、冴香は、膝の上に乗っかって毛玉のようになっているものの首根っこを掴んで持ち上げると、

「うな」

毛玉がほぐれ、びろんとだらしく伸びたギンが、姿を現した。

何か見てはいけない物を見たような顔をしている商店会長を尻目に、冴香は、ギンの体を脇に退けて、その背中をぼふぼふと叩く。

「ちょっとした商談がありました……。ええ」

「はあ、相変わらずお忙しいことですねあ」

頷いた商店会長の脇を、「ふにゃーっ」と、間抜けな声を上げてギンが通り過ぎていくのを、冴香は目で追う。

櫓の階段に差し掛かったギンが、ちらりと何かを訴えるように冴香を振り返った。

分かっていると、小さく頷いて、冴香は言った。

「と、ところで会長さん。急なお話なんですけど、もしよろしければ今度、会長さんのお店で猫缶など取り扱ったもりはありませんかしらっ」。

「は？」

「“マルシゲ水産”の、“黄金缶”というのが家の猫の好物なんですけれど、中々置いてあるお店がありませんの。家の子ったら、食いしん坊でして、“一度に五缶”も食べてしまいますのよ」

「は、はあ……。ですがうちは、土産物屋ですし……」

ちら、とまたギンを見る。階段を下り際、にゆるりと二股に分かれたギンの尻尾が、尻尾の先と先を合わせた綺麗なハートマークを作って、櫓の下へと消えていった。

おしまい

エピソード（後書き）

最後まで読んでいただいて（…いただいでるよね？）ありがとうございます。ございました。

普段僕は、ゲームのシナリオライターの仕事をしていまして、セリフとト書きだけの世界に生きています。

なので、どこかでぜひ「地の文」というのがある小説にちゃんと挑戦してみたくて、一年前に同人作品として書いたのが、この「猫の手貸すよっ！」です。

中学生の頃から、上野や浅草といった、いわゆる「下町」が大好きで、大人になった今も、作中にも少しだけ出てくる某有名おもちや会社からお仕事をいただいたりしている縁もあり、ぜひ浅草を舞台にしたお話を書いてみたいな〜という思っていて、

「下町に似合うと言えば…やっぱり猫だろう」ということで、ネコマタを主人公にしたお話を考え始めたら……なんかどうも下町関係なくなっちゃった感じです。

それでも、執筆当時から建設中だった東京スカイツリーをフィーチャーしてみたり、何とか浅草の“今”も盛り込みながら頑張ってます。ぺちぺちとコピー&ペーストしながら気付いたんですが、執筆当時はまだようやく東京タワーの高さを超えたぐらいだったんですね…。

少しお話変わりました、本作品の発表形態について少しだけ解説を。この作品は元々、「オーディオブック」用原稿として書き始めました。

オーディオブックとは、その名の通り「音の本」。すなわち、「聞

く小説」です。

以前から仲良くして頂いていたプロの声優さんをお願いし、この小説の内容を丸ごと朗読してもらい、

「真の意味で寝っ転がって楽しめる小説」

という触れ込みで作ってみました。

また、それだけだと楽しみ方が1つだけなので、同じ内容をビジュアルノベル化したもの、iPhoneなどスマートフォン用アプリで楽しめる電子書籍をひとまとめにしてデータ化し、同人イベントで頒布させていただきました。

オーディオブック版は、プロ声優さんの美しく力強い朗読が楽しみ、ビジュアルノベル版は、僕が真夏の浅草を走り回って撮影した(猛暑でしんどかったです)背景写真やBGM・効果音を駆使して臨場感を高めた内容になっています。

もしよろしければ、前書きに記したURLからダウンロード購入ができますので、お求めいただければと思います。

さて、最後になりますが、今後も仕事の合間を見つけて小説作品には挑戦していきたいと考えております。

やはり夏コミを目指して、新作を準備中ですので、もしこの「猫の手貸すよっ!」を気に入ってくださった方がいましたら、今後とも応援よろしくお願い致します。

本業の方も、アトラス様から発売されておりますニンテンドーDS用RPG「ラジアントヒストリア」はじめ、頑張って色々書かせていただいておりますので、そちらもぜひ!w

では、この辺で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7026s/>

猫の手貸すよっ！

2011年6月22日03時10分発行